



## 01：プロジェクトを推進する若手設計担当者としての仕事

- 04 - 07 青山学院大学 マクレイ記念館
- 08 - 09 かほく市総合体育館
- 10 - 11 ヤマサ醤油株式会社 東京支社
- 12 - 13 SAKURA TREE
- 14 - 15 キオクシア横浜テクノロジーキャンパスFlagship棟
- 16 - 17 箱根ホテル小涌園
- 18 - 19 GAREN
- 20 - 23 TTRS研究開発棟

## 02：プロジェクトの中心としての中堅設計者の仕事

- 26 - 29 名古屋シミズ富国生命ビル
- 30 - 33 野村不動産溜池山王ビル
- 34 - 37 安川メカトロレック末松九機株式会社 西日本本社
- 38 - 39 御福餅本家 本社
- 40 - 41 東大阪病院
- 42 - 43 CKD 北陸工場
- 44 - 45 ロジクロス相模原
- 46 - 47 ゆめテラス祇園店

## 03：プロジェクトをまとめるプロデューサーとしての設計者の仕事

- 50 - 65 温故創新の森 NOVARE
- 66 - 67 The Link SAPPORO
- 68 - 69 KARAWANG OUTLET MALL
- 70 - 73 福岡大学病院 本館
- 74 - 75 GRAND MARINA TOKYO パークタワー勝どきミッド
- 76 - 77 聖路加国際大学 聖ルカ礼拝堂
- 78 - 79 旧渋沢邸「中の家(なかんち)」主屋改修

## 04：プロジェクトの枠を超えた幅広い活動

- 82 - 83 DIGITAL COMMONS
  - 84 - 87 留学体験記
  - 88 - 89 2023年度 日本建築学会技術部門設計競技
  - 90 日本免震構造協会創立30周年記念事業  
免震構造アイデアコンペ
  - 91 シミズの構造設計展 遺伝的多様性
- 
- 92 - 95 作品データ
  - 96 - 97 DEWの活動と展望
  - 98 - 99 委員一覧・組織図

# DEW

stream 2024

## ひとりひとりのDEW、それぞれの想い

— 近作プロジェクトを通じて —

vol. **83**

## stream DEW：潮流を成す“雫”の活動

「stream DEW」の活動は、設計部ニュースとして1979年に創刊されながらも休刊となっていた冊子「STREAM」の復刊から始まりました。設計本部内の若手を中心に編集委員を任命し、2007年11月に「stream DEW67」を発行、以来編集委員を交代しながら毎年発行しています。「stream DEW」には個人の創造性の発露(雫=DEW)が従業員相互の啓発・情報共有の源であり、それが大きな流れ(潮流=stream)となるという意味を込めています。その後、活動の幅を広げ若手設計者が自由かつ主体的に様々な活動を行う場として続いています。



TTRS研究開発棟



GAREN



箱根ホテル小涌園



キオクシア横浜  
テクノロジーキャンパス Flagship棟



SAKURA TREE



ヤマサ醤油株式会社  
東京支社



かほく市総合体育館



青山学院大学  
マクレイ記念館



元木 智也  
入社7年目担当 意匠設計



寺田 繁史  
入社4年目担当 意匠設計



高 悠哉  
入社8年目担当 電気設計



清水 亮輔  
入社4年目担当 意匠設計



山本 大地  
入社6年目担当 意匠設計



安田 諭史  
入社7年目担当 意匠設計



佐藤 啓明  
入社11年目担当 設備設計



五寶 智美  
入社4年目担当 意匠設計



吉村 環紀  
入社5年目担当 意匠設計



西野 安香  
入社7年目担当 意匠設計



陳 偉光  
入社9年目担当 設備設計



瀧澤 千尋  
入社5年目担当 構造設計



西田 愛  
入社3年目担当 構造設計



中神 陽平  
入社2年目担当 構造設計



靖本 夏紀  
入社10年目担当 構造設計



佐野 達彦  
入社4年目担当 構造設計



古本 美希  
入社4年目担当 設備設計



光本 ゆり  
入社2年目担当 設備設計



馬込 仁総  
入社4年目担当 電気設計



藤井 孝行  
入社4年目担当 設備設計

# 01 episode

## プロジェクトを推進する 若手設計担当者としての仕事

入社後、研修期間を経て、主に本社設計部の各専門ライン部署に設計担当者として配属されます。各専門分野のエキスパートと共に、与えられた課題に取り組みながら実務経験を積み重ねることになります。本章では、様々な方の助力を得ながら、与えられた課題に真摯に取り組む若手設計者の仕事を紹介します。（入社年度目安 1年目〜10年目）

学生の活動の様子がキャンパスの風景を形成する  
— 都市型キャンパスでの居場所・図書館 —



AOYAMA GAKUIN UNIVERSITY MACLAY MEMORIAL HALL  
青山学院大学 マクレイ記念館

アクティビティ・ベースド・ライブラリー  
アクティビティから空間を考える「アクティビティ・ベースド・ライブラリー」をコンセプトに、アクティビティの目的や種類に応じて「多様な居場所」や「環境」を学生が自ら選択して過ごす空間を目指しました。学生が居心地よく学べる「知的な居場所」を作りたいとの大学の想いと共にスタートしたプロジェクトです。(西野)



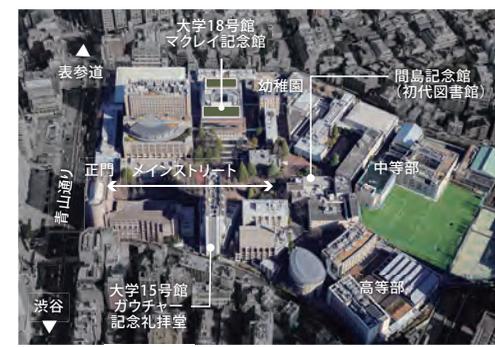
ガレリア

キャンパスの新たな結節点  
ここをベースに学びが広がる

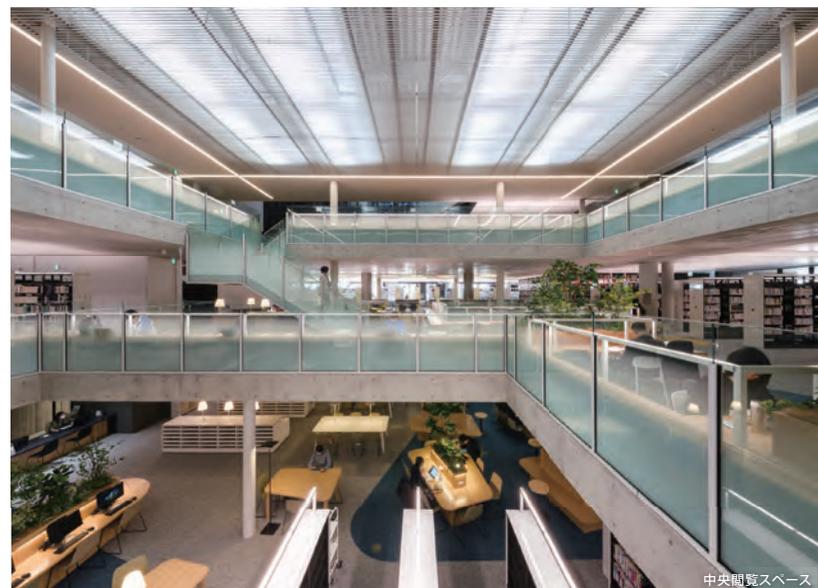
マクレイ記念館はキャンパスの中心に位置し、接階は周囲に抜ける出入口を複数設けました。これらの動線の結節点には、学生が集まる場を計画、周辺の外部環境もウッドデッキや芝生を敷き自然と人が留まる場として整備しました。マクレイ記念館は学生生活の拠点アカデミックな活動の拠点となる事が期待されます。(西野)



メインストリート側外観



表参道  
大学18号館  
マクレイ記念館  
幼稚園  
間島記念館  
(初代図書館)  
中等部  
高等部  
正門  
メインストリート  
大学15号館  
カウチーニ  
記念礼拝堂  
渋谷

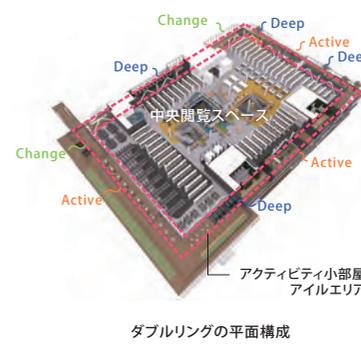


中央閲覧スペース

多様な居場所  
ダブルリングの平面構成

図書館エリアでは中央閲覧スペースに対し、外周部は多様なアクティビティに対応可能な小部屋(通称「アクティビティ」)としてダブルリングの構成としました。

中央閲覧スペースは全館避難安全検証法により吹抜をすらしながらつなげた大空間とし、外周部の小部屋「アクティビティ」に対して、より「Active・Change・Deep」に過す居場所として計画しました。(西野)



アクティビティ小部屋  
アイルエリア  
ダブルリングの平面構成

過ごす場を主体的に選択する

アイルは一つとして同じ場がない多彩な空間です。また屋外環境を取り入れ自然通風を積極的に利用し、温湿度条件を緩和したムラのある環境を許容し、快適さを感じる環境を学生が「主体的に」選択する場としました。飲食可能なChangeでは気流感のある空調方式を採用し、においの滞流を防止、集中して学習するDeepでは音の出ない放射パネルでの空調に加えて照明の色温度を低めにするなど、意匠的・設備的に多様な環境としました。(西野・藤井)



アイル: Active



アイル: Deep



アイル: Change



アイル: Active



トイレ(W)



トイレ(M)

スレながら上下をつなぐ階段



# 多様なアクティビティと地域をつなぐアリーナ

「紡ぐデザイン」でかほくらしく愛される場所を目指して



KAHOKU ARENA  
かほく市総合体育館

山岸 俊之 入社32年担当 構造設計  
 油野 登梧 入社3年担当 構造設計  
 稲山 貴志 入社9年担当 構造設計  
 岡山 英樹 入社36年担当 意匠設計

靖本 夏紀 入社10年担当 構造設計  
 吉村 環紀 入社5年担当 意匠設計

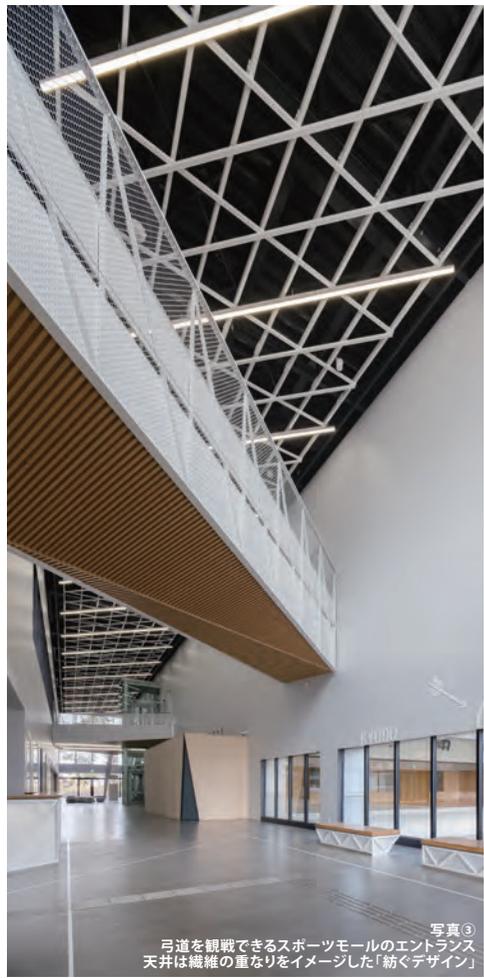


写真① トレーニングルームや柔剣道場など多様な活動とつながるスポーツモール  
 図① スポーツモールアクソメ

地域のにぎわいの核となる  
 「かほくスポーツキャンパス」  
 本計画は石川県かほく市の「新たなスポーツ文化の拠点」として総合体育館を中心としたエリアを整備・運営するPFI事業です。プロスポーツ対応のアリーナ、柔剣道場、弓道場、トレーニングルームに加え、キッズルーム、マルチに使えるルーム等様々な機能が内包されています。「かほくスポーツキャンパス」をコンセプトに、スポーツをする人もしない人も様々な世代が集い、周辺の学校・図書館と連携して地域のにぎわいを創り出す拠点を目指しました。  
 (吉村)

## 多様な活動とつながる スポーツモール

スポーツキャンパスの核として、ここに来るだけで自然と多様なアクティビティが目に入り、自分もやってみたいというきっかけが生まれる場所とすることを目指しました。たどり着いたのが、アリーナと武道場エリアの間に地域の方々が自由に抜け抜ける共用空間「スポーツモール」を設けるプランです。スポーツモールで休憩しながら弓道や柔道・剣道を観戦したり、アリーナで運動する子供たちの様子を見守ることができ、コンパクトかつにぎわいが集約するプランを実現しました(写真①③、図①)。(吉村)



写真③ 弓道を観戦できるスポーツモールのエントランス  
 天井は繊維の重なりをイメージした「紡ぐデザイン」

## 地域にひらくアリーナ

一般的に体育館というと大きな箱として地域に対して閉じたボリュームになりがちです。本計画ではアリーナの四隅をカットしてコーナーウィンドーという窓にすることで、アリーナでのアクティビティを地域に発信する顔つくりを行いました(図②、写真④)。(吉村)

## 「紡ぐデザイン」を実現する アリーナの構造体

かほく市は繊維業が盛んで特にゴム入り細巾織物の生産が日本のシェアを誇ります。かほくらしい体育館として地域の方々へ愛着を持ってもらうため、この繊維のモチーフを取り入れた「紡ぐデザイン」を建物の随所に取り入れました(写真②③⑤⑥)。

アリーナの屋根構造は斜格子トラスを採用し、「紡ぐデザイン」を構造体で直接表現しています。大空間では一方向トラスが一般的ですが、本計画では斜格子とし、部材応力のばらつきを少なくしました。相対的に応力が大きくなってしまう四隅は部材断面を変えるのではなく、トラスの密度を増やすことで部材を均一化しました。四隅に追加したトラスの下弦材は、一般部の下弦材と上下に交差させ接合部を単純化し、繊維が織りなす様子を表現しています(写真⑦)。下弦材は溝型鋼を2つ合わせることで、シャープなラインが美しく交わる構造としました(図③)。

## 地域と共創するアリーナへ

PFI事業ならではの取り組みとして、地元の繊維企業・中学生と一緒に、「繊維の廃材」残糸でグラフィックサインを共創するワークショップを行いました(写真⑥)。共創した作品は渡り廊下に壁画として飾られます。学生にとって愛着のあるスペースとなり、今後も残糸を活用する取り組みを発信する場となります。

PFI事業として引き続き運営面から市をサポートしていきます。これからもこのアリーナがスポーツをきっかけに人と人、人と文化をつなぐ場として育っていくことを願っています。(吉村)



写真⑥ 繊維の廃材をつかったワークショップ  
 図③ 溝形鋼の下弦材  
 写真⑦ 上下に交差した織りなすトラス



写真④ アクティビティを発信するコーナーウィンドー  
 図② 四隅をカットして地域にひらく  
 写真⑤ 繊維をイメージしたパターンの外装デザイン



写真⑧ 「紡ぐデザイン」の斜格子トラス屋根とV字柱で構成されたアリーナ  
 かほく市に本拠地があるハレーボールチームのホームゲーム開催アリーナとなる

# 「新たな価値を醸造する」オフィス

「質の高いアウトプットを産み出す」場をつくる



YAMASA CORPORATION  
TOKYO OFFICE  
ヤマサ醤油株式会社 東京支社

中神 陽平 入社2年目担当 構造設計	馬込 仁総 入社4年目担当 電気設計
佐藤 啓明 入社11年目担当 設備設計	伍賀 智美 入社14年目担当 意匠設計

## 企業の新しい時代づくり

本案件は、江戸時代から続くヤマサ様の歴史と伝統を継承し、新しい時代へ向けたさらなる発展への思いが込められた、支社の建替計画になります。

旧社屋は隣接する首都高速道路の開通以前からあり、周辺環境の変化に対応した建物を提供することが急務と感じられました。また、社員の働きがいや雇用の充実に結び付けたいといった新たなビジョンに応えるべく、質の高いアウトプットを産み出す場づくりを念頭に取り組みました。(五寶)

## 質の高いオフィスへの応え

首都高速道路に隣接する敷地条件であることから、騒音への配慮と事務所の快適性を両立させるため、首都高側にバツアとなる3層吹抜空間を設けたことが大きな特徴です。この空間には事務所エリアの動線をスムーズにする直階段を設け、社員のコミュニケーションを誘発します。外観は、歴史の積層とさらなる未来への成長を意図し、天に向かつて伸びゆくイメージをかたちにしました。外装材はPC板とし、石器質の施釉タイルを埋込み、レンガ造のような独特の質感を表現しています。

こうして、一見、外からは恒久的な重厚感を感じさせながらも、内部にのびやかに開かれた柔軟性のあるオフィスを計画しました。(五寶)

## 豊かな吹抜空間の実現

トップライトの環境効果や外装の構造検討など、現業や生産技術本部などと協議を重ね、柱やスリット窓が軽やかで、かつ環境性能も併せ持つ豊かな吹抜空間を実現しました。

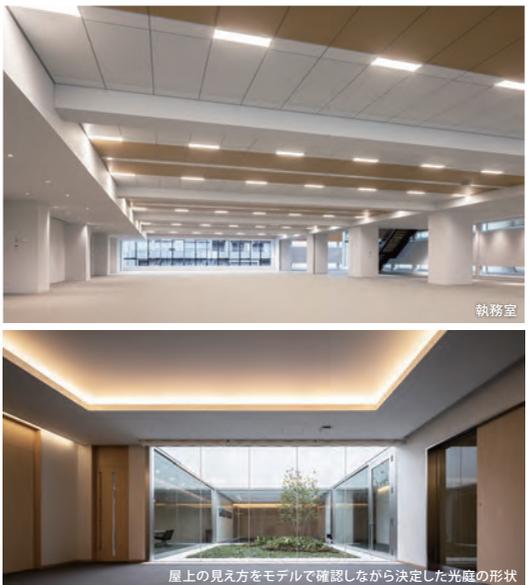
吹抜部の丸柱は主に鉛直力を支持し、地震力を負担させない計画としています。建物に作用する地震力は粘弾性ダンパーを配置した制振構造のメインフレームで負担させています。地震力から解放された吹抜部を繊細な構造部材で構成し、かつ建物の顔となる南東部のファサード面に設けたアルミ



ACWから吹抜に豊かな光が射し込む



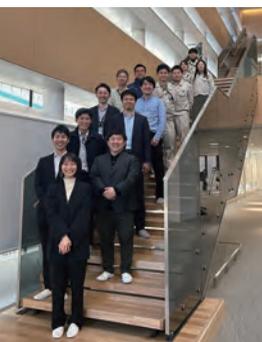
執務室



屋上の見え方をモデルで確認しながら決定した光庭の形状



食品会社としての家庭的なあたたかさや清潔感を感じさせるエントランスホール



## ワンチームで作りあげる

本プロジェクトでは設計・現業ともに若手が多く、チーム全体としても若者を育てようという気運が感じられ、フラットなコミュニケーションが行える良い関係を築きました。一方で、施主の建築に対する造詣が深く、それゆえデザインに限らずおさまりや機能面での細やかな説明が求められ、チーム一丸となって丁寧な説明を心掛けました。

建物完成後、吹抜を見上げながら満足した表情を浮かべられた施主の横顔を見て、担当者全員がこれ以上ない喜びを感じました。(五寶)

# 誰もが見上げる SAKURA TREE

— 偏光ガラスと雁行カーテンウォールが魅せる表情 —



SAKURA TREE

**SAKURA TREEへの想い**  
学習塾を経営する臨海セミナーの創立50周年を記念した本社ビルです。「SAKURA TREE」には、臨海セミナーの前身が「さくら塾」であることと、生徒の笑顔が咲く、未来への希望を象徴する建物となるように、との想いが込められています。桜の木のように誰もが見上げる、アイコンニックなファサードを目指しました。(安田)

## オンリーワンの外装

横浜駅前の鉄道敷に開けた立地の特徴を活かし、車内からも目を引く、様々な表情を見せる唯一無二な外装デザインを提案し、施主の心を掴みました。この外装デザインを実現するために、上下で形状が切り替わり雁行するカーテンウォール

・見る角度で色調が変わる偏光ガラス  
・流れるような3次元化粧フレーム  
とし、眼下に広がる鉄道敷からグラデーションに見え方が変化するファサードを目指しました。

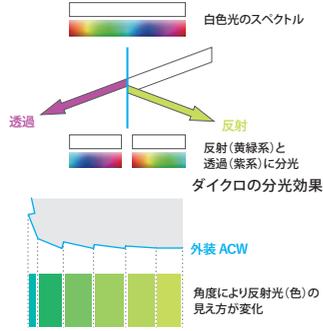
複雑な形状の外装の納まりは、特に苦勞した点でもあり力を注いだ点でもあります。社内の専門部署や外装メーカーと協働して新型カーテンウォールを製作し、止水性や製作性にも配慮しました。また複雑な下地鉄骨形状や本体鉄骨との納まりを原寸スケッチを描き理解し設計図に落とし込みました。さらに製作段階でファスナー位置等をひとつずつ調整することでファサードのコンセプトを実現しました。(安田・西田)

## ダイクロイックコーティング ガラス採用への試み

ダイクロイックコーティングガラス(偏光ガラス)の外装への採用は、執務室に採用する例が国内でも他に例がなく、様々な状況を想定しながらの挑戦でした。社内外の協力も得ながら、品質・工期・維持メンテナンス面での課題を解決し実現することができました。思い描く色味のガラスとするため何度もサンプルを試作し、中国工場にも足を運ぶ自らの目で確認しました。(安田)



流麗なシルエットの外装化粧フレームを纏いR形状と雁行形状が切り替わるガラスカーテンウォール



中国工場での偏光ガラス製品検査



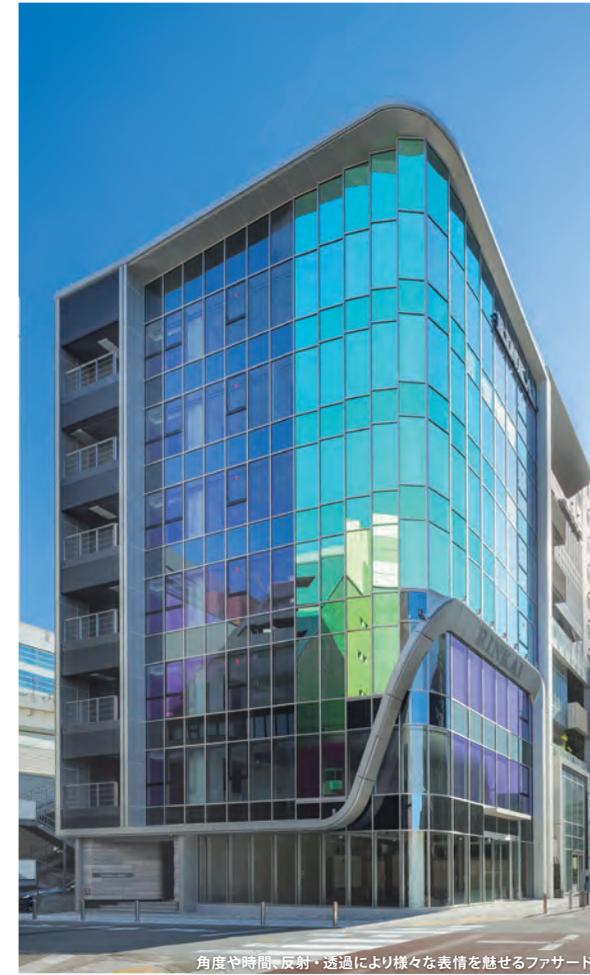
満開の桜のようにライトアップされる夜景



青の空間の中にLEDビジョンの演出が映えるエントランス

**高効率で広がりを感じるオフィス**  
コンパクトな建物ながらもその中で、専有面積の最大化も課題でした。設備コアを隣地側に集約したり、視界に入る柱をコーナーの1本のみとし、前面の2面道路に対してフルオープン開放的な執務空間を実現しました。エントランスでは、奥に向かって天井を下げることで奥行感を、鏡面のパネルを採用することで視覚的な空間の広がり強調しました。(安田・西田・光本)

コンパクトな建物ながらもその中で様々な要素が絡み合う難しさがありましたが、細かな部分まで皆で議論し詰め切つて創り上げることができ、「他にない素敵なオフィスビルとなり大変満足している」との施主のお言葉を頂けたことは心から嬉しく思いました。こうして生まれた「SAKURA TREE」が、横浜の新たなアイコンとなり花開くことを願っています。(安田)



角度や時間・反射・透過により様々な表情を魅せるファサード

研究・技術開発拠点としての魅せるR&D棟  
 — 企業ブランドをイメージしたデザイン —



KIOXIA YOKOHAMA TECHNOLOGY CAMPUS  
 FLAGSHIP BUILDING  
 キオクシア横浜テクノロジーキャンパスFlagship棟

魅せる外観デザイン

本案件は、キオクシア(株)のFlagship棟として、研究・技術開発の拠点となる施設です。株・東芝から分社化後の新築施設ということもあり、案件に対して施主は、キオクシアを象徴するような建物にしたいという強い思いがありました。

外観は施主の製品(フラッシュメモリー)をイメージした「積層セル」をコンセプトとし、部署内デザインコンペを実施しました。その後、施主の社内投票などを経て、デザインを決定しました。

3色のサンドイッチパネルをランダムに配置することで、ブランドイメージを表現しつつ、躍動感のある外観デザインとしています。

デザインと施工性の両立

VIP来客を迎える来客エントランスは、ランダムな外観デザインを踏襲した御影石の石壁としました。デザインを考える上で注目したのが、石目の強い石材と化粧目地の配置です。石目の強い石材を使用した事例を見学し、イメージを固め、石材を選定しました。石目に合わせて化粧目地を入れることで、1枚の石材でも異なる石材が並んでいるように見えます。化粧目地の位置は2パターンとし、馬貼りすることで、施工性を確保しつつ、様々な幅の石材をランダムに配置したようなデザインを実現しました。



南側外観



来客エントランス石壁



来客エントランス

従業員の主要動線となる

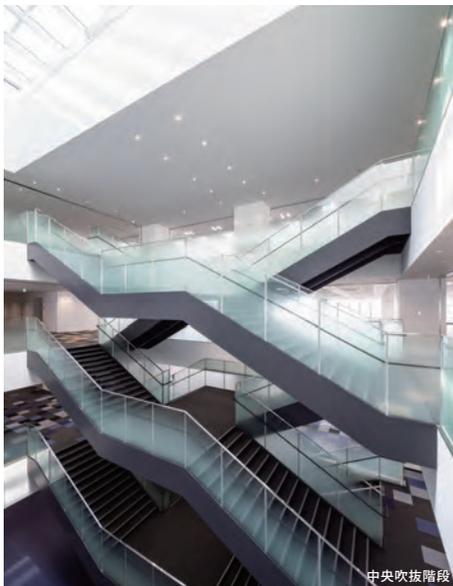
明るい中央吹抜

フロアを跨いでの交流を促したいという要望で、執務フロア中央3〜6階に13×10mの吹抜と、幅5.5mの大階段を計画しています。吹抜上部にはトップライトを設け、自然採光を確保することで、明るく、人が集まってくる共用部を目指しました。

トップライトの計画においては、メンテナンス性に配慮して必要最低限の大きさとしています。3Dモデルにより、年間の入射光シミュレーションを行い、施主とイメージを共有しながら、空間を構築していきました。

また、熱環境を阻害しないこと、吹抜周りが夜間も明るいことが求められたことから、熱環境・照度シミュレーションを実施し、トップライトのガラス種類や換気方法・照明の配置を検討しました。

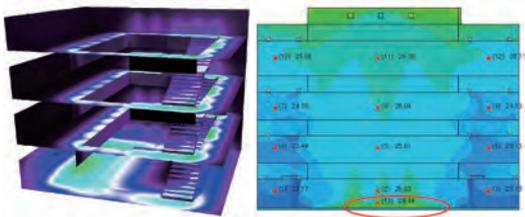
吹抜周りは階毎に設定したフロアカラーを基調としたタイルカーペットをランダムに配置することで、外観デザインを踏襲したデザインとしています。中央吹抜周りが各フロアのシンボルとなり、明るく活力のある空間を目指しました。



中央吹抜階段



入射光シミュレーション



熱環境シミュレーション

照度シミュレーション

企業発展の拠点を目指して  
 お客様と協働して、外観から内装まで作り込むことができたプロジェクトでした。Flagship棟として、広く企業ブランドを発信し、お客様の更なる発展の拠点となっていくことを願っています。(山本)



メインエントランス

場の記憶／風景の継承

— 変わらない自然と変わりゆく時代の中で、場所の特性を最大限に引き出す —



高 悠哉 入社8年 担当 電気設計  
 清水 亮輔 入社4年 担当 インテリア設計  
 古本 美希 入社4年 担当 設備設計  
 滝澤 千尋 入社5年 担当 構造設計

HAKONE KOWAKIEN HOTEL  
 箱根ホテル小涌園



外観(東側鳥瞰)



借景の緑を感じながら過ごすことのできる客室

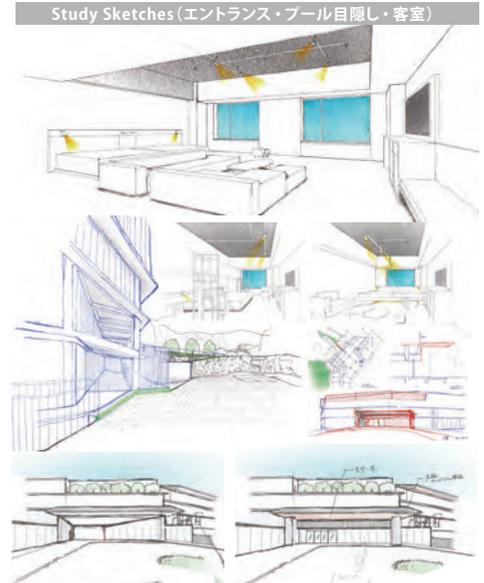
訪れる人を迎え入れるエントランスデザイン



【旧】エントランス・車寄せ



【本計画】エントランス・車寄せ



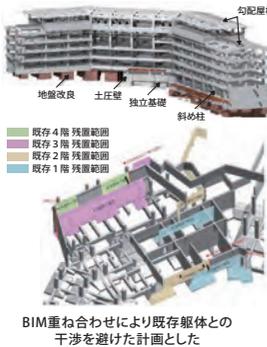
Study Sketches (エントランス・プール目隠し・客室)



ロビー・ラウンジ



高さ制限の中で、開放的な空間を実現する断面計画



BIM重ね合わせにより既存躯体との干渉を避けた計画とした

遠景に伸びる山々の借景と、近景に広がる箱根積みの岩肌に囲まれた当該計画地は、戦前の明治期より、財閥の別荘地として開拓され、歴史的な文脈も持ち合わせた由緒ある敷地です。本計画では、これまでに受け継がれてきた悠久の豊かな自然や、時を重ねて育まれた場所の歴史性を、うつろう現代の文脈の中で丁寧に取り継ぎながら、新たな時代にふさわしい体験のできるホテルとすることを目指しました。

歴史の継承、自然との調和

1959年、建築家吉村順三氏の設計で建設された旧ホテルは、風景に対して「へ」の字に両翼を上げた建物配置により、遠方の山々や近景の眺望を取り入れながら、起伏豊かな敷地の等高線に調和する水平基調で端正な建物でした。本計画では、敷地の方位や周辺の山々の風景、豊かな起伏から導かれた旧ホテルの配置計画や、外観の水平基調のデザインを継承するとともに、内部からは周囲の風景を印象付ける共用部を各階に設けることで、より一層自然と調和し、自然を感じることで、空間構成としました。

敷地のポテンシャルを活かした空間構成

2層にわたるガラススクリーンが遠景の山々や庭園の眺望を借景として強く印象付ける4階のエントランスロビーを中心に、1階には庭園と一体的に利用できるレストラン、各階両翼に客室、最上階には空や遠景の山々を望む大浴場・個室風呂を配置し、建物全体で自然を感じることで、空間体験を計画しました。次世代型リゾートホテルとして、ワーケーションに対応するラウンジや自動バゲージキーパー、オールキャッシュレス対応等の設備も兼ね備えることで、往時の自然や歴史的な背景のみならず、現代に求められる機能を備えた、新たな休息の場、自然と調和した憩いの空間を計画しています。

箱根の杉並木をイメージしたロビー空間は、神奈川県産の木材を内装に多用し、箱根の自然に包まれるような環境やSDGsに配慮した計画としました。ロビーのフロントバックには、旧ホテルの外装で用いられていた穴あきブロックを再生し、歴史や記憶を継承する象徴的なアイテムとして意匠的に設けています。インテリアは、アートワークも含め旧ホテルから受け継がれた豊かな自然、草木、花、鳥をモチーフとして、パブリックの家具には神奈川県産無垢材を多用し、素材や形・色で各階を特徴付け、全館を通して豊かな自然とのつながりを感じる計画としました。

デザインと施工性をふまえた架構計画

外観は各階の小庇を基調とし、軒や屋根による日本的性格の表現をもとに計画された多重庇のデザインとしました。水平な小庇の連続は、建物ボリュームを分節し、陰影や奥行きを醸成するとともに、客室の日射負荷低減にも寄与します。この小庇をサイトPCとすることで、施工上の梁型枠・仮設足場としても利用され、急峻な地形における足場を削減するとともに、施工時にける豊かな自然への影響を最小限にする役割も果たしています。下層部は斜め柱にすることで、新築基礎と既存石積との干渉を避け、客室面積を有効に活かせる架構計画としました。

(清水・滝澤・古本・高)

## 現象的な表情をもつ商業ビル

— 時を重ねるごとに価値を高める建物を目指して —



寺田 繁史  
入社4年目担当 意匠設計

川西 高弘  
入社27年目担当 意匠設計

GAREN

### 「経年優化」をかたちに

計画地は銀座三丁目中央通りに面する一等地です。周辺エリアに複数の建物を所有するクライアントは、高級ブランドの店舗が立ち並び個性的な外観の建物が多く存在する街並みにおいて高級感を醸し出すだけでなく、時間とともに価値が高まっていく建物を目指していました。

建物のコンセプトを体現するビル名称「GAREN」は、ドイツ語で「発酵」を意味する言葉です。外的要因によって時が経つほど味わいを深め価値を高める「発酵」という現象を、周囲との豊かな関わり合いによって魅力を増す建物に重ねています。そしてミツカン酢に通ずる概念だけでなくG（銀座）とN（中産産業）がBe動詞（ARE）で繋がることで土地との繋がりを表します。煌びやかな街、銀座で人や自然の力を取り込みながら、凍とした存在感を示す「GAREN」。時とともにしなやかに変化しながら静かにこの街を見守り、人々を包みます。年を重ねるごとに熟し、深みを増す美しい人生のような設えを目指し計画しました。

### 現象的な表情を目指して

中央通りに面するファサードはクライアントの思い入れも強く、初期段階から理想の計画を共に模索してきました。外観デザインはミツカンの心である酢に通じる液体のような奥行き感と光の乱反射による煌めき、「Pale Gold」の柔らかな色合いを表現しています。

これらを表現するために層状にマテリアルを重ね、外部側からガラスカーテンウォール、屏風状ガラススクリーン、金属製すだれ、網入りガラス（防火設備）の4層構成としました。構想初期から模型を作成し、光がどのように反射し煌めきを生み、奥行き感を創出するかスタディを繰り返し、実寸模型では実際に清掃を行う管理会社を含めて協議を行い最適な形状を模索しました。

ファサードに仕込んだ照明と屏風状ガラススクリーンの反射効果で、中央通りの歩行者に対して万華鏡のような光が奥行き感を演出します。金属製すだれを合わせて構成することにより自然現象のような特徴をもちつつ、気品のある穏やかな表情をもつファサードが実現できました。

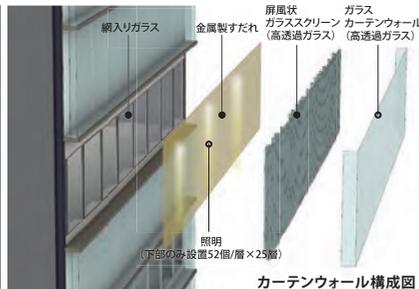
### 「Biophilic GINZA」創出

「Biophilic」は、生命や自然を表す「バイオ」と、愛好や趣味を意味する「フィリア」を組み合わせた造語です。直接的な自然間接的な自然、及び空間と場所の条件を使用して居住者の自然環境への接続性を高めます。多様なテナントに対応しフレキシビリティの高い施設を実現するため、人が本能的に求める自然の要素を建築に取り入れました。

中央通りに面する外壁には自然光を建物内部に引き込むダクトを設け、光シャワーから降り注ぐ反射光は木漏れ日のように不規則で柔らかな光で空間を照らします。ガス灯通り側エントランスは上部に植栽を設け、銀座に居ながら緑を感じる空間を創出します。室内は南北方向に窓を設け、機械換気に頼らず風の抜ける建物となります。自然の力を取り込みながら、時とともにしなやかに変化し静かに佇む姿は、建物だけでなく街並みに対しても「経年優化」を助長し続ける存在になることを願っています。（寺田）



光の反射により立体的に映る屏風ガラス



カーテンウォール構成図



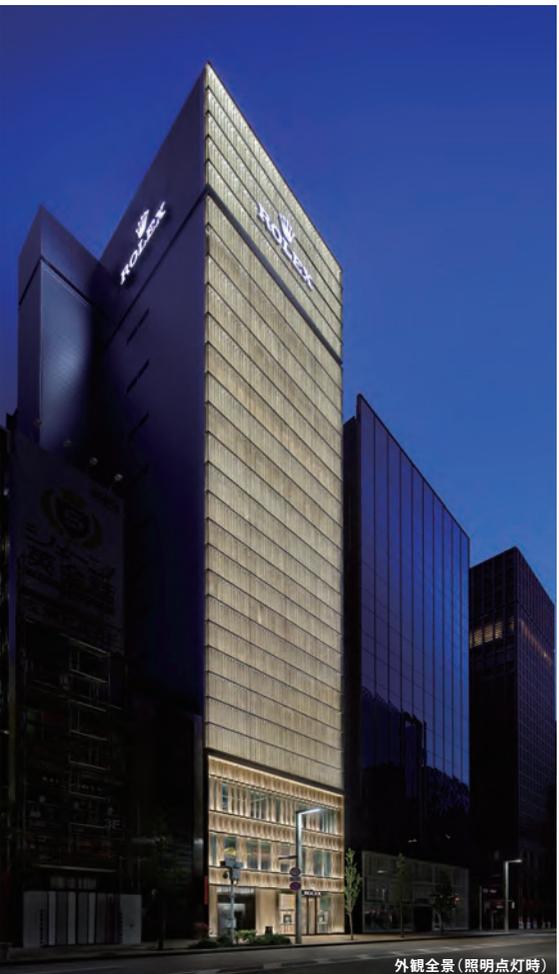
ELVホール断面図

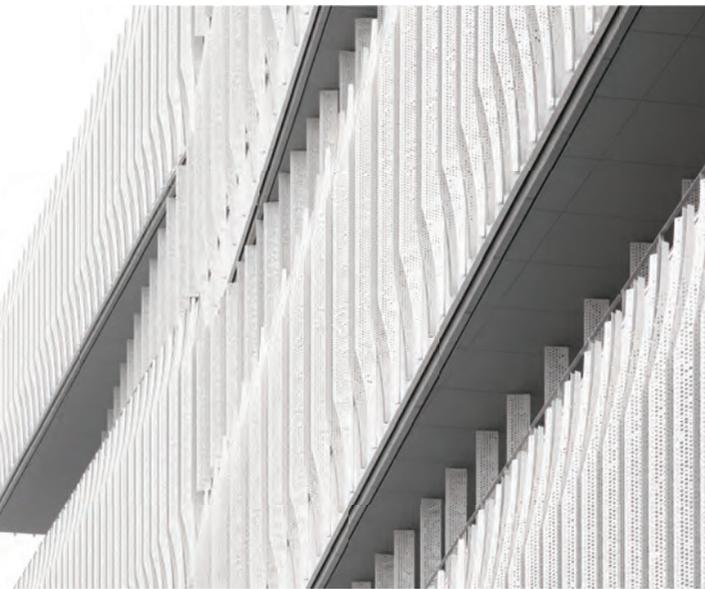
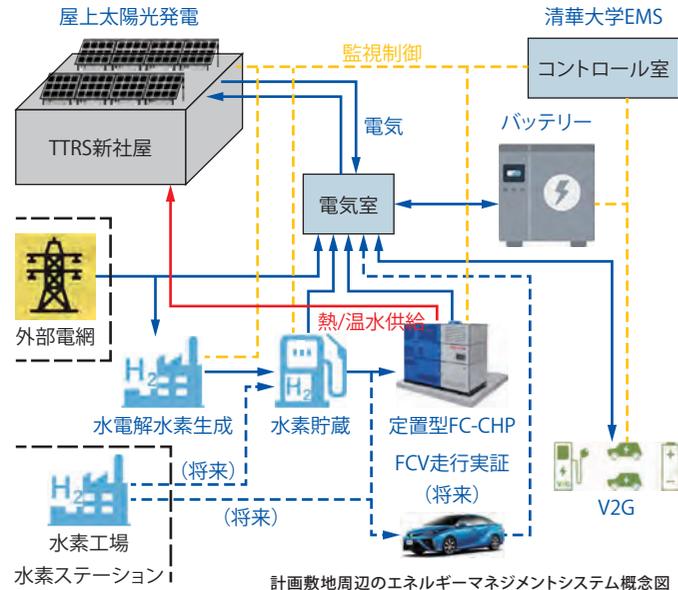
光シャワーが降り注ぐELVホール



低層部外観

外観全景（照明点灯時）





TTRS PROJECT  
TOMOYA MOTOKI / CHEN WEIGUANG

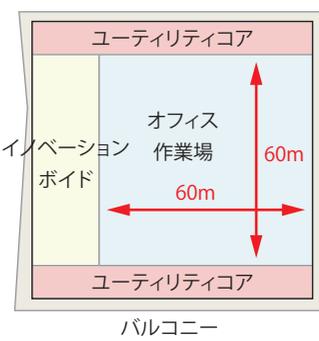
未来のモビリティ社会を実現する先端研究開発拠点  
— 社会・個人・会社の発展を実現するイノベーションセンター —

計画敷地周辺エリアは国家肝入りの自動車産業・技術の集積エリアとなっています。現在自動運転やFC等の技術革新地区へ転換中で、敷地周辺エリアには工場、物流施設の他、先端技術を主軸とする企業が進出し、再開発が進められています。また、自動運転技術開発・誘致にも積極的であり、計画敷地のある嘉定区内には公道実証実験走行エリアが設けられています。加えて、FC水素領域において中国トップである同済大学が近隣にあり、中国の水素社会を支える産官学連携・研究開発が推進されています。本計画ではそれらの各種研究開発だけでなく、清華大学と協力してカーボンニュートラル達成に必要なエネルギーマネジメント技術の蓄積が行われています。設備更新性が高い本計画では素早く最新技術の実証実験に対応でき、水素応用技術の普及推進や、将来的なカーボンニュートラル達成に向けたエネルギーコスト低減に貢献することができます。(陳)

## 中国の技術革新地区における

### 先端環境設備の導入

(元木・陳)

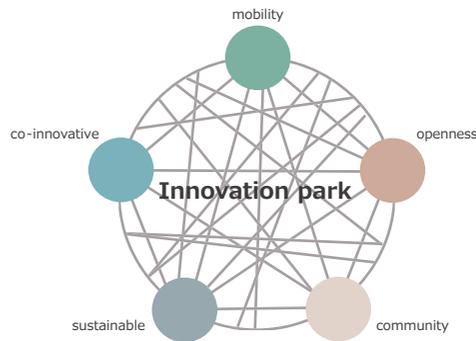


## 計画の自由度が高いプランと 設備更新が容易なバルコニー

先端的な施設の高集積性を表現するウィングルーバーは、底が浅い部分はピッチを小さく、底が深い部分はピッチを大きくすることで、効率的な熱負荷低減を実現するとともに、知の集積を表現する積層ボリュームのデザインを強調することに寄与しています。(元木)

## 先進性と知の集積を表現する ウィングルーバーファサード

本計画は未来のモビリティ社会の実現に向けた、中国における先端研究開発拠点です。自動車移動のための手段からモビリティへと進化を遂げようとすると同様に、人・物・情報がインターネットされた「イノベーション」を誘発する空間であることが必要と考えました。また、敷地に単に建物を建てるのではなく、地域社会のこと、地球環境のこと、そしてここで働く研究者・社員のことすべての発展に寄与できる建物としたいという想いから、自然や社会に開かれ、自然環境と調和した公園「パーク」のような場がふさわしいと構想しました。これら2つの場のイメージを掛け合わせ、プロジェクトコンセプトを「イノベーションパーク」として位置づけました。(元木)



## モビリティ社会を見据えた 「イノベーションパーク」



1F: エントランス、整備場



2F: 食堂、展示スペース



4F: 研究室



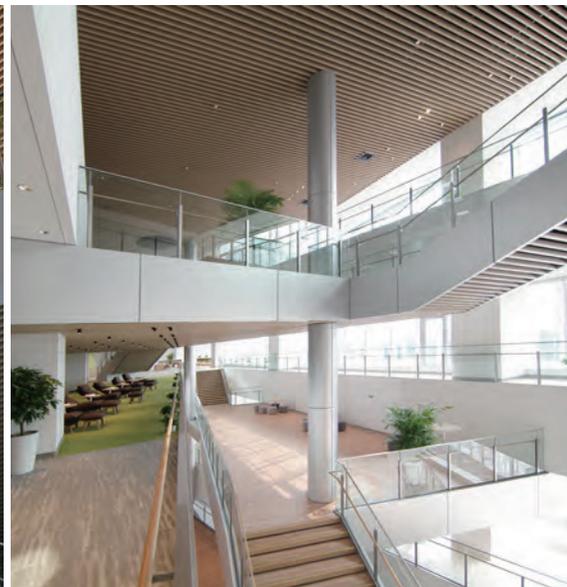
5F: オフィス、役員室



6F: オフィス、整備場



イノベーションボード



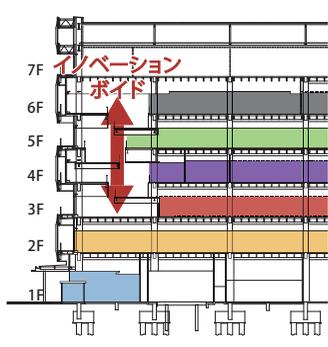
## 各部門のユーザーWGとの 最適な職場環境の模索

新社屋での業務に向けて、適切な働き方を見出すために、

- ① 二日の業務の流れの整理と新社屋に必要な機能のプレス
- ② プレスト内容をもとにしたA/B/Wソーニングの提案・協議
- ③ パースによるイメージ合意形成の3ステップで各部門ごとに協議し、最適な職場環境を構築できるように建屋計画に反映しました。(元木)

## 各階で異なるプランと インテリアデザイン

各部門のユーザーとのWGを経て、華美ではなく質実剛健なたちで先進性を表現する、という共通テーマをベースに、各部門ごとに独自性・個性を持った、各階すべて異なるオフィス・研究エリアのプラン構成とインテリアコンセプトを実現しました。ユーザーの想いがそのまま立ち上がった画一的ではないワークスペースは、働く人々のモチベーションを向上させ、働く人々の中国の技術革新地区の中でも研究開発をリードする存在として、今後発展し続けることにつながると考えています。(元木)

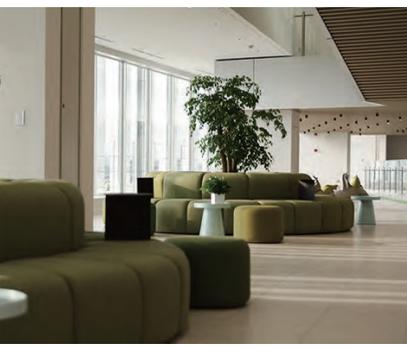
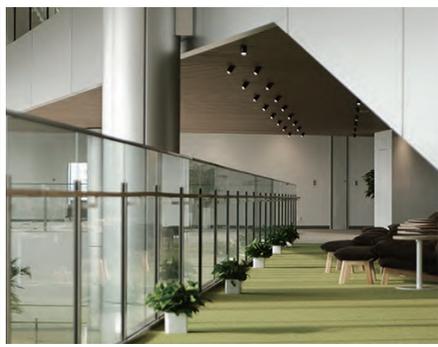


ものづくり/インダストリアル  
自然/ナチュラル  
未来創造/クリエイティブ  
仲間づくり/ターミナル  
落着き/ホームタウン  
先進/シンプル  
各階のインテリアコンセプト

## 各階の空間を統合・刺激する イノベーションボード



3階から6階までつながるイノベーションボードの周りでは、適度な自然光とともに、各階の異なるインテリアデザインを取り込んだ豊かな空間を感じることができます。また、踊場部や高天井部の上部にはメンテが必要な機器は配置せず、一部床暖房を採用することで安全性と快適性を両立しています。イノベーションボードを中心に各部門間の刺激と協創を生み出し、「イノベーションパーク」として世界をけん引する先端研究開発拠点となることを期待しています。(元木・陳)



プロジェクトの中心としての  
中堅設計者の仕事

若手設計者として様々な実務経験を積んだ後、お施主様や関係者とコミュニケーションを図りながら、企画立案から竣工まで、一貫してプロジェクトを取りまとめる機会が多々あります。本章では、主担当者としてプロジェクトの主役としての役割を果たす中堅設計者の仕事を紹介します。（入社年度目安 5年目〜15年目）



名古屋シミズ富国生命ビル



国立 篤志  
入社24年目担当 意匠設計



大柳 聡  
入社12年目担当 意匠設計



扇野 裕大  
入社4年目担当 意匠設計



木村 慎太郎  
入社1年目担当 意匠設計



浅見 拓馬  
入社1年目担当 意匠設計



小嶋 一輝  
入社11年目担当 構造設計



木内 佑輔  
入社6年目担当 構造設計



盛川 岳穂  
入社3年目担当 設備設計



石川 栄一  
入社27年目担当 電気設計



野村不動産溜池山王ビル



大柳 聡  
入社14年目担当 意匠設計



乗越 由香  
入社10年目担当 意匠設計



西川 航太  
入社13年目担当 構造設計



水落 秀木  
入社30年目担当 木質建築推進



馬込 仁総  
入社5年目担当 電気設計



稲垣 大侑  
入社1年目担当 設備設計



安川メカトロック末松九機株式会社  
西日本本社



つく田 将紀  
入社8年目担当 意匠設計



齋藤 剛寛  
入社7年目担当 構造設計



小林 遼一  
入社10年目担当 設備設計



森谷 真帆  
入社7年目担当 電気設計



御福餅本家 本社



坂本 達彦  
入社8年目担当 意匠設計



東大阪病院



竹内 圭佑  
入社8年目担当 意匠設計



CKD 北陸工場



細川 良太  
入社9年目担当 意匠設計



宮村 泰至  
入社14年目担当 設備設計



ロジクロス相模原



田中 裕伸  
入社14年目担当 意匠設計



須賀 貴之  
入社9年目担当 構造設計



瀧上 征  
入社8年目担当 設備設計



赤澤 知也  
入社13年目担当 インテリア設計



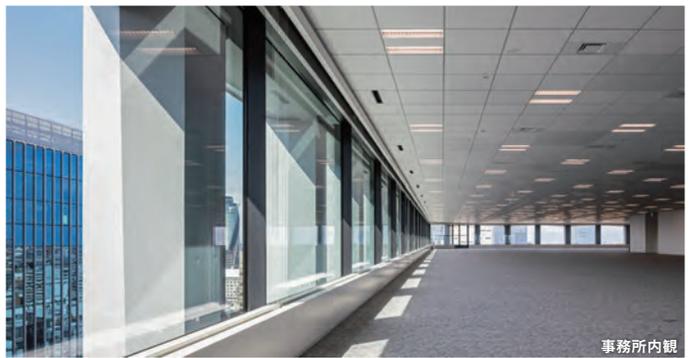
ゆめテラス祇園店



西村 健  
入社9年目担当 意匠設計



独立するPCフレームとアルミカーテンウォール



事務所内観



屋外の空気を感じる専有部内バルコニー



外殻PCとクライマーブラインドによる日射遮蔽



外殻PC建込写真



建物外観:歴史・土地・木工文化の記憶を継承し、新たなアイデンティティを確立するファサード



扇野 裕大 入社4年目担当 意匠設計  
 青裕之 入社24年目担当 電気設計  
 浅見 拓馬 入社11年目担当 意匠設計  
 大柳 聡 入社12年目担当 意匠設計  
 石川 栄一 入社27年目担当 電気設計  
 木内 佑輔 入社6年目担当 構造設計  
 国立 篤志 入社24年目担当 意匠設計  
 馬込 仁総 入社5年目担当 電気設計  
 石倉 敦 入社20年目担当 構造設計  
 小嶋 一輝 入社11年目担当 構造設計  
 盛川 岳穂 入社3年目担当 設備設計  
 津曲 敬 入社15年目担当 構造設計  
 木村 慎太郎 入社1年目担当 意匠設計

NAGOYA SHIMIZU - FUKOKU BUILDING  
 名古屋シミズ富国生命ビル

多様な働き方に応える超環境配慮型オフィス  
 時代に左右されない佇まいと「親自然的」なワークプレイス

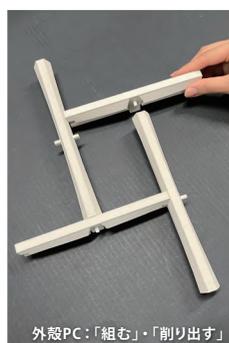
本プロジェクトは、清水建設・富国生命・清水総合開発が保有する土地を統合し、大規模テナントオフィスビルを建設する三社共同事業となります。多様な働き方に応える超環境配慮型オフィスを骨子に、新たなアイデンティティとなる外観の構築、二ユーノーマルでの働き方に応えるオフィスの創出、ZEB Readyを超える環境配慮ビルの達成を目指しました。(国立)

**新たなアイデンティティの確立**  
 外観に関しては、シミズと富国の本社ビルに共通する質実剛健なグリッド状の外観と名古屋の基盤目状の街区割りから抽出される「格子」というキーワードに、土地に記憶された歴史を重ね、三社の新たなアイデンティティを確立することを目指しています。

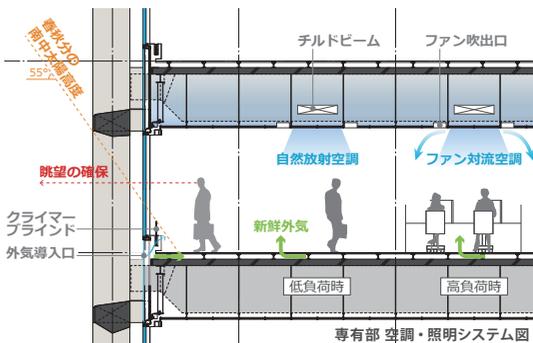
敷地周辺が名古屋城築城の際に材木町として発展した歴史を踏襲し、外殻フレームに木工文化の要素を取り込みました。構造体である外殻フレームは、柱と梁の仕口を「組む」ように見せる納まりとしました。また、応力分布に応じて不要な断面を削り落とすことで、材料を無駄にしない木工文化の継承と、唯一無二の外観表現を両立しています。(国立・大柳)

**互いに支え合う構造**

外殻フレームは2層分の柱と2スパン分の梁を千鳥状に組み合わせ、互いに支え合う構造としています。仕口の接合部にはグラウト充填工法を採用することで、現場打コンクリートを使用する従来工法と比較して大幅な施工省力化に寄与しています。これは労働時間が見据えた取り組みでもあります。(扇野・小嶋・木内)



外殻PC:「組む」・「削り出す」



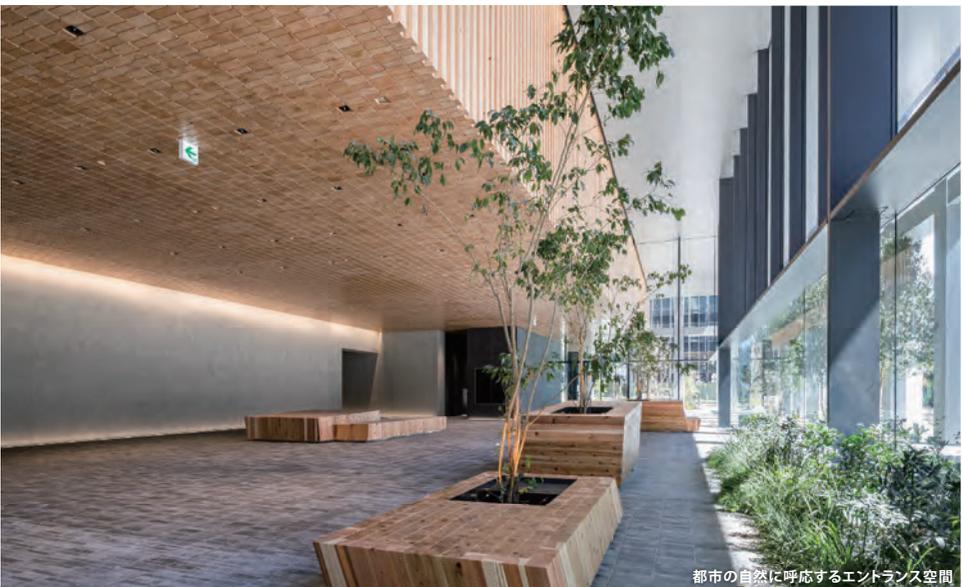
**環境性能と快適性を両立する**  
 奥行の深い外殻フレームは完全に外部化する事で、庇効果と専有部のフレキシビリティを最大化しました。ブラインドはクライマー型を採用し、日射遮蔽と眺望の確保を両立しています。カーテンウォールには、中間期と停車時に外気を探り込む換気ユニットを組み込むことで、環境性能と快適性を両立するだけでなく、BCP対策も行っています。(扇野・盛川)

**外装専門部署で知識を培う**

コアウォールと外殻フレームに架かる梁がガラス面を貫通するため、躯体の精度管理と止水ラインの形成が課題となりました。タイミング良く、外装専門部署への研修の機会を頂き、より専門的な知識をもって本課題に取り組むことが出来ました。精度管理については、PCとACWの取付精度の全数チェックを行い、管理値内であることを確認しました。止水については実大性能試験を実施し、止水対策の妥当性を検証しています。(扇野)

**働き方に呼応する専有部**

専有部では、ワーカークロスの粗密に呼応する空調・照明システムを構築し、ワーカークロスのそれぞれに最適な光・温熱環境を提供しています。空調は、チルドビームによる放射空調と、ファンによる対流空調を組み合わせ、部屋の負荷に応じた空調制御を可能にしています。照明も画像センサーによって精度高く人を感知することで、適切な照度での制御を行っています。(盛川・小嶋)



都市の自然に呼応するエントランス空間



地場産の自然素材を使用した天井・床・家具



天井：尾鷲産 檜

床：瑞浪産 タイル

家具：尾鷲産 杉

## 働き方を広げる

### 「親自然的な」共用部

これからのオフィスは、従来のワークプレイス中心の空間から脱却し、「いつでもどこでも働ける」空間へのアップグレードが求められています。本建物では、多様な働き方に最適な環境を設定できる専用部と共に、ワーカークの立体的なサードプレイスとなる共用空間を展開することで、多様化する働き方の受け皿となるオフィス空間を創出しています。

土地に存在する自然の要素を採り込む「親自然的」な共用空間を創出することで、多様な働き方を拡張すると共に、生産性の向上・健康生活の推進に寄与します。（国立）

## 都市の自然に呼応する

### エントランス空間

名古屋有数の大通りに面するエントランスは、人の流れと共に都市の自然を引き込む空間を目指しました。大通りの銀杏並木に呼応して、ピロティから屋内にわたり植栽を配置すると共に、内外を連続して同じ床仕上げとすることで、屋内外を柔らかく繋いでいます。仕上げ材は地場産の自然素材にこだわりました。床タイルは岐阜県瑞浪産の土を原料とした職人によるハンドメイド品、垂れ壁・天井は尾鷲産の檜材、造作家具には尾鷲産の杉材を使用しています。（木村・浅見）

## 人と風と光が行きかう

### 「立体会所」

名古屋の城下町においては、街區の中心に「会所」と呼ばれる人々の集いの場が設けられていましたが、その役割は近年失われつつあります。本建物では、会議室・ロビー・バルコニーを組み込んだ、光と風を採り込む吹抜けを内包した共用空間を「立体会所」と名付け、土地の歴史を再構築しました。開放性「明るさ」「省エネ性」「交流促進性」の評価軸を元に、デジタルデザインツールにて吹抜け形状の最適解を導いています。イメージを実現するべく、空間全体から細部の納まりまで、自分の考えや想いをバースやスケッチで表現しながら、関係者と幾度も打合せを重ねて作り込みを行いました。（木村）

## 空や緑と融和する

### ワーカークの広場

最上階には、テナントワーカーク専用の屋上庭園付ワーキングスペースや、名古屋城が一望できる共用会議室を計画しました。多様な働き方を享受する、空と緑を採り込んだ親自然的な空間づくりを通じ、ワーカークの働き方改革を支援します。内外にわたり光と風に柔らかく呼応する植栽を配置すると共に、各所には土地の自然をモチーフとした仕上げを採用しました。（浅見）

このフロアのトイレは、誰もが違和感なく使える男女共用トイレとして計画しています。性差を感じさせないよう、人型を使わないサインや、ニュートラルな色味のカラースキーム、仕上材とリンクする個室ごとに異なる香り、といった工夫を行いました。（扇野）

## 最高に「ゼネコンした」瞬間

今回、つくり方と一体になったデザインとしたため、施工者・技術専門部署の方々に設計段階からご協力いただいています。特に外設PCに関しては、施工段階に入ってから数々の問題点にぶつかり、共にアイデアを出し合い、一つ一つ解決していきました。その苦労もあり、現場で最初のPCが立ち上がった時は、施主や社内関係者・施工担当・職人の方々と一緒に声を上げて喜びました。設計施工ならではのものづくりの醍醐味を味わい、「最高にゼネコンしてるな！」と思えた瞬間でした。（扇野）



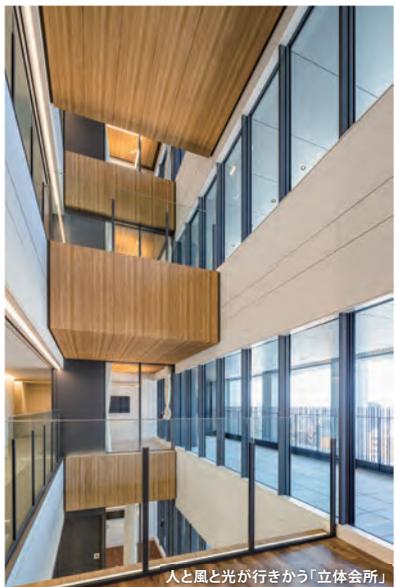
名古屋駅エリアを一望できる屋上庭園



堀川の水をイメージした待合ラウンジ



空や緑と融和する屋上コワーキングスペース



人と風と光が行きかう「立体会所」



トイレ個室



誰もが違和感なく使える男女共用トイレ

# 高層木質テナントオフィスの合理的な実現

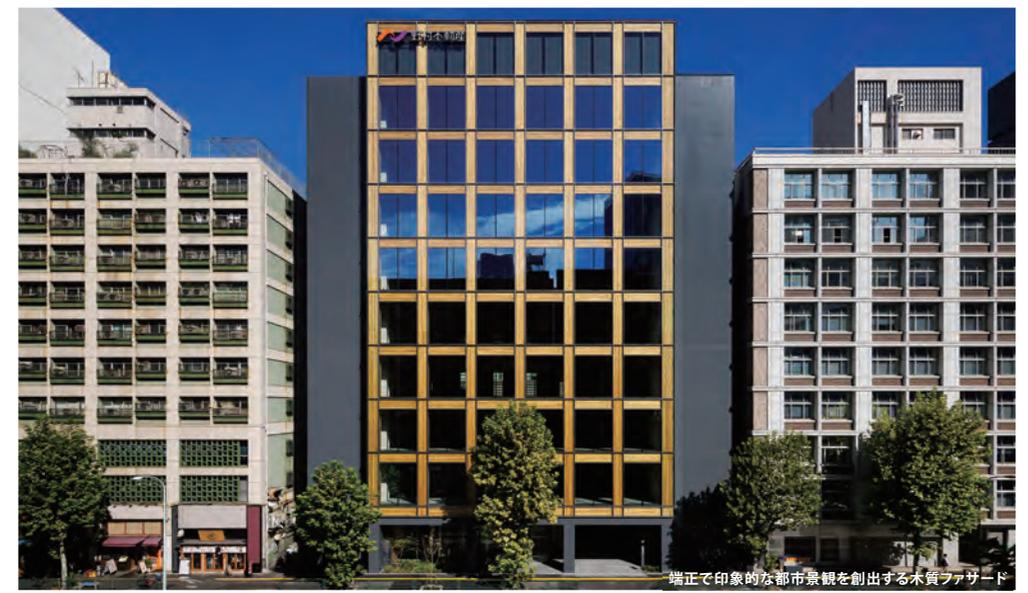
— 木の建材利用の普及・促進による持続可能な社会づくり —

## 建築物の木質化を通じた 持続可能な社会づくり

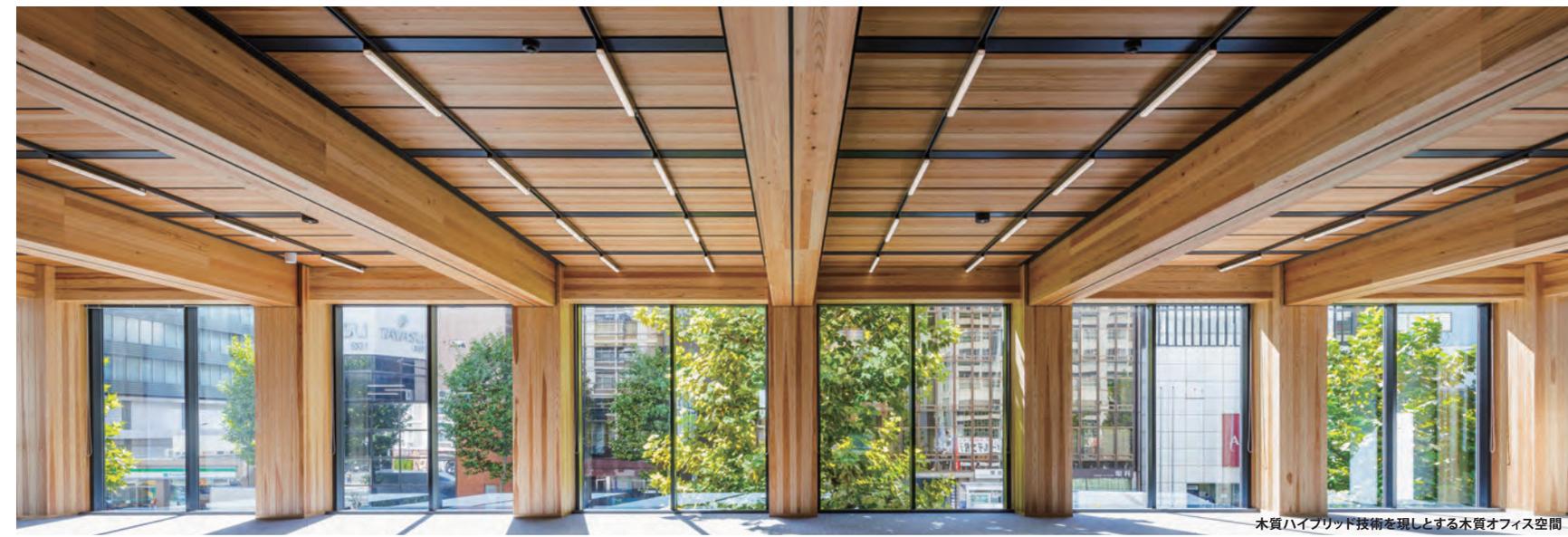
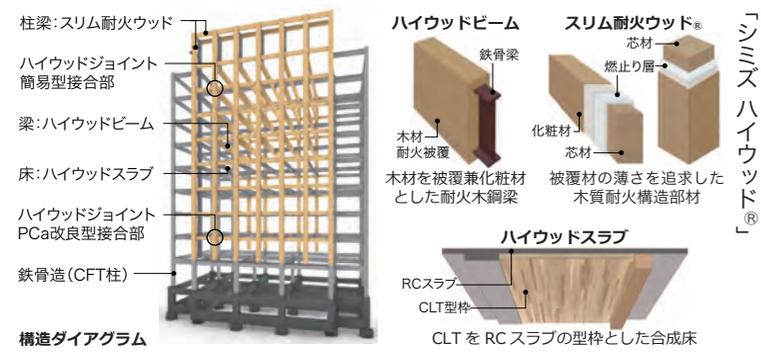
本計画は、持続可能な社会づくりを社会的責任と捉え、建物の木質化に真摯に取り組む野村不動産と清水建設が都心における良質な高層木質テナントオフィスのあり方を追求したものです。都心における高層テナントオフィスの木質化は、他の最新ビルと遜色ない耐震性、高層化により求められる耐火性、可変性の確保、それらを合理的に実現する施工方法の確立等が課題として挙げられます。本計画では、清水建設固有の木質ハイブリッド技術「シミズハイウッド®」の要素技術の発展・深化を通じ、高層テナントオフィスの木質化において発生する課題の合理的な解決を図ると共に、その景観や空間がオフィスの可変性と相まって、人々の健康生活の推進や知的生産性の向上に長期間にわたり寄与する、ロングライフな環境となることを目指しました。(大柳)



NOMURA TAMEIKESANNO BUILDING  
野村不動産 沼池山王ビル



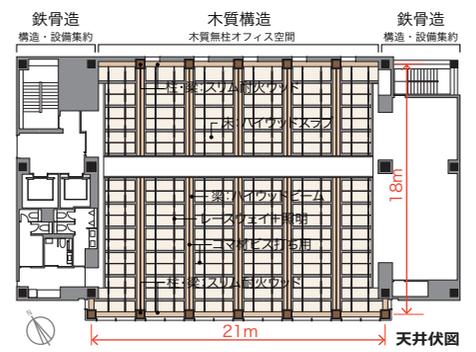
端正で印象的な都市景観を創出する木質ファサード



木質ハイブリッド技術を現しとする木質オフィス空間

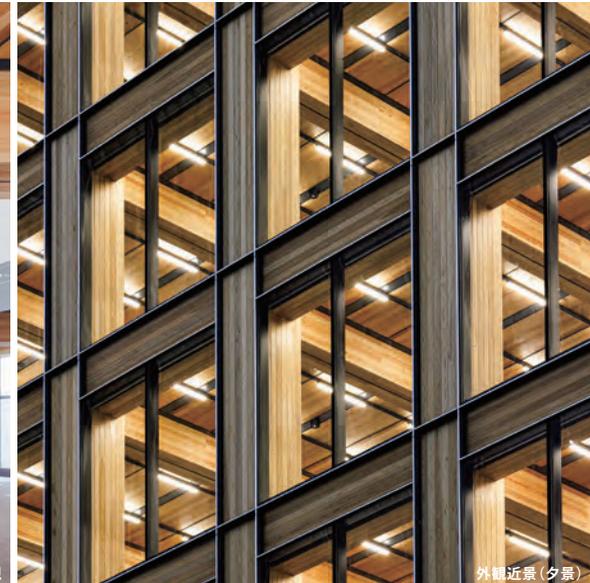
## 木質無柱オフィス空間の創出

敷地は南北から採光と通風を期待できる、赤坂の一等地に位置します。周辺ビルが隣接する東西部分に耐震要素・設備機能を集約することで、南北の外部環境を最大限採り込む21m×18mの木質無柱オフィス空間を創出し、施主の1フロア貸しテナントオフィスの要求に対する回答としました。東西部分をCFT柱を用いた鉄骨造として地震力を負担させた上で、外装面は軸力に強い「スリム耐火ウッド®」の木質フレーム、ロングスパンは耐火木鋼梁「ハイウッドビーム」で構築しました。各種木質構造部材を現しとする、高天井の木質空間を創出することで、ワーカーの健康生活の推進や知的生産性の向上に貢献します。(大柳・西川)



## テナントオフィスとしての 可変性の確保

ハイウッドビームやハイウッドスラブの下面には、交換可能なビス打ち用のコマ材を埋め込むことで、木質構造部材を傷めることなくテナント間仕切を設置できる計画としました。照明に関しては、リースウエイをハイウッドビームと平行して配置し、照明器具を間隔を空けて配置することで、増設のみならず、照度変更にも柔軟に対応します。空調は床吹出し方式を採用。増設が容易な床吹出し口を配置することで、フレキシブルなテナント運用を可能としました。(乗越・西川・稲垣・馬込)



外観近景(夕景)



「ハイウッドビーム」を活用し、21m×18mの開放的な木質無柱オフィス空間を実現



天井木部に準不燃塗料を塗布したテナント専用ラウンジ



雑木林を彷彿とさせるエントランス

木質ファサードの創出

「スリム耐火ウッド®」を外装面に@3.6mで配列し、透明ガラスでケーシングした上で、外装面の木材には塗料メーカーと共同開発した耐候性クリア塗料を塗布することで、木造の骨格を都市に現すファサードの表出と、長期間の美観保持を両立しました。高耐候性試験では、既往の耐候性塗料と比較して耐候性が大きく向上していることを確認しています。(水落・乗越)

「シミズハイウッド®」の進化

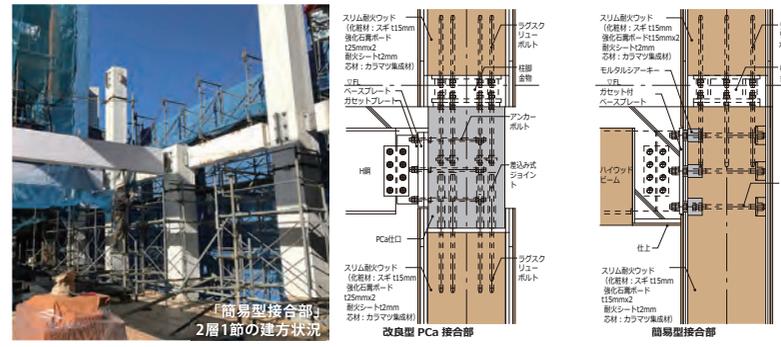
「スリム耐火ウッド®」は、今回新たに2h耐火認定を取得したことで、高い耐火性が求められる都心の高層建築の木質化を容易にしました。「ハイウッドビーム」は、耐火木鋼梁では最大600mmだった梁せいを1mに拡張、1h耐火認定を取得した上で、梁貫通工法を組み合わせることで、木質無柱オフィス空間の実現を容易にしています。(水落)



木質柱梁接合部の開発

これまで木質柱梁接合部にはPCa仕口を設け、上下の金物を介して柱母材と接続する形をとってきました。今回、施工性向上を目的とし、種々の実験を実施しディテールへフィードバックすることで、新たに「改良型PCa接合部」と「簡易型接合部」を開発しました。「改良型PCa接合部」では、耐火性能を実験にて検証し熱伝達経路を確認の上、柱頭部とPCa仕口のジョイントを差込式としグラウトで一体化することで、柱頭金物を省略しました。「簡易型接合部」では、要素実験・構造実験による破壊性状の確認とディテ

ールのつくり込みにより、耐火集成材柱の2層1節の節割を実現しました。現場での建方手間を削減し、サイクル工程の平準化に資するディテールとなっています。(西川)



準不燃クリア塗料の開発

新規開発した準不燃クリア塗料を施した木板を、下垂型の植栽と共にテナント専用ラウンジの天井に配置し、事務室とは趣の異なる親自然的なサードプレイスを創出しました。開発した塗料は透明性が高く、木現し空間を実現すると共に、加熱を受けると塗膜が発泡して断熱層を形成、木材の燃焼を抑制します。内装仕上げに準不燃性能を求められ易い中高層建築の木現し空間の実現を容易にしました。(水落・乗越)

おわりに

本計画では、同分野では国内最大級となる約470m(0.08m/m)の木材を使用し、炭素の固定量は約286tCO<sub>2</sub>にのびります。本計画を通じて、木質建築の魅力が広く世に伝わることで、持続可能な社会の実現の一助になることを望んでいます。(大柳)

ネイチャー・リビング・オフィス  
 — 環境と調和しワーカークが回遊するリビング・オフィス —



齋藤 剛寛  
入社7年担当 構造設計



つく田 将紀  
入社8年担当 意匠設計



森谷 真帆  
入社7年担当 電気設計



小林 遼一  
入社10年担当 設備設計

YASUKAWAMECHATREC SUEMATSUBUKYUKI CO., LTD  
 WESTERN JAPAN HEAD OFFICE  
 安川メカトロック末松九機株式会社 西日本本社



メインファサード：各層は軒で切り取り、ガラス面の位置を変化させ奥行の変化により、3Fのテラスや1Fのエントランスアプローチを創っている



軒の見上げの表情

リビング・オフィス  
 産業用ロボットで有名な安川電機グループの安川メカトロック末松九機株式会社の西日本本社です。福岡市の博多駅周辺や天神地区などのオフィス街からはやや離れた敷地です。周囲には分譲マンションが新しく建ち、昔からの工場・事務所なども近隣にあります。スタートは設計コンペで、私は基本設計の途中から担当することになりました。(つく田)

九州のオフィスの  
 トップランナーを目指す！

安川メカトロック末松九機さんからは、「先進的で、社員の働き方を変えていきたい」というご要望でした。スタート時には、設計部長である今井さんから基本概念を示してもらいました。それは、カーボンニュートラルに取組み、社員が建築の中を回遊することができ、場所を選んで、出会った社員とコミュニケーションをとりながら新たなアイデアや価値を生み出すようなオフィスというものです。そして、環境性能では、先進的なゼロエネルギービルでも上位のNear Net Zero(75%以上のエネルギー削減を達成するという目標です。それを表現する正方形で見通しの利くワンルームの空間が多層に重なるときに、吹抜に併設する階段で社員が移動したくなる構成とすることで社員が不意に出会う工夫を示しました。それは、我々で設計することが決まったスタート時から、安川メカトロック末松九機さんと我々の、共通の指標となりました。(つく田)



ホトリに仲間が集まる、リビング・オフィスを象徴する場



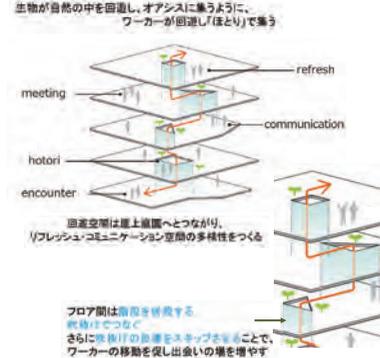
2Fホトリから見通す。1Fショールーム、2F、3Fの執務空間、階段で移動する姿を感じることができる

リビング×オフィス、そして  
 NATUREを加えよう！

安川メカトロック末松九機さんのプロジェクトチームの皆さんからは、良いオフィスにしたい、現在の社員の意見を取り入れながら新しい働き方ができる、女性が活躍できるオフィスにしたい、といったことをひしひしと感じました。私は、九州支店設計部に異動して設計・監理を含めて2年目から3年目に担当したのですが、その思いに込めたい、そして自分としては、このようなオフィスを絶対成功に導きたいという思いで担当しました。その中で、我々から「リビングのようなオフィス」、社員がリビングに集まり、ディスカッションを交わし、そして、好みの場所でも集中して執務する景色が広がっているオフィスにしましょうと提案しました。そして、「自然」というキーワードも加えたりリビング・オフィス「NATURE X LIVING」を共通コンセプトとしました。(つく田)

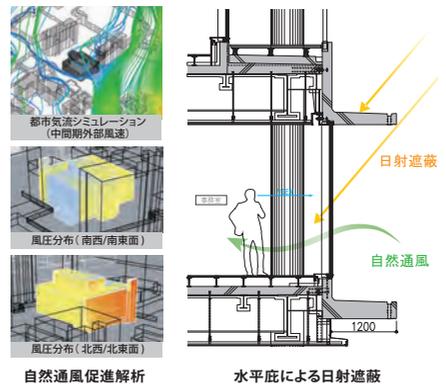
ホトリ、動物が自然の中の  
 オアシスに集まるような場所

34m×34mの正方形の平面型に吹抜があり、吹抜は階ごとに位置をずらしながら各階を繋げています。階段と吹抜をセットにすることで、社員が上下階に移動するときは、この吹抜を通過することになります。我々はここを「ホトリ」と呼ぶことにしました。オアシスの廻りで出会い、情報交換したりというイメージを共有するためです。NATUREホトリ、リビング、といった言葉は、我々、施主、今回ワークプレイスを共に考えていただいたオカムラさん、チームの皆のイメージを膨らませたり判断する共通認識となったといえます。(つく田)





近隣視線と日射を和らげる葺質はファインフロアでデザインした



水平庇による日射遮蔽

自然通風促進解析



外の外気と光に接してリフレッシュする、屋上テラスの設え



吹抜が各階が繋がる一体感のある空間。快適性と省エネを両立することを目標とし、空調は床から吹出す方式としている



一体感のあるワンルームは直天井を組み合わせ、場に変化をつけている



オアシスに集まる動物たちのように、ホトリに集う



「ホトリ」をすっきり、有効に利用できるスレンダーな階段



街に表れるグラデーションな灯りによる夜景。底のプレキャストコンクリート(PCa)が外観の規律を創る

## 街並みへの調和と不均質さ、 水平ラインの印象的な外観

「環境ビル」として、オフィス室内への日射を和らげたり、周囲のマンションへの視線の配慮はかなり検討しました。また、オフィスですと外観が均質になり、固い印象にならないよう、不均質になることを意識しています。例えば底の先端の厚みを階により少し変えています。わかるでしょうか？均質な外観にはしない、しかし、規律が守られている外観にしようという意図です。3Fは外来者も案内されるコミュニケーションエリアですが、階高を高く、ファサードのガラス面を少し後退させ、コーナーでは斜めになり、外部に出ることが出来るバルコニーを産み出しています。このような操作で、様々な場所を産み、機能的なこととして、街並みへのファサードが環境ビルとして印象的であり、表情が多様となることを大事にして実践しました。(つく田)

## 多様な場があるオフィスに値する 省エネルギーで快適な空調とは

吹抜が各階に繋がっているオフィスで、快適性を守る。また私個人としては初めての先進的なNeatly-TEBをどのように達成するのか、プレッシャーもありました。空調衛生設備設計のエンジニアとして、シミズの確固たる技術を使いながら、リビング・オフィスとして使いやすく、相応しい空調計画を考えました。具体的には床から滲み出す空調、「フロアフロー空調」を基本としました。これは社員の居住域を空調することで、通常の天井からの空調に比べて気流も優しく快適で、空調エリアを人が居住するエリアに限って、省エネルギーとなるものです。このオフィスは「いろいろな場所をつくりたい」ということで、天井も高さが様々で、スケルトンで天井が無い部分も多いことから、この方式としました。他、様々な方式を組み合わせ、B.E.値を0.23として、基準ビルから77%削減となり、Net-zeroを達成しました。これは、自分個人としても誇らしい設計だと思えます。(小林)

## 開放的な「ホトリ」空間と 不均質なファサードデザイン

本建物の架構は、10.8mの正方形グリッドとすることで、見通しの良いワンルーム空間を作り出しています。また、直天井のエリアの見え方に配慮して、小梁の架け方もシンプルなものとなりました。吹抜に設ける階段は、長さが10m弱ありますが、間柱による中間支持は中止して、見通しの良い「ホトリ」を効果的に利用できるような計画としました。これは結果的に、階段の下側に梁型が出てこないこととなり、下から見上げた時にスッキリした印象を与えることにも繋がりました。

日射遮蔽のため外周部に設けた庇は、工期短縮・施工性向上のためPCaとしています。庇の厚みを階ごとに変え、不均質な外観としたいという意匠的な要望に対しては、庇の一般部の厚さは統一し、厚く見せたい階は先端に立ち上がり部を設けることで、躯体重量の増加を抑える工夫をしました。PCa庇は支持梁からの出寸法が2mあるため、施工時の支持梁に生じるねじれにも十分配慮して、取付部の納まりを検討しました。(齋藤)

## 様々な場所を演出する、 リビングの照明の色温度とは

このオフィス外装は、周囲を深い庇で守りながら、ガラス面の多いファサードです。これは自然採光として大きな役割があります。しかし、やはり照明は必要です。近年の照明による照度は、省エネを意識して執務室は700ルクスから500ルクスに見直すなど動きがありますが、ここではさらに踏み込んでベース照度(アンビエント)は350ルクスにして抑え、手元のタスク照明を補充する、いわゆるタスク&アンビエントとして先進環境ビルの照明計画としています。また、「様々な場所」は照明の色温度でも表現して、様々なワーカーの働き方のサポートをしたいと考え、館内には、行動的な白い光の5000K(ケルビン)を1Fショールーム・吹抜廻りに、執務空間では、リラククス感のあるやや赤みのある3500K、休憩などにはさらに温かな色である3000Kを使い分けています。これは夜景の外観にも表れているのかわかると思います。近隣はマンションなどの住居系で赤い色の灯りですので、その街並みにも配慮した照明計画で環境に調和するリビング・オフィスを表現しました。

九州支店設計部の若手を主体に九州の環境建築をリードするオフィスが実現でき、皆が貴重な経験ができたと考えています。(森谷)

歴史的景観地区に溶け込む新たな拠点づくり  
— 和風建築様式と新しさの融合をめざす —



OFUKUMOCHI HONKE HEAD OFFICE  
御福餅本家 本社



本案件は、伊勢夫婦岩への参道に面する土地で古くから観光客へ餠餅を提供してきた老舗企業が、店舗の老朽化と生産体制の強化の為、夫婦岩近くの新たな土地へ新店舗を出店する計画です。

計画地は三重県指定名勝地区及び伊勢市景観重点地区に該当し、厳しい景観規制のなか『工場の生産ラインを津波による浸水から守りたい』という事業主の思いからなる建物ボリュームをいかに周辺地域に馴染ませるかをテーマに計画を行いました。

名勝・景観重点地区に  
ふさわしい建築デザイン

瓦葺き屋根・彫子下見板張りなど、地域に適した建築様式を取入れ、工場ボリュームを極力参道や隣接する重要文化財『寶日館』への圧迫感を軽減する配置としました。また、寶日館と屋根勾配を揃えたり、軒高さを抑えるなど意匠的な配慮も行いました。

ギャラリ―・喫茶はガラス張りの透明感ある空間とし、夫婦岩への参道と音無山とを同時に体感できるこの地ならではの空間を実現しました。

御福餅のアイデンティティを  
空間として表現する

職人の手作業によってひとつひとつつくりだされる「お福餅」を提供する場として、手作業であることこのこだわりを空間のなかに取り入れることを考え、構造・設備・電気各担当ごとにこだわりを持って作り込みました。

壁は左官仕上とし、お福餅の手形と二見浦の砂浜をイメージした2種類のパターンを採用しました。天井は吸音効果のある国産ヒノキの間伐材を使用した木毛セメント板を採用し、折り上げと張りパターンの細分化により、「包まれた空間」と二見浦に打ち寄せる波を表現しました。また、手形をモチーフに握りやすさとブランドイメージを表したドアハンドルを特注で製作しました。サインは外壁に使用された三重県産の杉板の端材から作成しました。



外観



参道に面する展示ケース

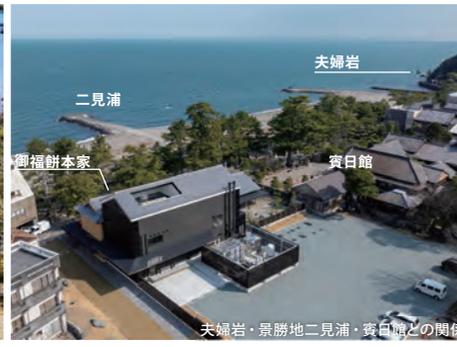


庇により視線を誘導する、開放感がありながら落ち着いたある喫茶空間

周辺環境のデザイン採集から  
周囲に溶け込む空間をつくる

名勝の地である計画地周辺を最大限リスペクトし、可能な限り風景に溶け込むように、周辺にある要素を敷地内に取り込み外観や外構デザインを行いました。喫茶・売店から見える庭は、海岸線と同じ砂利やクロマツを配置し、借景に音無山を取り入れることで、二見浦の地の砂浜・クロマツの並木・音無山」からなる構成を再現する計画としました。

コロナ禍が明け観光客が戻りつつある一見の地で迎えたオープンに立ち会いながら、歴史ある街並みを継承したこの建物が景観地域の新しい指標となる未来を想像していました。(坂本)



夫婦岩・景勝地二見浦・寶日館との関係



寶日館への圧迫感軽減の検討を重ねたボリューム構成

# 地域に愛される Small Urban Hospital

— わかりやすさ、安心を形にする —



嶋田 あゆみ 入社2年目担当 構造設計	田浦 史彬 入社12年目担当 構造設計	竹内 圭佑 入社9年目担当 意匠設計	藤田 渉 入社8年目担当 設備設計	水野 大輔 入社18年目担当 電気設計	山形 弥里 入社3年目担当 電気設計	大多和 真 入社9年目担当 設備設計
---------------------------	---------------------------	--------------------------	-------------------------	---------------------------	--------------------------	--------------------------

HIGASHI OSAKA HOSPITAL  
 東大阪病院

## 案件概要

約70年間にわたり地域医療に貢献してきた255床の総合病院が、約500m離れた城東区役所跡地へ移転新築する計画です。増改築による動線の長大・複雑化など、既存病院での課題の改善が求められました。

これらの背景に対し、「地域社会と共存・共栄していく病院」街並みに調和する洗練された病院「コンパクトで合理的な動きやすい病院」を骨子として『Small Urban Hospital』を計画のコンセプトとしました。

周囲は国道一号线に面するマンションなどが立ち並ぶ都心部であることから、またコンパクトな平面となることから、1〜3階の低層階は口の字の共用廊下を中心に診察、検査室等の諸室を配置する計画としました。4〜8階の病棟は1フロア1看護単位の構成で、コア側はスタッフ関連の諸室、外周は病室群のゾーニングとしました。

## 明るさによる

### わかりやすく自然な誘導

外来患者が訪れる1階は、受付会計、外来診察室、各種検査室などが多数あり、患者自身が移動しなから診療を受けていただく必要があります。いかにして患者が居場所や行先を把握しやすくするかがポイントとなりました。

『洗練された印象とするため、大きな文字や多数の色での誘導ではなく、明るい方向に人の意識が向く「アフォーダンス」の概念を取り入れて空間を構成しました。具体的には、壁面の片側を白基調で明るい壁面とし、さらにシームレスに継ぐことができ、埃だまりとならないライン照明で明るくすることで、光の壁に沿って視覚的に患者を誘導するしかけとしました。同時に廊下の方向が認識しやすく、かつ光の壁を印象づけるため、反対側の壁面はあえてトーンを落としつつ冷たい印象とならないよう、ウォームグレーとしました。

## 見守られる、近くにいる安心感

病棟は、スタッフを近くに感じ、患者が安心できるよう、見守りがしやすい病棟を目指しました。スタッフが常に病室への目配り、アクセスができるよう、スタッフステーションをフロア中心に配置し、廊下に張り出したカウンターから全ての病室が見通せる構成としました。スタッフが見守る安心感が滲みだすよう、コア側の仕上を廊下の中央まで広げました。南北の病室群にもスタッフステーションから看護が行き届くよう、スタッフステーションからのショートカット通路を設けました。

患者にとって家庭的で安心できる空間とするため、病室群は暖色を基調として木調を配置した空間としました。廊下の中央まで同じ仕上とし、廊下の片側は患者のプライベートなエリアであることが視覚的に感じられるようにしました。

## デジタルモックアップの活用

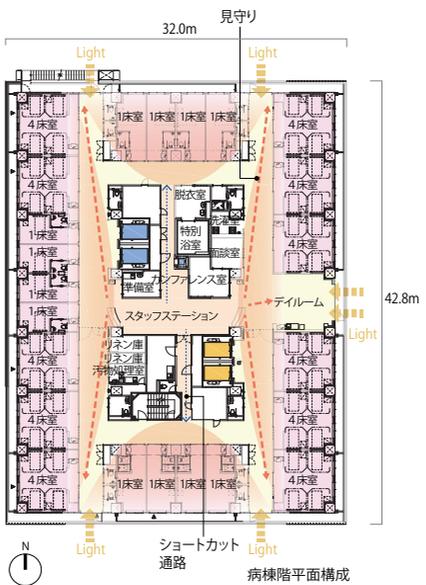
通常は現病院の現地調査で課題を共有して新病院に反映していくところ、本プロジェクトではコロナ禍にあたってたためそれができず、ヒアリング中心に要望を確認しながら設計を進めました。現病院でのスタッフの細かい動きや流れは、図面上で何度も確認しながら設計を進めましたが、空間のイメージがなかなか共有できず、難しさを感じました。

そこである程度仕様が決まった段階で3Dモデルを活用したデジタルモックアップを作成し、VRゴーグルを使って空間を確認してもらうという手法をとりました。実際に現場で働くスタッフの方に仮想空間での実際の見え方や使い勝手の細かい検証をしていただけ、何度も作り直し、確認を行い現場に反映することで、満足度の高い空間を実現することができました。

長年増改築により地域医療を支え続けていた東大阪病院にとって悲願である近接地への移転新築プロジェクトに土地入札時から協力させていただき、晴れて新病院の開院を迎えることができました。新病院の柱である救急受入れや病床稼働率も好調と伺っており、これまで以上に地域住民の健康を支援し地域社会に貢献する病院となることを願っています。(竹内)



デジタルモックアップ  
 病棟階スタッフステーション  
 デジタルモックアップ確認会  
 病棟階廊下  
 デジタルモックアップ確認の様子  
 VRゴーグル  
 病室(4床室)



病棟階平面構成



1階：診察待合



1階：総合待合

光の壁に沿って視覚的に患者を誘導



1階：処置室に向かう廊下



1階：検査室に向かう廊下

# 人に寄りそい環境と調和する工場

— class100クリーンルームの省エネルギーに挑戦 —



CKD HOKURIKU PLANT  
CKD 北陸工場



class100のクリーンルーム

## 人に寄りそい環境と調和する

愛知県に本社を置く機械メーカーによる半導体製造装置向けの機器製品製造工場です。「人に寄りそい環境と調和する工場をコンセプトに計画を進めました。食堂やリフレッシュルームといった厚生エリアの充実と自動搬送設備による物流改善で従業員に寄りそい、記憶に残る見学廊下で来館者に寄りそい計画としています。また、名峰白山の眺望を活かした平面計画と地域の伝統工芸である九谷焼をモチーフとしたデザインにより地域環境と調和し、クリーンルームの省エネルギー化や純水リサイクルシステム等で地球環境と調和した工場を実現しました。(細川)

## 九谷焼と半導体製造部品

計画地は昔、石川県の伝統工芸の九谷焼に用いる花坂陶石を採石していた場所でした。九谷焼最大の魅力は絵付けであり、繊細で職人技が光る物が多くあります。この工場でも製造される機器製品も繊細で緻密であり、高品質なものづくりが九谷焼とも親和性があると考えています。

九谷焼の要素として、絵付け工程と「九谷五彩」をモチーフとした工場デザインを考案することで、場所の記憶を継承し地域に愛される工場を目指しました。絵付け工程前半にあたる白磁の白と呉須の黒による世界観を外観に表現し、先進工場らしい引き締まったファサードデザインとしました。そして、絵付け工程後半の鮮やかな世界観は内部空間に表現しました。九谷五彩をモチーフとした見学廊下は、単調で閉鎖的になりがちなクリーンルームの工場に彩りと楽しさを与えています。九谷焼の絵付けに用いる植物に因んだリフレッシュルームや木調のアクセントを加えた食堂等、温かみのある空間を演出することで、従業員にとって働きがいのある「行きたくなる工場」を実現しました。(細川)



九谷焼の白磁の白と呉須の黒をモチーフとした外観

## 「クリーンEYE」による 当初のclass100への挑戦

「人と環境に優しい」をスローガンにかかげるお施主様は、環境配慮の取り組みとして、大きなエネルギーを消費するクリーンルームの省エネルギー化に苦慮されていました。このニーズに対して、当社技術のクリーンルーム空調制御である「クリーン・EYE(アイ)」を提案しました。クリーンルームの省エネルギー化について、お施主様に大変興味を持っていただき、案件受注の大きな要因のひとつとなりました。

クリーン(EYE)アイ制御は画像型人感センサーとパナティクルセンサーの情報から、室内の状況に応じた4つのモードの組合せでEHC運転を安全安心に最適・省エネ制御する技術です。これまで実績がないclass100での導入に際し、お施主様より「失敗しても良いから是非、挑戦したい」という強い御要望を頂き、パナティクルセンサー精度などの様々な課題を検討し導入に至りました。想定通りの省エネルギー効果が得られるようにお客様と一丸となって検証及びチューニングを行うべく予定です。(宮村)

## お施主様とつくる

この工場では、設計段階からお施主様と共に新しい工場のあり方を考え、実現に向けて一緒につくって来ました。私たちの仕事はプロの設計者ですが、お施主様から学びたいことも多いです。ひとつの部屋の仕様についても、使い勝手や運用的話から気付けられることがあります。今回は「クリーンEYE」一緒に挑戦できたことをはじめ、九谷焼の作家様とのコラボレーション等、一緒に作る楽しさ大変さをお施主様と共有できました。

完璧な建物をお施主様に引渡すこと、その後使っていくことへ配慮した計画が大切ですが、建物をつくる過程も大切にすることで、より愛着の持てる建物ができると思っています。(細川)



温かみのあるリフレッシュルーム



白山を望める食堂



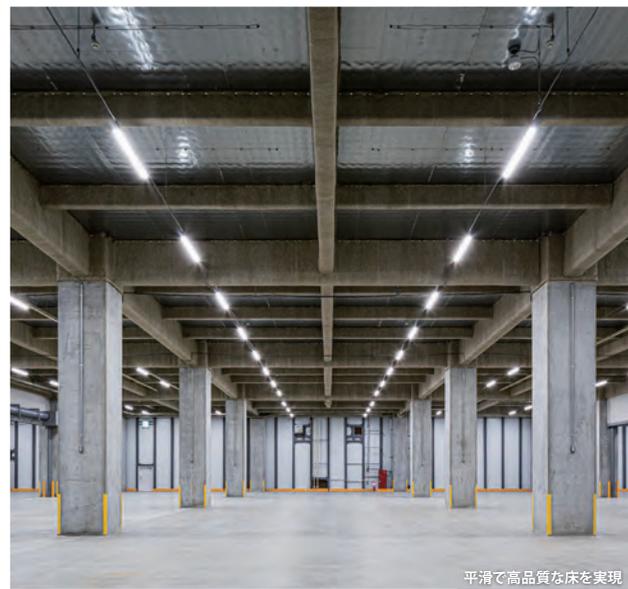
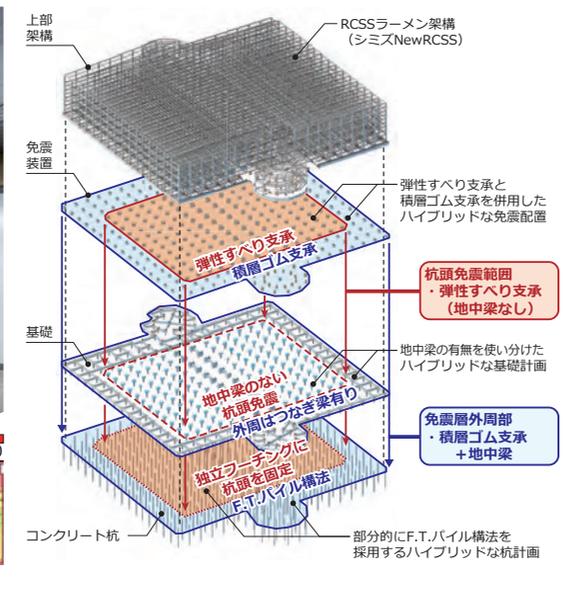
製品と九谷焼の展示スペース



九谷焼による社名とゼロシュリンクコンクリートによるエントランス



九谷五彩をモチーフとした見学廊下



Logicross SAGAMIHARA  
ロジクロス相模原

樋上 稔 (入社8年 担当 設備設計)  
田中 裕伸 (入社14年 担当 意匠設計)  
赤澤 知也 (入社13年 担当 インテリア設計)  
須賀 貴之 (入社19年 担当 構造設計)



「物流施設に、オアシスを。」  
— 事業主の想いに技術力と創造力で応える —

相模原市中央区淵野辺の青山学院大学相模原キャンパス隣接地における、三菱地所と日本生命の共同事業によるマルチテナント型物流施設建設プロジェクトです。このプロジェクトは、三菱地所が提供する物流施設ブランド「Logicross(ロジクロス)」のデザインコンセプト「物流施設に、オアシスを。」を初めて適用した開発案件です。ロジクロスの基幹施設として、建物の使い勝手向上や物流オペレーションへの対応はもとより、無機質になりがちな物流施設に潤いある空間の創出と、安全・安心な施設を目指し、事業主と議論を重ねて計画しました。

**「物流施設に、オアシスを。」**  
相模原市中央区淵野辺の青山学院大学相模原キャンパス隣接地における、三菱地所と日本生命の共同事業によるマルチテナント型物流施設建設プロジェクトです。このプロジェクトは、三菱地所が提供する物流施設ブランド「Logicross(ロジクロス)」のデザインコンセプト「物流施設に、オアシスを。」を初めて適用した開発案件です。ロジクロスの基幹施設として、建物の使い勝手向上や物流オペレーションへの対応はもとより、無機質になりがちな物流施設に潤いある空間の創出と、安全・安心な施設を目指し、事業主と議論を重ねて計画しました。

**アメニティの向上**  
エントランスや休憩室は、物流施設に、オアシスを。」のデザインコンセプトのもと「FOREST」「WATER」「SKY」をテーマとしたバイオフィリックデザインを取り入れ、施設利用者が快適で過ごしやすい空間づくりを目指しました。「FOREST」をテーマとした休憩室は、天井に国産木材を用いた型枠兼仕上材を採用、木質空間を創出すると共に環境保全に取り組みました。(赤澤)

**安全・安心な免震構造**  
本建物は、物流施設に相応しい事業継続性を確保するために、免震構造を採用しました。また昨今の環境や労働などの社会的課題に配慮するため、免震層には地中梁を不要とすることができ「杭頭免震」を用いた架構システムを採用、基礎形状の合理化に取り組みました。資材の削減による環境負荷低減や施工性改善を実現しました。(須賀)

**働く人の労働環境向上**  
近年、物流マーケットで高まる倉庫内で働く人の労働環境向上に配慮するため、「ロジクロス」のマルチテナント型施設として初めて倉庫内全域に空調設備を設置しました。シミュレーションを用いた工学的アプローチにより、空調設備を効果的に配置し、①夏季の作業環境における熱中症リスクの低減、②成層空調によるランニングコストの低減、③メンテナンス性の向上、④物流オペレーションに応じたフレキシビリティの確保を実現しました。(樋上)

**脱炭素や環境配慮への取り組み**  
『ZEB』、『CASBEE・S・ランク』  
当プロジェクトでは、脱炭素や環境配慮に積極的に取り組みました。建物外皮性能の向上、高効率機器の採用による「省エネ」に加え、屋根面積約3万㎡のほぼ全面に2200kWh超の太陽光パネルを設置し、「創エネ」を行っています。これにより、建築物省エネルギー性能表示制度(BEES)が定める最高ランク5つ星に加えて、年間の一次消費エネルギーの収支をゼロとする『ZEB』を達成しました。加えて、多岐にわたる環境に配慮した取り組みにより、CASBEE建築評価認証でSランクを取得しました。事業主と共に環境への取り組みを推進し、建物の付加価値向上を実現しました。(田中)

「物流施設に、オアシスを。」  
— 事業主の想いに技術力と創造力で応える —





地域の憩いの場となる散策路



2階店舗入口への大階段



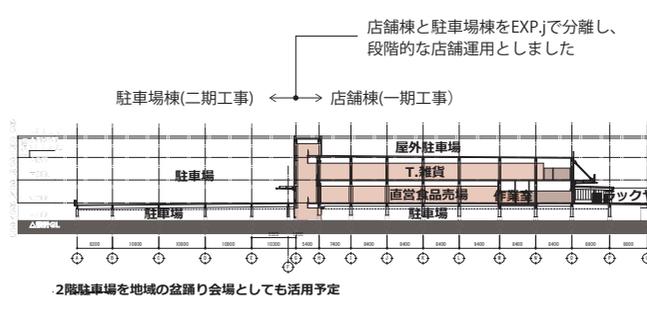
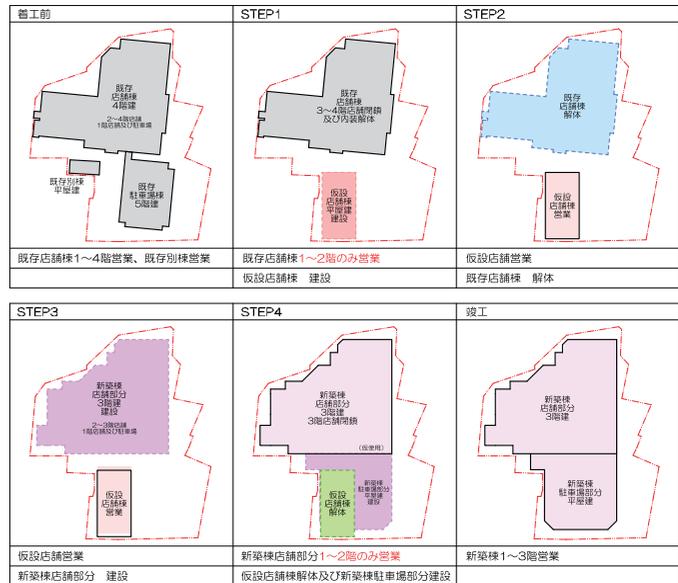
2階・店舗前面駐車場は地域の益踊りスペースとしても活用予定



一期工事 (STEP3の工事状況)



二期工事 (STEP4の工事状況)



2階駐車場を地域の益踊り会場としても活用予定

**地域貢献・更なる活用**

お施主様より「この場所が地域の益踊りを復活させたい」という想いがあり、店舗棟の前面駐車場スペースを活用し、益踊り会場として十分な広さを確保しました。地域の参加者も店舗への動線と重なることなく、散策路を経由して大階段から直接アプローチできる計画となっており、国道側に対し賑わいを演出するスペースとしても今後活用されていきます。(西村)



国道側からの全景



YOU ME TERRACE GION  
ゆめテラス祇園店

**地域への恩返し**

広島市安佐南区内にある約50年前に建てられた、お施主様初の郊外型大型店舗である祇園店の建替計画になりました。この地に育てられ恩返しとして地域に還元したいというお施主様の想いを、この地に都市のオアシスを計画することで実現してまいりました。敷地の周囲には自然の木に囲まれた散策路を配し、建物は白を基調としながら一部木調のナチュラルな色調とすることで、落ち着いたまた、緑地、散策路、大階段、ステップ広場そして店舗へと空間が展開し、様々なシークエンスが広がる計画としています。

**継続営業**

建替期間中もスーパーマーケット部分を継続営業するために、まず仮設店舗を計画し、1期工事で店舗棟を完成させスーパーマーケット部分を先行して運用し、2期工事で駐車場棟を計画する段階整備とすることで、店舗を休業させることなく工事を進めてまいりました。

**配置計画・断面計画**

お客様は東側の国道側からのアプローチと南側からのアプローチがメインとなります。国道側は散策路として低層の駐車場棟とすることで、周辺環境に対し圧迫感を軽減させ、さらに店舗棟のファサードには大きなガラスカーテンウォールを配することで、建物の内部が地域に開かれた計画としています。また南側のコーナー部には美容室を計画することで、地域に対し彩りを添えるような配置計画としています。

1階に駐車場、2階に直営店舗、3階にテナント、屋上階に駐車場とし、1階、屋上の駐車場で店舗フロアを挟むような構成とし、車で来店されるお客様のアプローチを明確にしています。また東側には大階段を設置し、散策路から店舗への歩行者のアプローチがスムーズになるように計画しています。

YOU ME TERRACE GION

TAKESHI NISHIMURA / YUICHI SUMIKAWA / YUICHI ISHIDA / MIHARU KOSHIDO / TAKESHI TSUCHIDA / MAKOTO FURUKUBO

**「地域への恩返し」としての商業施設**

— 都市のオアシスを計画し、地域の憩いの場の提供 —



旧渋沢邸「中の家(なかんち)」  
主屋改修



柿澤 英之  
入社28年目担当 意匠設計



異 紅美  
入社17年目担当 意匠設計



松浦 正一  
入社30年目担当 構造設計



GRAND MARINA TOKYO  
パークタワー勝どきミッド



田村 隆  
入社33年目担当 意匠設計



新野 将平  
入社6年目担当 設備設計



福岡大学病院 本館



山本 武  
入社15年目担当 意匠設計



The Link SAPPORO



小松 辰也  
入社21年目担当 意匠設計



温故創新の森 NOVARE

# 03 episode

## プロジェクトをまとめる プロデューサーとしての設計者の仕事

多種多様な実務経験、設計実績を重ねた後は、プロジェクトのプロデューサーとしての役割が求められます。全社的な視野と展望を持った設計のエキスパートとして、多くのステークホルダーを取りまとめることとなります。

本章では、培った経験を糧にプロデューサーとしてプロジェクトを推進する役割を果たす設計者の仕事を紹介します。(入社年度目安 10年目以降)



西川 航太  
入社15年目担当 構造設計



聖路加国際大学  
聖ルカ礼拝堂



金田 生  
入社32年目担当 設備設計



永原 聖  
入社29年目担当 意匠設計



後藤 なつみ  
入社9年目担当 意匠設計



KARAWANG  
OUTLET MALL



Harjanto  
入社35年目担当 意匠設計



野崎 紘平  
入社9年目担当 電気設計



都築 弘政  
入社9年目担当 設備設計



金馬 貴之  
入社6年目担当 意匠設計



小川 浩平  
入社18年目担当 意匠設計



牧住 敏幸  
入社30年目担当 意匠設計



定久 岳大  
入社28年目担当 意匠設計



小林 央和  
入社24年目担当 意匠設計



杉山 友也  
入社20年目担当 構造設計



重盛 洸  
入社10年目担当 設備設計



稲葉 秀行  
入社10年目担当 意匠設計



坪内 舞子  
入社12年目担当 開発計画



長谷川 龍太  
入社9年目担当 構造設計



今川 彩香  
入社11年目担当 構造設計



宮本 和明  
入社10年目担当 電気設計



久米 建一  
入社13年目担当 構造設計



正面Academy外観



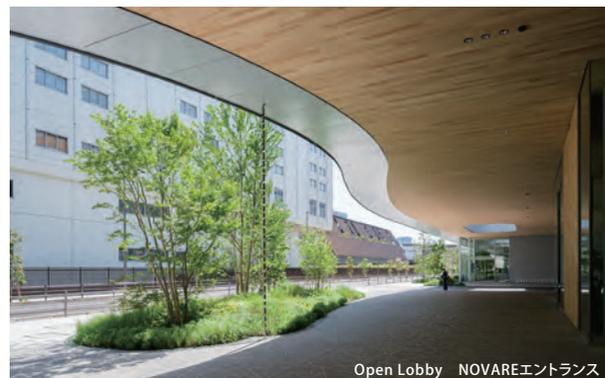
運河側Hub、Lab外観



正面Hub、Academy、Archives外観



庭園からの外観



Open Lobby NOVAREエントランス



NOVARE Archivesから望む旧渋沢邸



温故創新の森 NOVARE Smart Innovation Ecosystem NOVARE

温故創新の森 NOVARE

牧住敏幸	意匠設計	小川浩平	意匠設計
稲葉秀行	意匠設計	片山浩一	構造設計
田中初太郎	構造設計	重盛 洸	設備設計
久米建一	構造設計	宮本和明	電気設計
高橋満博	設備設計	丹羽健二	電気設計
金馬貴之	意匠設計	山友也	構造設計
杉山彩香	構造設計	今川美帆	構造設計
山下美帆	構造設計	都築弘政	設備設計
小林央和	意匠設計	長谷川龍太	構造設計
野崎 岳大	意匠設計	定久 木村	意匠設計
木村 誠	構造設計		

事業創新と社会創造の拠点  
— 温故創新の森 NOVARE Smart Innovation Ecosystem —

Smart Innovation Ecosystem NOVARE

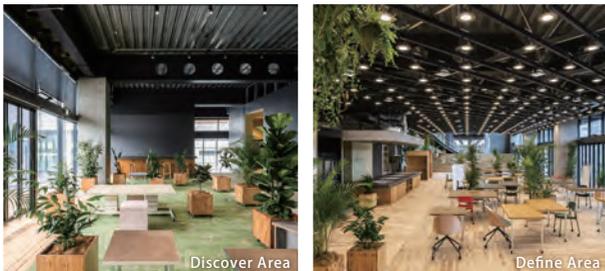
TOSHIOKI MAKIZUMI / HIDEYUKI INABA / KEIICHI KUME / KOHEI OGAWA / KOH-SEI GEMORI / KAZUAKI NAKANOTO / TAKASHI KIMBA / TOMOYA SUGIYAMA / AYAKA IMAGAWA / HIROMASA TSUZUKI / HISAKAZU OBAAYASHI / RYUHA HASEGAWA / KOHEI NOZAKI / TAKEHIRO SUDARISA



清水建設は、2030年を見据えた長期ビジョン「SHIMZ VISION 2030」において時代を先取りし価値を創造する「スマートイノベーションカンパニー」を指すべき企業像として掲げています。温故創新の森 NOVARE」は、その実現に向けた事業構造・技術・人材のイノベーション推進の場、社会とのコミュニケーションを図る拠点として、敷地全体を整備しました。この拠点は核となる情報発信・交流施設「NOVARE Hub」、生産革新を担う研究施設「NOVARE Lab（技術研究所潮見ラボ）」、体験型研修施設「NOVARE Academy（ものへり至誠塾）」、歴史資料展示施設「NOVARE Archives 清水建設歴史資料館」、当社二代清水喜助が手掛けた「旧渋沢邸」の5施設からなります。脱炭素社会におけるエネルギー利用のあり方として、複数施設をネットワーク化して都市全体でゼロ・エネルギーの実現を目指す「ネット・ゼロエネルギー・ソサエティ（ZES）」という考え方を実証する場として、先進技術も多数導入しました。街区融通システム「ネットワーク」により、複数建物に分散設置された熱源機器の統合制御を行い、複数建物間での熱エネルギーの融通を可能としています。これを活用して、多様なパートナーとの共創、建設事業の枠を超えた活動を実践し、レジリエント・インクルーシブ・サステナブルな社会の実現、50年先・100年先を見据えた会社と社会の発展に貢献できる人材の育成を目指しています。（牧住）



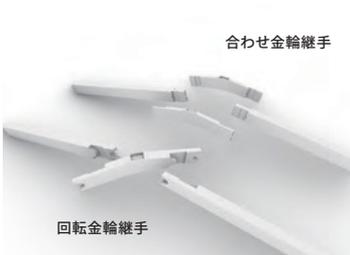
NOVARE Hub正面外観



Discover Area Define Area



3F Hub Office



合わせ金輪継手

回転金輪継手



木加工多軸ルーターによる削り出し



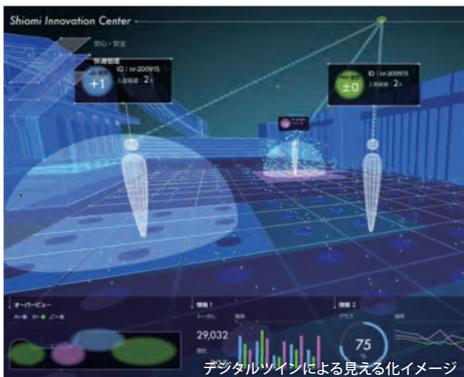
ヒクセルフロー



PoE照明



Link Room (中央管理室)



デジタルツインによる見える化イメージ

## 全員参加型イノベーション

NOVAREの中心機能を果たすNOVARE Hubは、他施設の幹のような存在となり、人材育成、歴史の継承、技術研究機能と連携しながら、全員参加型イノベーションを推進します。

建物の空間構成は、イノベーションな活動を行っていく上でのマインドセットでありプロセスであるDDRSを定義し空間化しています。DDRSとは「Discover・Define・Refine・Scale」の頭文字で、それぞれ、課題の発見、仮説の立案、検証と実践、社会実装の思考のプロセスを意味します。このプロセスを繰り返して行くことで、本当に社会が求めていること、ニーズがあるものを考え、生み出していくことにつながります。思考のプロセスを見直し、全員のマインドセットとして育まれる「NOVARE Hubのエリア名称」としてDDRSを活用しています。

## オンゴーイングな施設

求められるものが複雑化している社会に対し、応えていける施設を考えていく上で、建物自体も自由に変えていくことで、建物自体も自由に変えていく良いと思ってももらえるような空間を目指しました。建物を維持していくために必要な機械室を片側に寄せ、それ以外の機能は独立したBOX BOX形状で分散させています。トイレなどの水廻りも、時代に合わせて変わっていくものと捉え配置しています。仕上がりも、機能上必要な部分に施し、そのほかは素地とし、今後利用者がカスタマイズして創造につなげてほしいというメッセージでもあります。

## 「ノーアドレス」なオフィス

一般的に使われているフリーアドレスという言葉は、当社が初めて提唱したと言われています。今回NOVAREでは、日常的な活動を仕器のアドレスに縛られず、机や椅子ごと自由にワークスタイルに合わせ対応できる、アドレスを持たないノーアドレスなオフィスを提案しています。また、モバイルバッテリーにより建物のコンセントから脱却し、自由に働く環境を構築してほしいと考えています。(稲葉)

## 積極的な木材利用

耐火建築物への木材利用のプロトタイプとして、木質部材を最大限使用した架構計画を目指しました。屋根は引張り力のかかる上弦材に鉄骨を、圧縮力のかかる下弦材に集成材を利用したハイブリッド構造とし、火災時には鋼材のみで安全性を担保しています。木梁継手には日本古来の継手をアレンジした新形状の継手を開発し、最新の架構ロボットにより自動製作しました。

2階に設置したCLT耐震壁は、地震時のエネルギー吸収能力を備えています。その他にも、広葉樹であるカバ材の端材を利用したエントランス天井や、CLTのOAFフロアを採用したオフィス部分の床など、建物全体で木材活用を心掛けました。(久米)

## センシングとデジタルツインによる設備計画

ABW型の事務所エリアの空調には、小型ファンを高密度で設置し、「個人単位」での制御を可能とした『ヒクセルフロー』を開発しました。滞在環境履歴により更新される個人の好み情報とリアルタイム位置・環境情報を利用したデジタルツイン技術を使いファンを制御することで、一人一人に最適な環境を提供します。これまでにない多数のファン制御には、電飾制御等に使用される技術を採用するなど、工夫に努めました。全体の空調・照明においても、省エネの観点から最適な設定ソーニング計画を行い、事務所内の環境を見える化することで執務者に働く場の選択を促します。(都築)



構造研究エリア



Lab Deck Office



3Dプリンターゴライアス型

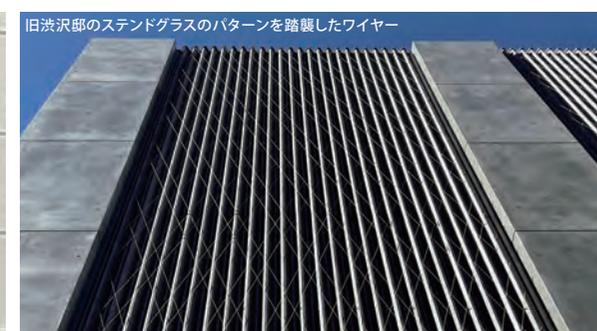


加力試験機



STS構法

RC柱と鉄骨梁接合部



旧渋沢邸のステンドグラスのパターンを踏襲したワイヤー



運河側NOVARE Lab外観



NOVARE Lab 断面ダイアグラム

Lab Office Area  
ラボオフィスエリア

Robotics Area  
ロボティクス研究エリア

Structures Area  
構造研究エリア

**空間の最大化と高剛性  
クレーン建屋を実現する構造**

実験空間の最大化と大型クレーン走行に対応した合理的な計画として、STS構法による扁平形状のRC柱を主体とした架構システムを採用しました。柱はフルPCとし、生産性・施工性を向上させるものです。建物のファサードはこの構造体をそのまま列柱表現しています。列柱の間は折板による外壁と植栽用のワイヤーを組み合わせた外装としました。植栽用のワイヤーは、敷地中央に位置する旧渋沢邸のステンドグラスに着想を得て、菱形状に張り巡らせました。内部の実験空間を成立させるための構造をそのまま表出し、実験場としての力強い表情をもたせることを意図しながらも、菱形の緑化によってオープンイン・ベーション施設に相応しい、親しみのある外装を心掛けています。(小川)

**異分野研究員の交流を促す  
空間構成**

研究員はそれぞれの専門性を高く持ち日々の研究を行っています。各分野で独立することが多いと考えました。建築の基本を担う材料・構造と、これからの建設を担うデジタルファブリケーションの融合は建築計画において重要なテーマです。そのため、異分野研究員の交流を促進するよう、中心のオフィス空間を取り囲むように実験空間を配置し、多方面に連続する空間構成としました。オフィスからは各実験空間を望むことができ、それぞれの研究を見ることができ、実験を終えた研究員が中心のオフィスに戻って、分野を超えた会話や交流が行われます。また、高天井のM2階オフィス空間は、NOVARE Hubと視覚的にも階段でも連続し、研究施設だけではないインベーション機能との連携にも期待しています。

**構造実験、材料実験、  
ロボティクスの研究開発拠点**

清水建設技術研究所の一部組織が移転するNOVARE Labは、建築の基本となる構造や材料の研究、建設の最先端となるロボティクスとデジタルファブリケーションの研究開発拠点です。建物機能の性格上、敷地の一番奥側に配置し、セキュリティに配慮した計画とした一方で、NOVARE Hubとも一体空間を形成することで、社内外と連携しながら研究開発を行い、インベーションを促すことを目指しています。構造実験エリアには複雑架構の二方向同時加力に対応可能なL型二面反力壁を配し、400m級の超高層建物部材の実験が可能な30MN加力機を設置しています。材料研究エリアには材料製造・養生・分析・評価まで行うことができ、環境可変室や分析室などを整備しました。ロボティクス研究エリアは次世代型施工を推進するための自動施工ロボットを中心とする実験スペースが備えられています。モルタルや金属の3Dプリンター、天井や床材の自動作業ロボット等の研究がここで行われます。



NOVARE Academy

## ものづくりの原点を体感する

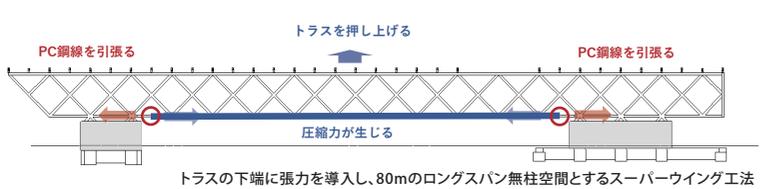
NOVARE Academyは、ものづくりの原点を体感し、またこれからのデジタルのものづくりを探索する研修施設です。建築から土木までの実寸大の実材料によるモックアップが展示されており、研修生は机上と現物を行き来しながら学ぶことができます。またこれから必要となるVR等のデジタル技術を活用した工事管理を学ぶことも可能です。これらの新旧のものづくりのプロセスを学ぶことで、ものづくりの精神と技術の継承を行います。社外の方々の利用も想定し、これからのものづくりと一緒に考えていく施設として計画しています。(金馬)

## 建築空間に可変性を与える スーパーウイングトラス

シミズの保有技術であるスーパーウイングトラスは、トラス下弦材に設けたPC鋼線に張力を導入し、トラス全体を押し上げて応力と変形を制御することで、ロングスパン架構を可能にします。NOVARE Academyではこのスーパーウイングトラスと、建物両サイドに集中配置したRCコアオールを組合せた架構を採用し、約80mの無柱2層吹抜け空間を構築しました。これによりモックアップ空間を最大化するとともに、柱のないトラス下部からのモックアップの更新性を確保しました。(今川)

## 建設業を表出するファサード

1階は約80mのGCWとし、柱のない透明感の高いファサードとすることで、内部のモックアップをショーウィンドウのように映し出し、歩道との一体感を演出しています。2階ファサードは外装材の実験場として計画しており、建設現場の仮設単管と同サイズの間柱を設け、クランプで容易に外装材を取り付けられる設えとしました。GCWはスーパーウイングトラスの下弦材に取り付けたため、GCWブラケットにてトラスの変形を吸収する機構を採用しています。トラスの鉛直変形に対しては上下にスライドするベアリング機構を、風圧時などの面外変形に対しては曲面座金を設けることで、大変形に追従可能な外装を実現しました。(杉山)



## これからの建設業へのチャレンジ

NOVAREでは次世代の建設生産手段である3Dプリンターにも複数箇所を取り組んでいます。

一つ目に先述のスーパーウイングを支えるコアオール型枠を製作しました。応力図をそのまま壁の厚みに変換することで矩形に比べてコンクリート量を1割削減しています。型枠内部には高炉スラグ粉末を多量に含むECMコンクリートを使用し、CO<sub>2</sub>を6割削減しています。形状・材料ともに環境配慮型の壁となっています。また、この型枠はオンサイトでプリントされており、国内最大規模のオンサイトプリント事例です。二つ目に駐車場の上部庇は構造体そのものを3Dプリントしています。3Dプリントの事例は型枠が主となりますが、37条の大臣認定を取得し、コンクリートとして梁部材、構造体に算入する型枠部材を製作しました。応力に応じて変化する部材断面は何度もテストプリントを繰り返して、プリンターのノズル移動速度を調整することで実現しています。三つ目に再利用保管庫のシェル屋根を製作しました。モルタル系の材料を圧縮域に保持することが必要となるため、3次曲面をもつ屋根にロードで張力を導入し、自重による応力をキャンセルする屋根の機構としています。(金馬)



導入部展示



ホワイエ



ホワイエ階段



清水文庫



一般展示室



特別応接室



多目的室より望む旧渋沢邸



ELVホールより望む旧渋沢邸



NOVARE Archives前面道路側外観



旧渋沢邸床柱



アルミキャスト外壁



エントランスホール



NOVARE Archives旧渋沢邸側外観

**建設業の近代化の歴史を  
展示する企業アーカイブ**

当社に保管されてきた歴史資料などを展示し、清水建設220年の歩みと共に、建設業の歴史を振り返ることができる施設です。社会の変化も織り交ぜながら歴史資料を解説するコンテンツを展示しており、幅広い方々に見ていただける内容となっています。先人たちによるイノベーションとも言える挑戦の歴史を展示し、新たな未来へとつないでいきます。(小林)

**歴史資料を守る強固な  
RC外殻+柔らかな部屋免震**

展示エリア3辺を耐震壁とした高剛性RC外殻構造により、超軟弱地盤における地震時の応答加速度を大幅に低減するとともに、旧渋沢邸に対して開放的な眺望を確保しました。さらに、貴重な資料を展示する清水文庫は傾斜すべり支承とその上下運動を活かしたばね摩擦ダンパーによる部屋免震システムとしており、長周期、大振幅などあらゆる地震動から展示物を守ります。部屋免震を支える2階床は、スパン12.8mの梁型のないフラットなプレストレススラブとしており、コンクリート打設の1階天井を創り出すとともに、フレキシブルな展示計画に対応できるようにしています。(長谷川)

**歴史資料を美しく見せる**

**照明計画**

歴史資料がより美しく、より印象的に見えるように、展示物や展示場所に合わせた様々な照明器具、照明制御を取り入れました。高Ra値器具の選定、配光角を考慮した取付位置の決定、調色調光制御や個別制御(DALI)を採用しています。大小様々な模型がある常設展示室では、配光角、配光向き、調光率をスマホ操作で変更可能なムービングスポットライトを採用し、展示内容に合わせてライティングが変更できる計画としました。常設展示室では、コンクリートの大壁面にプロジェクターで投影する設備が導入されています。映像投影に合わせて室内のブラインド閉鎖と消灯の操作を可能にするため、DX-Coreの連携制御を実現しました。(野崎)



## 文化財的価値の 継承と計画の共存

旧渋沢邸は渋沢栄一の邸宅の一部として明治11年、現江東区永代に二代清水喜助により建てられた「表座敷」を母体とし、その後幾度かの移築・改修の経緯をもちます。今回、現港区三田綱町、昭和5年西村好時の設計による洋館を併設した時期を復原期として青森より5年の歳月を掛け移築しました。移築にあたって、建設前に文化財指定の取得、建築基準法適用除外等の関係法令・行政対応、文化財的価値と建物健全性の両立、見学設備の実装、2万余点におよぶ部材の健全性の確認と修理修繕・部材痕跡・史料調査による滅失した部分・部位の復原・部材を起点とする文化財としての施工・組立と困難を極めました。移築を可能としたのは、渋沢家の邸宅と二代清水喜助の設計施工という記念的意義に加えて、老朽化、震災、戦争といった未曾有の危機さえをも乗り越え、先人たちが建物に注いだ生命力でした。

移築の道程は、建物として当社の歴史の一端を辿るものとも言えます。二代清水喜助による表座敷の竣工より140余年を経て、我々は旧渋沢邸の歴史的・文化財的価値の継承として「進取の精神」の継承をも託されたと考えています。(定久)



表座敷 2階客間

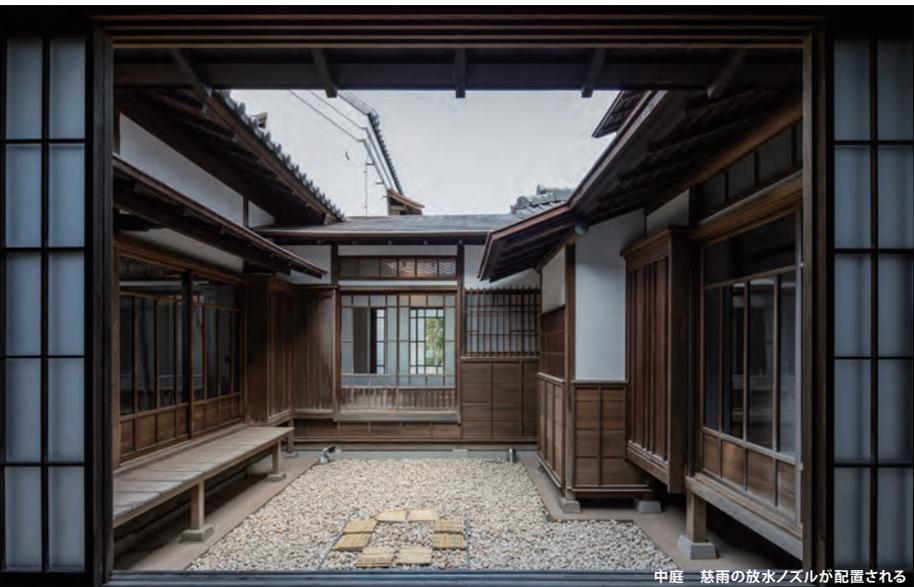


剝木による部材修繕

表座敷軸組(枯木)組立



洋館客間 建物の意匠、部材を傷めることなく空調設備を実装している



中庭 慈雨の放水ノズルが配置される

近年、木造伝統建築が火災により損傷・滅失する事例があり、火災およびその消火活動時の建物損傷からの保護は、木造文化財建築に求められる共通する課題です。今回の移築にあたり、建物外周部からの火災リスクを低減するため新たな防災システムである自動火災検知放水システム「慈雨」を開発し、建物の外周部に設置しました。慈雨はAIを用いた画像認識技術により、監視カメラ画像から火災の位置を検出し、そのエリアに対して自動で放水を行います。また建物を損傷しないように放水圧力を制御することにより、火災による焼失と、水圧による建物の損傷のリスクを同時に軽減することができます。(重盛)

計画にあたっては、文化財的価値の継承(災害リスクの低減、一般公開される建物としての安全性の両立が求められました。防災設備、照明器具は既存部材を傷めないよう、既存天井開口を活用し配置、照明器具は往時の写真を参考に復原するとともにLED化をしています。また複雑な屋根形状にあって意匠に配慮し、現行基準を満足した雷保護システムを実装。感震ブレーカーによる地震時の通電火災対策など移築前にはない災害対策も装備しています。また車椅子の乗降を可能とする自立型(テレスコプレーム形式)の昇降機設備を実装し、バリアフリー化に配慮しています。(宮本)



昇降機  
(通常時板戸に隠れる)

文化財として広く公開される施設のため見学・利活用の観点から往時にはない空調設備を洋館エリアに備えています。洋館の床材は往時の意匠、部材が滅失し、今回新装することから、床面の給気・還気する空調方式を採用しています。地下に機械室を新たに整備し、床下よりダクトを各部屋へ展開しています。その他、見学者用のトイレ、パントリー機能、往時にはない設備を建物に装備すること、移築という部材の配置等を把握できない状態での計画は困難を極めました。が、建物の意匠、部材を傷めることなく、文化財的価値の継承に努めました。(都築)



最終候補他5案



No. 33



コンペ案をベースに立案された基本構想



その他好事例シート



発表風景



最優秀コンペ案

**全社員参加のデザインコンペ**

全社員参加型のイノベーション施設として竣工した「温故創新の森NOVARE」は、2019年に実施されたコンペをきっかけにスタートしました。「社会とともに未来価値を創造（共創）する」の拠点をキーワードに実施されています。

デザインコンペには、設計本部だけでなく、支店設計部や次世代リサーチセンター、土木技術本部、技術研究所、フィールドフォー・デザインオフィスより提出案数44案のべ254人の参加者がありました。

審査のポイントとしては、

- ①全体構成（各棟の配置やつなぎ方）
- ②旧沢尻邸（配置、眺望、庭園との関係）
- ③環境（ランドスケープ、周辺との関係）

が特に重要視され、後の基本構想につながっています。

コンペに提出された案の中、最終候補として6案が選定され、当社役員へのプレゼンテーションが行われました。その他、選考から外れた案の中の、プロジェクトが進んだ際のアイデアにつながる好事例も選定され、現在の計画に結びついています。（稲葉）

# 人を水辺に近づけるウォークアブルなまちづくり

— えき・みず・みどりをつなぐ開発許可道路と潮見しづさわ公園 —



## 新しい産業・観光拠点をつくる

潮見地区は、東京臨海部と江東区の既成市街地をつなぐ拠点であり、東京駅から10分以内、都心からのアクセスが良い立地にあります。しかしながら、地区内には大規模な未利用地・公有地が多く残るエリアです。

2020年、駅東側ではインバウンド需要に対応したホテル建設が加速しましたが、当社がインベション拠点を開業することによって、地区に新しい産業・観光拠点が生まれました。

## 区と連携した都市基盤整備

本計画は、江東区の上位計画である潮見地区まちづくり方針に基づき、潮見駅から水辺へつながる道路・公園・水辺等遊歩道を整備することで、潮見駅東側に新しい回遊性・歩行者ネットワークを構築しています。

これまでの臨海部のプロジェクトを通じて得た江東区とのつながりを活かして、開発計画部では、計画の初期段階（用地取得・旧渋沢家住宅の移築）からプロジェクトに参画し、最後の開発許可道路・公園の江東区への引き渡し・竣工まで事業に携わりました。

## えきと水辺をつなぐ

### 開発許可道路

潮見是水辺に囲まれたエリアであるにもかかわらず、水辺へのアクセス路が極端に少ないまちでした。さらに、元々の敷地は、前面道路への接道間口が狭く、旗竿敷地になっていました。

そこで、敷地の有効利用のため、開発許可制度を用いて、潮見駅から水辺へつながる区道を計画しました。しかし、新設の行き止まり道路は認められず、幾度となく警察協議を重ね、公共施設・水辺に接続し、転回路を設けることで道路の新設が認められました。

道路の面積を減らすため、道路幅員を最小限にして北側歩道の植栽を敷地内に整備し、美しい街路樹景観・水辺へのアプローチを創出しています。

## みずとみどりのネットワーク

### 敷地内遊歩道

東京臨海部の特徴は、都心では希少な質の高い緑と魅力的な水辺空間です。

地域の魅力を最大限に活かした遊歩道の整備により施設利用者の屋外活動を促進し、精神的にリラックス・リフレッシュして、ひらめきやアイデアを誘発・健康をサポートする空間が完成しました。

当社敷地内でありながら地域住民にも開放することで、地域貢献の役割も果たしています。

## 水辺と一体的な地域活動の拠点

### 「潮見しづさわ公園」

公園は、建築敷地と一体となった植生・景観をコンセプトで整備し、ステーションから旧渋沢家住宅と水辺を眺めることができます。

一方で、運河側は海岸保全区域と港湾隣接地域が重複しているため、水陸境界から20mは非常に厳しい荷重制限がかかっています。東京都と幾度となく協議を重ね、荷重計算をして公園と既存の「潮風の散歩道」の接続路を整備しています。

公園と道路は建物と同時期に、建築・土木一体となって整備し、江東区へ移管しました。しかしながら、公園の維持管理については、江東区と当社で協定を締結して、当社で行っています。

今後は、駅前広場と共に植生管理・環境学習のイベント実施など、建物と一体となって、地域のエリアマネジメントにも取り組む予定です。

## これからの潮見のまちづくり

NOVAREの開業により、新しい産業・技術革新が生まれる「種」が完成し、潮見にインベション文化を醸成する環境づくりができたと考えています。当社は今後も継続して、潮見のまちづくりに取り組みしていきます。(坪内)



坪内 舞子 入社12年担当 開発計画  
佐鳥 蒼太郎 入社4年担当 開発計画

Smart Innovation Ecosystem NOVARE  
温故創新の森 NOVARE



潮風の散歩道との接続



NOVARE位置図



潮見しづさわ公園



潮見地区まちづくり方針と配置図



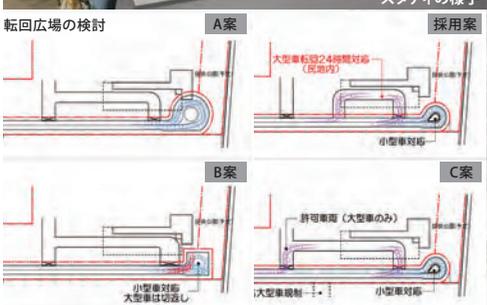
駅から水辺へのアプローチ



開発許可道路



スタディの様子



転回広場の検討

# 札幌の風景を纏い、街にきらめくオフィスビル

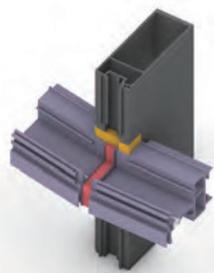
— ここにずっとあったかのように —

## 札幌に建つオフィスビル

札幌駅至近のオフィスビル計画。敷地は札幌開拓時の用水路を前身とする創成川に近接し、それと直交するJRの線路敷に隣接しています。事業主である当社投資開発本部の意向を受け、北海道の主要拠点である札幌において競争力のあるテナントオフィスの実現を目指しました。

## ランダムに雁行するガラス面が様々な表情をつくる

寒冷地として想起される雪や氷のきらめきをモチーフとした外観は、ランダムに雁行したガラス面が方位の異なる光を映し込み、時間や天候などの変化を建築に与えると共に、見る位置によって別の表情を見せます。全面ガラスによる平滑な表情をもつ建物ではなく、凹凸感と陰影のある表情づくりにこだわりました。枠の取合い形状は何パターンにも及び、それぞれ異なる納まりをパターン毎に根気よくチェックを行い、止水性の確保に努めました。



モデルによる納まり検証。シール手順を立体的に確認。重点管理ポイントとして施工者とのイメージ共有にも活用した。

南面は断熱カーテンウォールとインナーサッシュの組合せにより、断熱性能、防火性能、防音性能を同時に満足しています。四周の枠に樹脂を嵌合させたカーテンウォールを採用し、寒冷地に耐える断熱性能を確保。延焼のおそれのある範囲に対してインナーサッシュが防火性能を担うことでアウトナーサッシュにおける断熱カーテンウォールの採用を可能にしています。インナーサッシュは防火性能に加え、防音性能にも寄与。JR近接に伴う鉄道騒音に阻害されないワークスペースを実現しています。



基準階事務室内観。駅周辺を一望する大開口。雁行する外装は日射の角度により様々な陰影を室内にもたらす。



エントランスホール。木調ルーバーによりエレベーターホールと緩やかにつながる。

## 札幌の歩行者ネットワークと連携する共用空間

エントランスホールは木調ルーバーを効果的に配置し空間の広がり確保しつつ、暖かみのある色調で利用者を迎え、各階へと導きます。1階ピロティには歩行者にオープンスペースを提供し、札幌市の取り組む歩行者ネットワークづくりに連携することで札幌駅周辺の賑わい創出に寄与しています。1階滞留広場等のオープンスペース設置、基準階における高機能オフィスの整備、一時滞留スペースや備蓄倉庫確保による防災性向上の取り組みにより、総合設計制度を用いた容積割増を実現しています。

## ここにずっとあったかのように

この場所にあるべき姿を真摯に考え、その考えに事業主が共鳴いただいたことで、関係者で同じ方向を向いて取り組むことができ、それぞれが達成感を感じる案件となりました。(小松)



基準階エレベーターホール。暖かみのある色調で利用者を出迎える。



創成川通りより望む東側外観。幅約1200mmごとに雁行する外装は街の風景を様々な映し込み、時間や天候によって表情が変化する。

# ガラス大屋根が包み込むアウトレットモール

— 東南アジアの強い日差しの中でも快適な半屋外空間を実現 —



<b>Harjanto</b>	入社35年担当 意匠設計
<b>松下 卓矢</b>	入社9年担当 構造設計
<b>S. Wibisono</b>	入社8年担当 構造設計
<b>西村 由妃</b>	入社3年担当 構造設計
<b>I. Benigno</b>	入社1年担当 設備設計
<b>R. Gunari</b>	入社4年担当 電気設計

KARAWANG OUTLET MALL (GRAND OUTLET MALL)



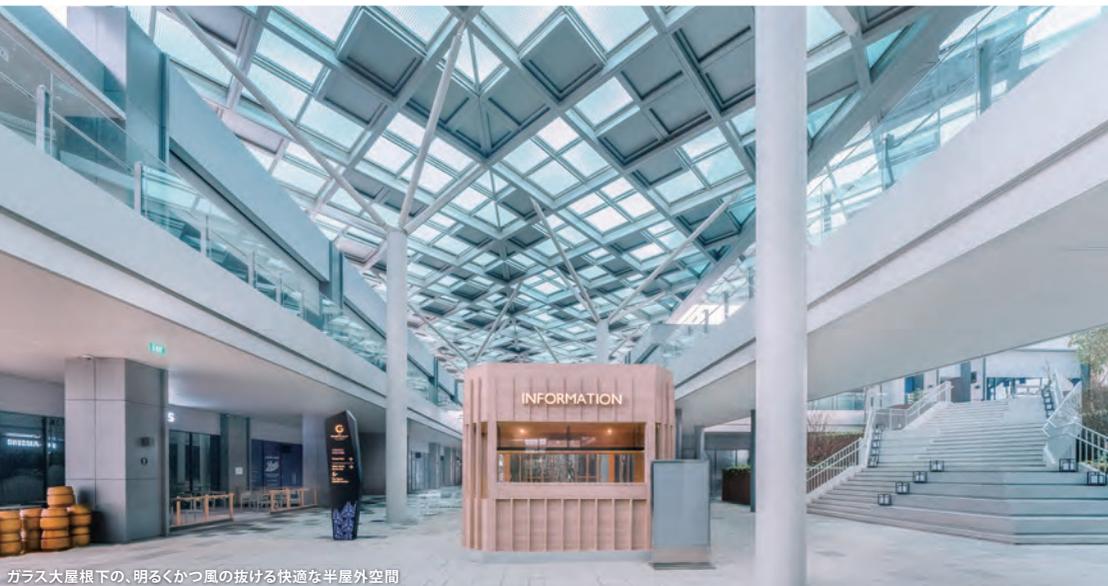
ガラス大屋根下のイベントスペース (夜間は、イベントに合わせてライトアップされます)



鳥瞰写真 (高速道路からもよく見えます)



フードコート



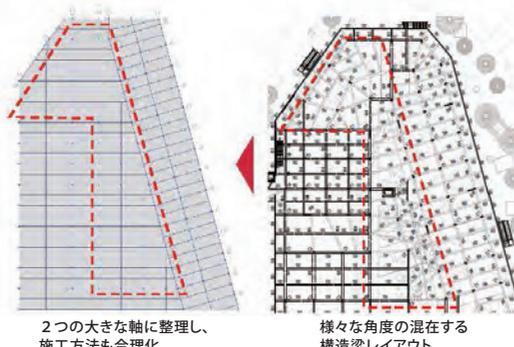
ガラス大屋根下の、明るくかつ風の抜ける快適な半屋外空間

## 正式発注前に技術協力 建設会社を選定され設計に参加

今回のプロジェクトは、インドネシアで初めての本格アウトレットモールとして計画され、建設会社選定は EJC (Early Contractor Involvement) 方式という形で入札でした。建設会社選定後、正式発注前に、設計部が客先側デザインコンサルチームに加わって設計をけん引。基本プランや構造形式、設備計画、各種仕上・スペックなどを合理化することでコストを削減し、客先目標コストに達した上で正式発注となりました。

4か月の EJC 期間中は、多数のコンサルをまとめながら、数多くの設計変更を行いました。

構造形式を合理化するために柱割を変えると、建築・設備計画へ影響を及ぼすのみならず、店舗割付も変わってしまいます。既に先行していた、お客様のテナント誘致計画とも調整を進めながらの設計作業となりました。



2つの大きな軸に整理し、施工方法も合理化

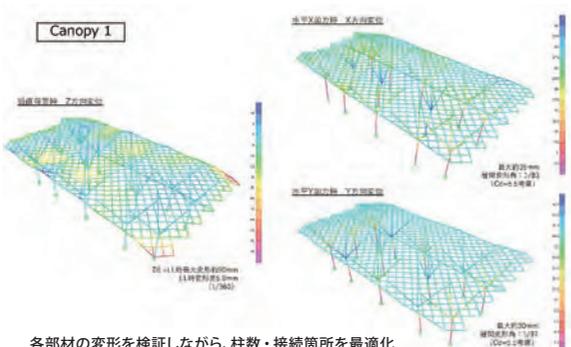
様々な角度の混在する構造梁レイアウト

## ガラス大屋根の設計変更

正式にプロジェクトを受注し、実施設計で詳細検討を進めている段階で、アウトレットモールの目玉でもあるガラス大屋根について、大規模な設計変更が必要ながことが判明…。

そこでガラス大屋根を店舗建屋の構造体から支える形式を、独立柱形式に方針変更しました。加えて、1階の機能を阻害しない柱配置、ガラス大屋根を支える効率的かつ意匠性に配慮した鉄骨部材計画を超短期間で検証しました。例えば、現地ガラスの標準規格サイズを考慮して屋根パネルのモジュールを検討したり、南国の日差しの下でも暑くない半屋外環を実現するために熱負荷を抑えるガラスパネルとアルミパネルの比率を検証するなど、機能と意匠性双方について、数多くの検討を行いました。

実際、現地でこの大屋根の下に立つと、ガラス越しに東南アジアの明るい日差しを感じながら、風の抜ける極めて快適な空間になっています。東南アジアでもこれまでにない新しい空間を作ることができたのではないかと考えています。



各部材の変形を検証しながら、柱・接続箇所を最適化

## インドネシア初の

## 本格アウトレットモール

施工床面積約5万㎡の巨大な商業施設がテナント要望による多数の設計変更に対応しながらも、無事に2023年12月にオープンしました。

設計施工期間を通じて多くの苦労がありました。オープン後初めての週末に、駐車場があふれる程のお客様を迎えた様子を見た時には、感慨深く誇らしい思いでした。日本のアウトレットモールよりもグレードの高い施設ができたと自負しております。

(Harjanto)



山本 武 入社14年目担当 意匠設計  
 浅井 健矢 入社2年目担当 意匠設計  
 新野 将平 入社6年目担当 設備設計  
 後藤 なつみ 入社9年目担当 意匠設計

FUKUOKA UNIVERSITY HOSPITAL MAIN BUILDING  
 福岡大学病院 本館

大規模・大学病院の移転増築

本計画は、昭和48年以来、特定機能病院、災害拠点病院の他、福岡市西部地区及び周辺地域の中核的医療センターとしての役割を担ってきた旧本館の老朽化に伴う移転増築計画。高い公共性と安全性を確保し、新型コロナウイルス感染症等の新興・再興感染症にも対応でき、高度先駆的医療を提供する618床の病棟、既存棟含め771床を増築棟として新たに整備しました。  
※既存棟設計：日本設計、施工：竹中工務店

患者満足度を高める  
 アメニティ空間の創出

建物外観は、既存棟との一体性を重視してモノトーンを基調としながらも、新しさを感じさせるデザインを目指しました。一方、インテリアモノトーン基調の既存に対し、急性期病院の緊迫した雰囲気や和らげるため、親しみやすいアースカラーや木質調の素材を多用し、優しい光につつまれた「あたたかい雰囲気」の空間を目指しました。  
 (山本)

広場をつくる II 記憶を繋ぐ

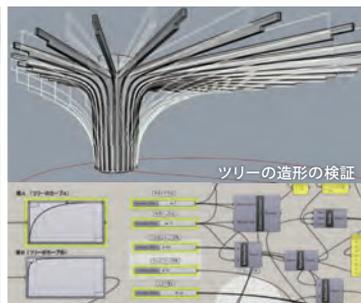
患者等の外部からの利用者は、既存棟より本館へアプローチしますが、本館のメインホール(本館と既存棟の建物全体の中心となる1階スペース)にたどり着くとシンボルツリーが迎え入れます。既存のアトリウムには日々多くの利用者が行き交う空間にとどまり、患者の居場所の不足が見受けられる中で、待ち時間を豊かにすることができ、緊張感があふれる急性期病院の緊張感が和らぐような「場」が必要と考えました。もともと本館のホールとなった場所は、既存棟のホスピタルガーデンがあり、既存廊下の延長上には木があったことから、広場的スペースとシンボルツリーのモニュメントを計画しました。(山本)



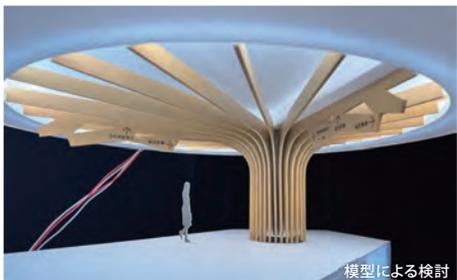
1階共用ホール ナナクマツリー



増築前のホスピタルガーデン



ツリーの造形の検証



模型による検討



現寸モックアップ



VRによる確認(副病院長)



VRによる確認(医師・看護師)



モデルルーム 確認会



1床室



1階共用廊下

コンピューショナルデザインと  
 ものつくり

シンボルツリーの造形は、コンピューショナルデザインの手法(Grasshopper)を用いて綿密にリブ形状、厚み、ピッチ等を決定しました。また、折上や足元の照明は、サーカディア照明とし、調光調色機能による運用で、時間ごとに明るさと光色を変化させることにより、室内で流れを表現し、自然光と同じような一日の流れを表現しました。照明配置、光の伸び具合、色温度などは、模型やモックアップで入念に検討を何度も重ね、大胆かつ繊細な納得のいくシンボルツリーの完成に至りました。(山本・浅井)

現物×VRによる合意形成

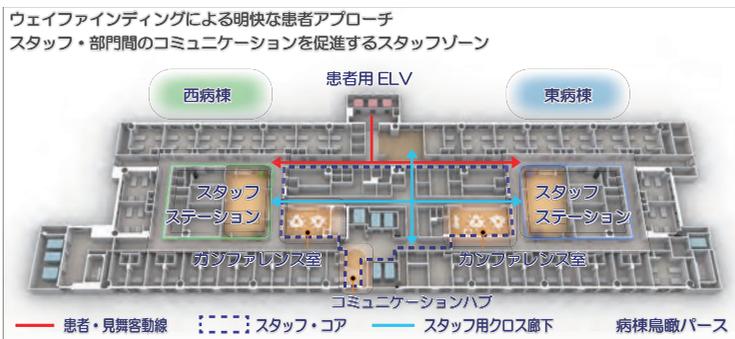
病院設計では、施主との合意形成のために、病室などの主要な部屋のモデルルームを制作し、現物確認を行うことが一般的ですが、今回の取り組みでは、ヘッド周りのメディカルコンソールや設備アウトレットなど多くのバリエーションが生じる部分については、現物確認では製作コストや設置場所、期間などの課題があるため、VRモックアップでの合意形成を実践しました。さらに、共用ホールや集中治療室などのインテリア、サイン、モニター位置を含めた空間全体のイメージについてもこれを実践し、医療スタッフの要望に応じて、打合せの場でデータ変更を行いご確認いただき、効率的かつ満足度の高い建築の創造に寄与することができました。(山本・浅井)



かつて池であった東病棟（ブルー）



ダイニング



患者・見舞客動線、スタッフ・コア、スタッフ用クロス廊、病棟鳥瞰パース



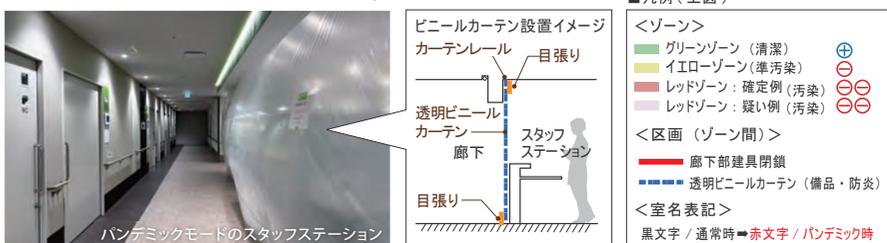
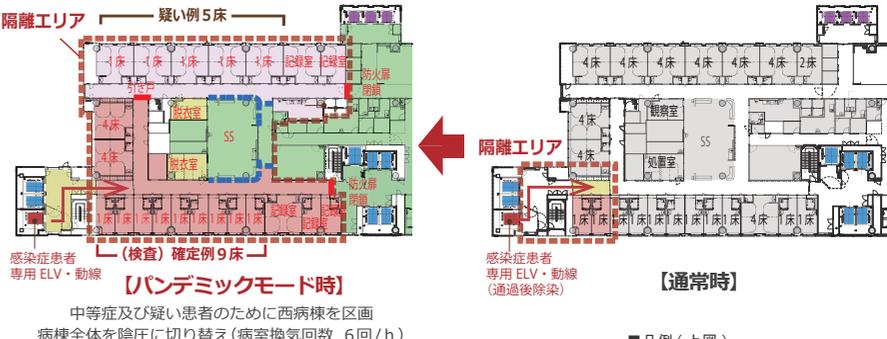
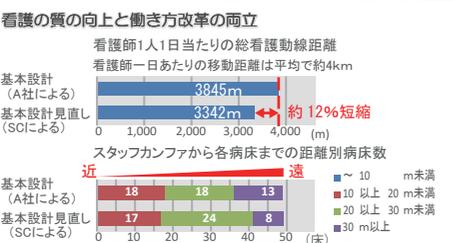
コミュニケーション・ハブ



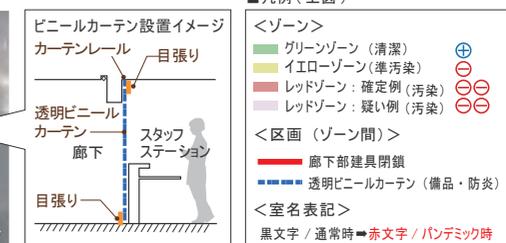
カンファレンス室



山並みを望む西病棟（グリーン）



パンデミックモードのスタッフステーション



航空写真

## サインに込めた

### ホスピタリティの想い

光の連続や壁面の色彩によるウェイファインディングシステムを導入し、わかりやすい建物を目指しました。先行表示は目立つ色とし、大きな文字で廊下の角々に配置したり、一般病棟においては、東西にテーマカラーを設け、ベイスカラーで区別してライトアップするなど視認性を高めました。図面から利用者の動線を分析し、どこにどのようなサインが必要かを抽出し、情報の正確さとわかりやすさのバランスを重視して提案しました。多種多様な機能からなる大学病院の情報量に圧倒されながら病院とのサインワーキングを重ね、議論してデザインを練り上げました。決定するプロセスは大変なものでしたが、患者にとってわかりやすく、病院スタッフの患者案内の労力低減の一助となることを願っています。（後藤・浅井）

## 働き方改革を後押しする

### 病院づくり

看護動線の最適化とコミュニケーションを誘発する仕掛けで医療の質の向上を目指しました。病棟のプランニングにおいては、看護業務の効率化を支援する「看護動線シミュレーションシステム」を用いて検討し、患者を観察しやすく動線の短い高効率プランとしました。さらに、チーム医療が推進されている現在では、部門を越えた多職種コミュニケーションが重要となっていますが、次代の人材育成を担う大学病院の役割に加え、スタッフの打合せや休憩のためのスペースを部門や病棟ごとに設け、スタッフが共有できる「場」を提案しました。

病棟カンファレンス室は、廊下面をガラスパーティションとし、気軽にアクセスでき自然な交流を誘発する空間を目指しました。また、スタッフエレベーターホールの一画にコミュニケーションスペースを設け、休憩やコミュニケーションの場として使用可能なスタッフ専用のアメニティスペースを整備しました。医療スタッフから学生まで様々な目的に活用されることを期待しています。（山本）

## 工連携で、パンデミックに備える

2020年8月、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)蔓延下で設計が始まりました。エアロゾル感染という当時はまだ解明されていない感染症への対策を施設計画に盛り込むため、病院の協力を得て、医師やスタッフ、施設担当者へのヒアリングや、既存病院の集中治療室や病室でCO<sub>2</sub>濃度や粒子濃度の測定・分析を行いました。新技術導入にはスケジュールやコストなど、様々な制約の中で、最適解を見つけなければなりません。建築・設備の観点から未知のウイルス対策にどう対応するかを日々模索しました。

「パンデミックモード」が、その答えの一つです。これは、通常時に一般病棟や集中治療室として運用しているエリアを、エアロゾル感染に由来する感染症患者用の隔離病床・病棟に迅速に変更・ゾーン拡張できるシステムです。初の試運転では陰圧切替のエアフロー（空気の流れ）が計画通りでなかったものの、風量調整を重ね、目標のエアフローや室圧を達成しました。

今や数十年に一度やってくると思われるパンデミックへの対応は、自然災害と同様に、これからの病院計画に一層求められることでしょう。COVID-19対応を行った現場からの直接的なフィードバックを施設計画に生かすことができ、病院設計者として重要な経験となりました。このシステムが使用されない未来を願いつつ、有事の際には医療機能を最大限に維持することを期待しています。（新野）

## 次世代の医療

### 臨床・研究・教育を「繋ぐ」

既存建物より診療の中核機能と病棟を増築移転させ、次世代の医療に繋ぐ「病院計画」そして、大学病院として臨床・研究・教育を「繋ぐ」施設が、3年間にわたる設計・工事監理期間を経て、新たなホスピタルランドマークとして完成しました。新たな施設の繋がりが次代の大学病院の顔となり、医療活動への益々の貢献と地域から永く愛される病院であり続けることを祈念しています。（山本）

## 運河に開かれた心地よい都市空間を創る

— にぎわいを創出する水辺空間をめざして —



GRAND MARINA TOKYO PARK TOWER KACHIDOKI MID  
GRAND MARINA TOKYO パークタワー勝どきミッド

祖父江 一仁 入社34年 担当 電気設計  
松浦 正一 入社30年 担当 構造設計  
永原 聖 入社29年 担当 意匠設計  
田村 隆 入社33年 担当 意匠設計  
金田 生 入社32年 担当 設備設計  
石渡 義隆 入社28年 担当 意匠設計  
巽 紅美 入社17年 担当 意匠設計

### 再開発の中核施設として

本計画は「GRAND MARINA TOKYO」(勝どき東地区第一種市街地再開発事業の中央に位置し、文字通り中核となる、1121戸の集合住宅、店舗、事務所、保育所等から構成される大規模複合施設です。当該再開発により、消防署(臨港消防署月島出張所)、公共トイレ(勝どき四丁目公衆WC)、護岸公園、人道橋、防災船着場、勝どき駅直結の地下連絡通路、地下鉄出入口を一体的に整備しています。

建物は、地下2階で都営大江戸線勝どき駅に接続され、地下1階から直接建物内にアプローチ可能です。1〜7階には店舗や事務所、保育園、アリーナ等を配し、8階を住宅への切り替え階として住宅共用部を集約、9〜45階を住戸とした計画としています。

(田村・石渡・永原・巽)

### 安心・安全な建物をめざして

構造は、不整形な平面の超高層建物を成立させるために基礎免震構造を採用しています。更に制震部材を併用することで、地震時の揺れを抑えると共に構造体の損傷も抑制しています。事務所階では、RC造の架構にS造の大梁を組み合わせることで最大17.4mの無柱空間を実現。住戸階ではPC鋼線入りの大型ボイドスラブを採用し、居室に梁型が出ない計画としています。

設備は、BCP対策のほか、雨水の再利用(外構散水や非常時のWC排水用)や太陽光パネルによる発電など、自然エネルギーの利用による環境負荷低減にも取り組んでいます。また、メトロパビリオン(地下鉄出入口)前には災害時に一時集合場所となる最大2000人収容の防災広場を設け、建物内に計画される一時避難及び長期避難用の避難所や地域防災倉庫と共に中央区初の民間による防災副拠点として地域防災に貢献しています。

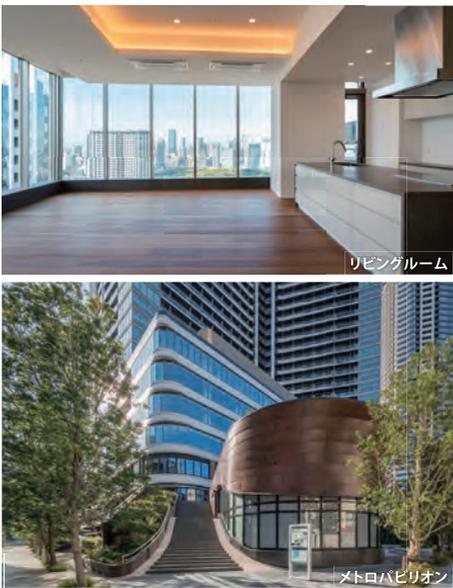
(松浦・金田・祖父江)



南東側全景 夕景



エントランスラウンジ



リビングルーム



メトロパビリオン



南側低層部(セントラルラウンより)

### 運河に開かれた心地よい都市空間を創る

運河へ開かれた広場は、噴水のある水盤を囲うように回遊・散策が可能で、緑溢れる庭園となっており、建物を利用する誰もが自由に過ごせる居心地のよい場が、にぎわいある街づくりに貢献しています。

建物は、にぎわいや人の動きを生み出すために運河側に張り出した店舗やコワーキングスペース、立体的なデッキ、階段、通路、フアンチャー等を随所に配置し、回遊性を持たせながら、人々が集い水辺を感じられる溜まりのスペースを設けるなどの工夫を行っています。

外装は、曲線を生かした形状、水辺や船をイメージした素材、ディテールを創り込むことで軽快で動きのある、水辺の街に相応しいデザインとしています。また、建物低層部や頂部のフレーム外構のライトアップにより夜間にも対岸からの美しい水辺の風景を創り出しています。外装や照明デザインの確認に大規模な模型や現寸のモックアップを作成して検証しました。

大規模複合施設の複雑な動線・セキュリティ・管理計画を使い易く管理し易いように整理しながら、デザイン面ではヒューマンスケールで見た時に大味にならないような各所ディテールの創り込みに苦勞しました。

(田村・石渡・永原・巽)



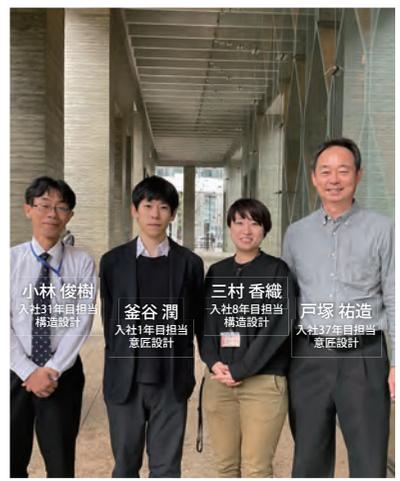
現寸モックアップ



プラザエントランス 夜景

# 聖路加国際大学 聖ルカ礼拝堂

— 歴史的価値の保存と安全化を両立させた祈りの場 —



ST. LUKE'S INTERNATIONAL UNIVERSITY  
ST. LUKE'S CHAPEL  
聖路加国際大学 聖ルカ礼拝堂

## 歴史を継承した安全安心な 祈りの場をつくる

アメリカ人ミッション系建築家「J・V・Wパーガミニ」の設計で、1936年清水組により聖路加国際病院の中に施工された礼拝堂。老朽化した防火石天井の小片落下をきっかけに立ち入り制限されていましたが、今回の保存改修工事を経て、伝統を継承した安全安心な祈りの場が再開されました。

保存改修の仕方について、歴史的建造物としての価値の保存、安全に使用できるための設え、予算等様々な観点で施主と協議を重ね辿り着いたのは、「歴史を継承しながら安全安心に継続使用できる祈りの場」をつくることでした。

### 芸術性より

### 安全を優先する決断

安全化のためには、防火石天井の落下防止、ステンダグラスの飛散防止を行う必要があります。歴史的価値を保持するためには、既存の仕上材や形が現状のまま安全化することが課題となりました。天井の安全化は、既存防火石を一旦取り外し天井内補強工事後再取り付けする案や、既存防火石を一つずつ貫通ボルトとワイヤーで固定する案等を検討しましたが難易度が高く、施工可能と思われた天井全体をガラス繊維強化建材でつくり替える案で見積をしてみると予算と大きく乖離していました。

芸術性を優先しての施工に行き詰まり、海外の教会の安全化施工例を調べてみると、安全化のために仕上材や形状変更をした例や、補強材が見える状態を容認している例、防護ネットを天井全面に張っている例等を目的当りにし、そこに共通するのは芸術性の優先ではなく、「祈りの場」を安全に使い続けることを最優先することだと気づきました。そして天井の防火石を撤去し、ボードで既存曲面天井を復元軽量化し、安全でコストを抑える案に辿り着きました。

## 石の天井をボードで復元する

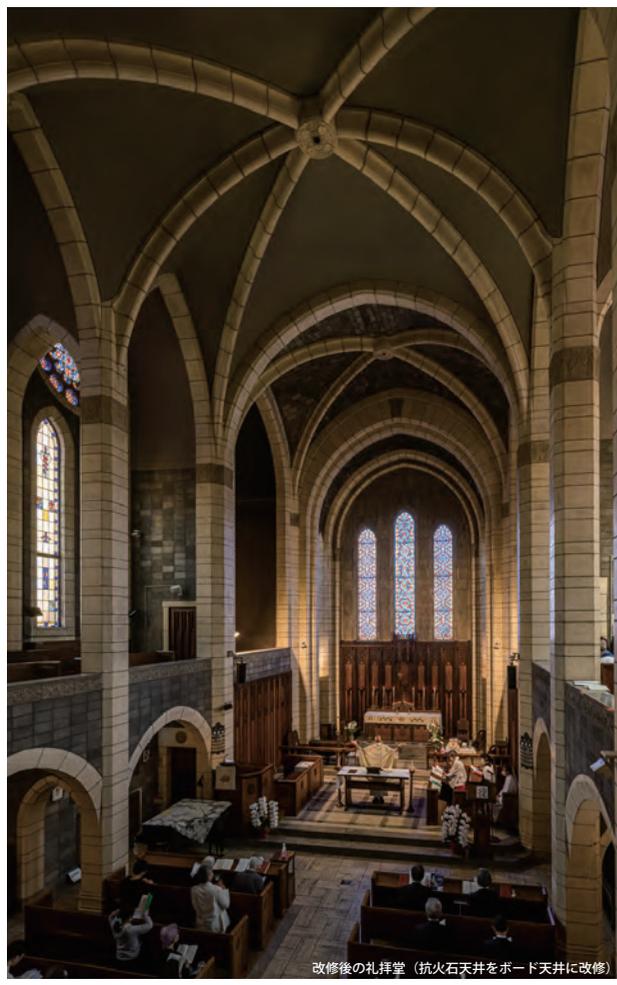
既存の複雑な曲面天井を復元するため、点群測量により既存の形状を3次元データ化しました。位置と色情報を併せ持つ点の集合体から、施工できる寸法を決める必要がありました。ところが、建設時の施工誤差と長期間の歪みにより、復元した図面に寸法が合うところは、一カ所もありませんでした。単純な図形で表せる形状をひたすら探してできた図面をもとに、どうつくるかが次の課題になりました。

### 考えて、やってみて、

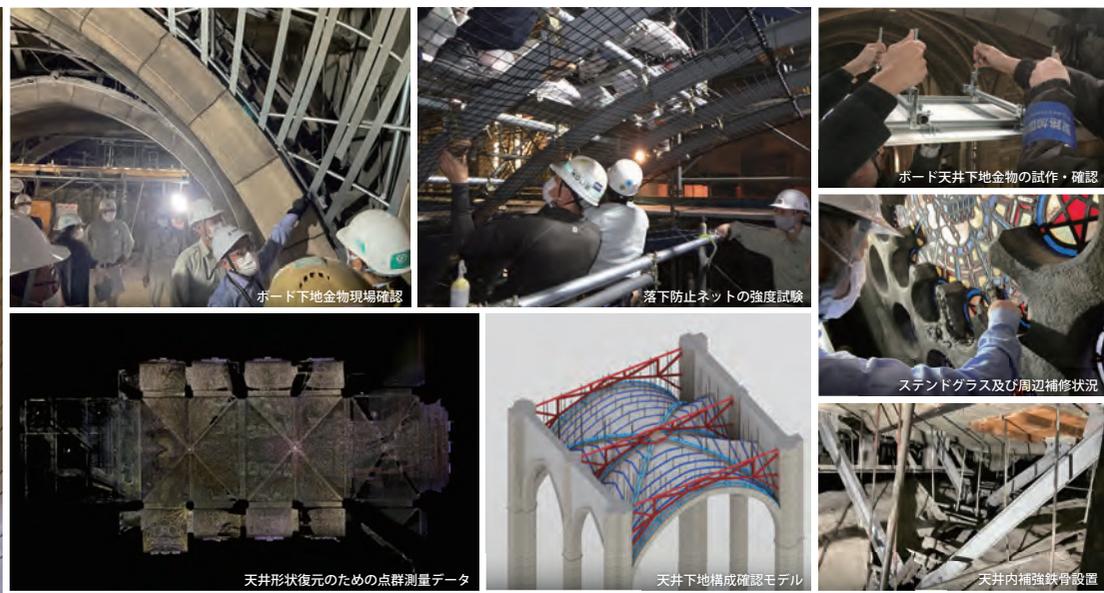
### 納得したら次へ

場所ごとに寸法が微妙に違う形状を復元するため、天井下地を2次元曲線の丸パイプを直交方向に組み合わせ3次元を形成し試験施工してみると、丸パイプではヒス止めが難しいことがわかり、プレートを追加しました。既存防火石天井保存部分の落下防止ネットの強度確認は、鉄骨でアーチを組みネットを張り、砂袋で強度試験を行いました。また、防火石とプラスチックで一体だった天井が軽量化され、残されたアーチの横揺れが懸念されたため、下地鉄骨の取付部を緊結補強しました。

コロナ禍による着工の延期に始まり、着工後も想定外のものが現れるたびに知恵を出し合い、無事安全化工事を完遂することができました。(戸塚)



改修後の礼拝堂 (防火石天井をボード天井に改修)



ボード天井下地金物の試作・確認

スタンドグラス及び周辺補修状況

天井内補強鉄骨設置

天井下地構成確認モデル

天井形状復元のための点群測量データ

落下防止ネットの強度試験

ボード下地金物現場確認

ボード下地金物現場確認



昭和11年竣工時の写真 (中央の塔が今回改修工事の礼拝堂)

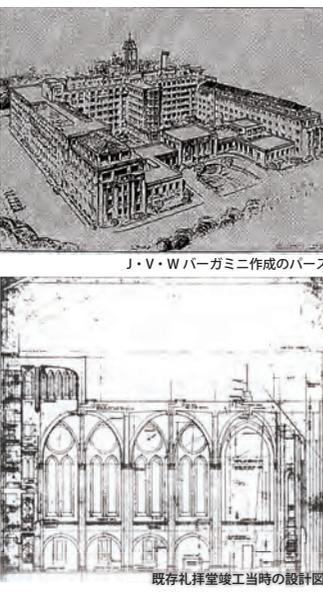
J・V・Wパーガミニ作成のパース

取り外した天井の防火石

天井裏に入り内部確認

改修工事用足場設置工事中写真

外部劣化状況確認

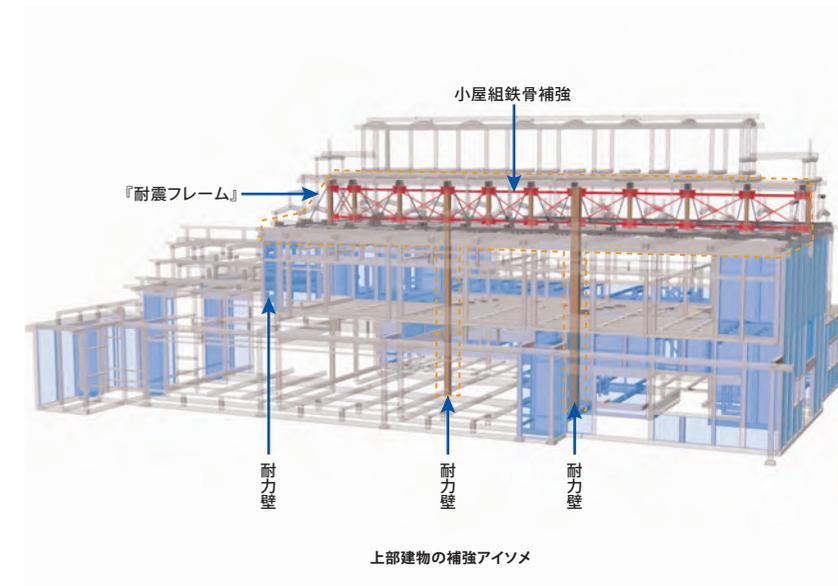
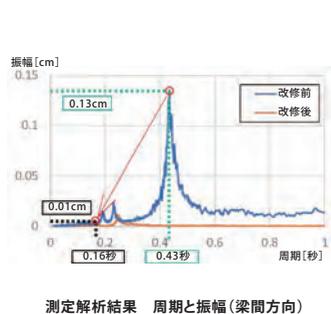
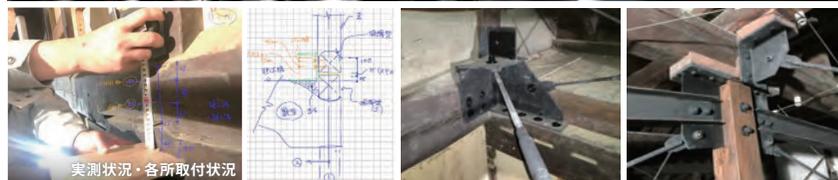
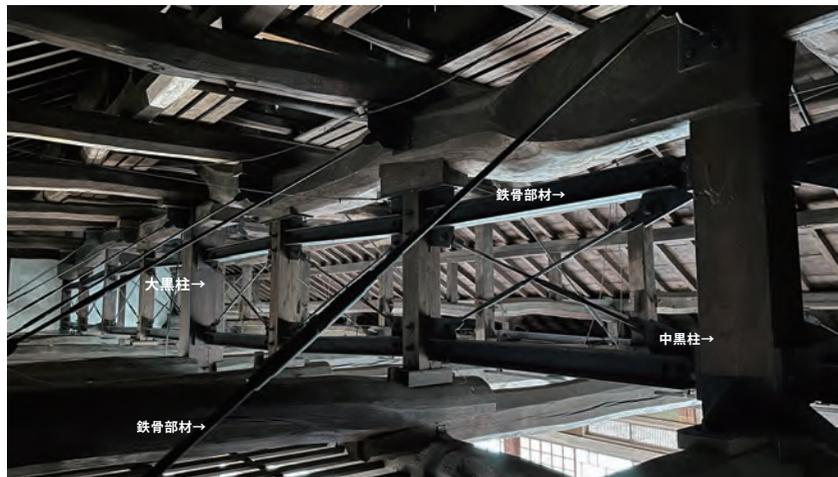


J・V・Wパーガミニ作成のパース

既存礼拝堂竣工当時の設計図



改修前の礼拝堂 (防火石の天井)



### 耐震補強の構成

耐震補強は構造用合板の耐力壁に加えて、通し柱である大黒柱・中黒柱、小屋組補強鉄骨を組み合わせ「耐震フレーム」を構築し、面材耐力壁を最小限に留めて既存建物の開放的な空間をそのまま継承しています。

既存建物の壁は構造用合板の耐力壁に置換えて元来のしつらえに合わせ、伝統工法部分は真壁仕様、在来軸組構法部分は大壁仕様として補強しました。一部既存建具位置にも耐震壁を設け、平面的にずらして建具に沿わせておさめることで建具・意匠の保存と構造耐力の確保を両立しています。

既存の小屋組は伝統的な和小屋であり、元来の力強い構成を活かすため、松・檜の曲がり梁に添わせて鉄骨部材を配って補強しています。各所現地実測の上、既存の梁などの曲面には光付けした当て木を使用して補強部材を取り付け、耐震補強がそのまま見える形におさめました。

また、改修前後で建物の振動計測を行い、改修前に比べて建物の剛性が上がっていることを確認し、耐震補強の効果が確認できました。(西川)



設計を進めていくにあたり、旧渋沢家の住宅として歴史がわかることは継承し未来に伝えることとしました。南側の開放感あるしつらえは創建当初の意匠で、この建物の大きな特徴でした。1階、2階ともにこの部分には耐震要素は極力設けずに意匠を継承しました。1階座敷と多目的室は、建具を外せば一体に利用できるようにし、2階建物活用が進むようになりました。2階蚕室では、小屋裏は補強しながらしつかりと見せることとし、一部蚕の棧棚を復元しています。養蚕しなくなった後につくられた和室はのこして見て頂くことにしました。

1階土間では礎石が発掘されました。腐朽していた土台は新規交換とし、礎石は再利用として、建物をジャッキアップし部材高さを整え、仕上として三和土も再生しました。(柿澤)



RENOVATION OF MAIN BUILDING OF FORMER SHIBUSAWA RESIDENCE, "NAKANCHI"  
旧渋沢邸「中の家(なかんち)」主屋改修

### 南側の開放感あるしつらえの継承

旧渋沢邸「中の家(なかんち)」は、深谷市指定文化財(史跡)であり、主屋は明治28年(1895年)に再建された田の字型の座敷をもつ養蚕農家でした。渋沢栄一翁が生まれ故郷としてたびたび帰郷しこの建物が滞在していました。未来へ伝えるのこしていく建物として再生するにあたり、安心して見学できるように耐震性を向上させること、文化財の価値を継承し更なる活用を図ることを目指しました。(柿澤)

MASAYA SEKI / HIDEYUKI KAKIZAWA / OSAMU SADAHIRO / KOTA NISHIKAWA

RENOVATION OF MAIN BUILDING OF FORMER SHIBUSAWA RESIDENCE, "NAKANCHI"

文化財として未来へ伝えるのこしていく

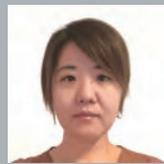
— 創建当初の意匠を継承しながら、より活用できる建物とする —



原 裕之郎  
入社8目担当 構造設計



油野 球子  
入社12年目担当 構造設計



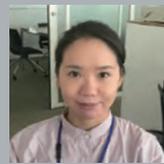
佐々木 由美  
入社14年目担当 構造設計



田中 初太郎  
入社28年目担当 構造設計



田中 初太郎  
入社28年目担当 構造設計



嶋田 伊織  
入社13年目担当 DDC



山森 久武  
入社6年目担当 意匠設計



日本免震構造協会  
アイデアコンペ



江頭 樹  
入社3年目担当 意匠設計



今西 志織  
入社2年目担当 意匠設計



村田 知謙  
入社5年目担当 意匠設計



2023年度 日本建築学会  
技術部門設計競技



アメリカ・デンマーク  
留学報告



デジタルコモンズ



加藤 直礼  
入社15年目担当 DDC



青木 貴  
入社11年目担当 構造設計



下錦田 聡志  
入社11年目担当 構造設計



稲葉 知之  
入社15年目担当 構造設計



渡邊 美土里  
入社15年目担当 DDC



大江 諭史  
入社7年目担当 DDC



中上 和哉  
入社3年目担当 意匠設計



坂井 高久  
入社3年目担当 構造設計



田主 望  
入社3年目担当 意匠設計



大西 慶太郎  
入社5年目担当 意匠設計



雷安 達朗  
入社6年目担当 意匠設計



竹中 祐人  
入社6年目留学



佐竹 浩芳  
入社30年目 意匠設計



増田 隼輔  
入社16年目担当 構造設計



南 博之  
入社10年目担当 構造設計



志村 雄輝  
入社8年目担当 構造設計



齋藤 祐哉  
入社15年目担当 構造設計



シミズの構造設計展  
遺産の多様性



佐々木 由美  
入社15年目担当 構造設計



櫻木 健司  
入社7年目担当 構造設計



林 哲朗  
入社3年目担当 構造設計



伊藤 凜彩  
入社3年目担当 設備設計



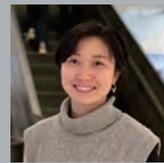
浅見 拓馬  
入社3年目担当 意匠設計



太田 修平  
入社5年目担当 設備設計



日野 一貴  
入社6年目担当 意匠設計



中野 舞  
入社12年目留学



山下 麟太郎  
入社4年目 意匠設計



大江 諭史  
入社6年目担当 DDC



穉山 貴志  
入社8年目担当 構造設計



山岡 祐貴  
入社5年目担当 構造設計



久米 建一  
入社12年目担当 構造設計



宮城 佑輔  
入社20年目担当 構造設計



端野 亮一  
入社25年目担当 意匠設計



塚本 浩  
入社10年目担当 DDC



川地 美代子  
入社5年目担当 意匠設計



鬼頭 秋帆  
入社3年目担当 設備設計



安間 理子  
入社3年目担当 意匠設計



中上 和哉  
入社2年目担当 意匠設計



佐野 達彦  
入社6年目担当 構造設計



池尻 佳朗  
入社10年目留学

# 04

episode

## プロジェクトの枠を超えた 幅広い活動

設計プロジェクトだけではなく、幅広い活動を通して若手が活躍しています。デジタル領域に特化し、社外の方々と講演会や意見交換などを行うデジタルデザインセンターの活動や、社内制度を活用した海外のデザインプロセスを習得する海外留学。今年度は若手有志のチームで社外コンペにチャレンジして入賞するなど、提案力の強化も図っています。長年の構造設計の蓄積を発信するシミズの構造設計展など、社内外の垣根を越えたシミズの活動を紹介します。

# Shimz DDEの可能性を拡張する、デジタルデザイン「ミチノミヤ」

リアル×バーチャル×双方向で学び合い、「知を共有」する場づくり

SHIMZ AEC TECH 2024 Spring

Huge Thanks!

運営担当：デジタルデザインセンター

佐竹 浩芳 入社30年目 意匠設計	田中 初太郎 入社28年目 意匠設計	鈴木 康二郎 入社12年目 意匠設計	竹内 萌 入社7年目 意匠設計	山下 麟太郎 入社4年目 意匠設計	嶋田 伊織 入社13年目 構造設計
大江 諭史 入社7年目 構造設計	今津 文沙 入社6年目 設備設計	中島 風 入社12年目 設備設計	渡邊 美土里 入社15年目 プレゼ	加藤 直礼 入社16年目 プレゼ	加藤 亮次 入社14年目 プレゼ

DIGITAL COMMONS  
デジタルcommons

Digital Commons

Virtual  
分業横断イベント  
「デジタルデザインスタジオ」  
「Tasting Workshop」  
「Hackathon Events」  
「Exhibition」  
「Discussion」

Real  
Digital Studio @boc

デジタルcommonsのコンセプト

デジタルスタジオでリアル開催されるイベント

キーワード  
「Keep Learning」  
「Keep Trying」  
「Keep Connecting」

ラーニングカーブを下げないために…

Digital Commons

社内SNSコミュニティ  
2024年4月現在 登録者163名

バーチャルな情報発信の場

SHIMZ AEC TECH vol.0

WORK-SHOP

LECTURE SERIES

HACK-ATHON

Shimz AEC TECHの全プログラム

温故創新の森 NOVAREにて開催

ピッチ：取り組みたい課題や目標を発表

M&A：共感した者同士でチーム組成

ハッカソン1日目：ピッチ・M&A

ASMEが分野を超えて取り組む

わずか1日でのプログラム開発

チームの提案をまとめる

モックアッププログラムを作り、チーム内で議論

ハッカソン2日目：プログラム開発

お互いが教え・学び合い開発を進める

全8チームによる最終プレゼンテーション

国内外専門家11名を招いた審査会

ハッカソン3日目：プレゼンテーション

国内外専門家11名を招いた審査会

ハッカソン3日目：プレゼンテーション

## 「組織のコミュニティ」を 目指して

これまで個人のノウハウや経験、マンパワーと時間などの制約に縛られていた従来型の設計手法を、「デジタル思考」へと転換し、これに「設計組織全体」で取り組む。これが設計本部の目指してきた「コミュニティ」です。組織の知やノウハウをアルゴリズム化して共有し、様々な要件をバラバラに迅速なコミュニケーションを行い、膨大なオプションを作成。あらゆるプランの可能性を総当たりした上で最適案を絞り込む。これまでも可能だったこの新たな検討手法を、当り前の設計プロセスとして実行可能にする。このビジョンを実現するため、Shimz DDEというプラットフォームを構築。汎用ツールを開発し、同時にこれらを自在に使いこなす設計者を育成するための研修を若手を中心に行っていました。

## 「知の共有」の場、 デジタルcommons

デジタルcommonsとは、10年目までの設計者の研修受講率がほぼ100%となったことを機に、2022年度からスタートした活動です。目的は、研修で学んだスキルの「ラーニングカーブ」を下げないこと、そして設計者同士の「双方向コミュニケーション」の場をつくることです。日常の担当業務だけでは限界がある、継続的な学びの機会をつくり、お互いに情報を発信し合うことで横のつながりを強める。「デジタルデザイン」の共有知（＝Commons）を生み出す場であり、「コミュニティ」のものであるリアルとバーチャルを組み合わせたその活動は、本社15階にある「デジタルスタジオ」での最新ツールのハンズオンセミナーや社外の最先端で活躍する専門家によるレクチャー、アーカイブ動画のオンライン配信や社内SNSでの情報交換など多岐にわたります。これまで開催されたイベントは26回、参加者は延べ1100名を超えました。

## 新たなチャレンジ 「Shimz AEC TECH」

この活動を更に促進するべく、2024年初頭に行った新たなチャレンジが「Shimz AEC TECH」です。お手本は「米Thornton Tomasetti Group」の「インテリジェントCORE Studio」が、毎年ニューヨークで開催する「Shimz AEC TECH NYC」。2023年に11回目を数える同イベントでは、世界中から建築のデジタルデザイン分野における第一線の実務者が集結し、ハイレベルな「ワークショップ」、共通課題を本音で議論する「シンポジウム」、デジタルデザインツールの新たなトレンドを多く生み出してきた「ハッカソン」が行われます。そこで共有されている大きな価値は、リアルな「ミニケーション」を通して人と人がつながり、教え合い、学び合うこと。お互いに触れ合い、「コンフォートゾーン」から抜け出して新たな行動を起こすきっかけとなっていることです。規模もレベルも異なりますが、デジタルcommonsが目指すべき理想の姿として、「トライアル（vol.0）」を行いました。

## 分野横断の「ラボレーション」 「ハッカソン」

Shimz AEC TECH vol.0全15イベントの企画は「レクチャー」と「ワークショップ」を経て、ハイライトに「ハッカソン」を行う構成です。「Think the Real Usefulness」をテーマに意見を出し合うプログラム開発を行いました。今回は構造設計者をコアメンバーに、意匠や設備系の設計者や他部門など、トータル35名が参加。初日の「ピッチ」で全員がそれぞれ取り組みたい課題を発表。その内容に共感した者同士で「M&A」を行い、8チームを組成。2日目に各チームに分かれてプログラム開発。最終日には国内外の専門家11名により審査及び表彰を行いました。集まった成果物を前に、これまでにない提案をわずか1日で形にできるという驚きとともに、確かな手ごたえと今後の可能性への期待を、その場にいた全員が共有しました。また、参加者全員がハッカソンそのものを楽しんでいて、多様性を組織の力として活かせる場をつくれたことも大きな成果です。今後デジタルcommonsを通して組織の「コミュニティ」の取組みを更に活性化させていきます。（佐竹 山一）

製図室、課題、時々チップ。



Copenhagenでの表彰(設計競技2等受賞)



Graduate School of Design  
Harvard University  
留学体験記：竹中 祐人  
入社6年目留学



\$6,990の札を見て手が止まる。日本で大好きだったグミが、ボストンでは7倍の値段だ。これまで意識しなかったアメリカ経済を体感した1年間。ただ、そこに、更に30%のチップを載せて払っちゃうくらい、最高の留学体験の報告です。

1年間のGSD生活

2022年6月〜2023年7月の約1年間、会社の留学制度を利用して、米国ボストンのHarvard University Graduate School of Design（通称GSDへ留学をしました。世界の最高峰の環境で刺激を受ける、という目的で会社に工面して頂きました。

GSDは963人の生徒が所属し、半分はネイティブ、もう半分が37か国からきた留学生で、世界的にも最も多様性に富んだ建築学校です。学問領域に捉われない教育が最大の特長で、日本という芸術大学院です。

サラリーマン、製図室に戻る

正規学生じゃない世界で、企業派遣生1人目の僕は、担任探してからスタートです。研究室へメールし、カフェで教授と待ち合わせ、熱意を伝えて、お勧めの授業を聞いてまわりました。全てが交渉で切り開かれる世界で、最後は製図室にコピーメーカー付きの自席まで頂きました。

僕の所属は博士課程で、提携を組むマサチューセッツ工科大学も含め、修士課程の授業に参加し放題の立場でした。学生たちは各学期に4〜5クラスの授業をとり、鬼の量の課題が降り注ぐので、エブリデイ期日です。上司もない、「残業の概念がない」24時間営業の製図室は、サラリーマン化していた僕の本能を刺激してくれました。誰よりも手描きスケッチする僕は、ブレゼンの時だけ、製図室の人気者になれました。清水建設の設計部で常に言われていた「とにかく手を動かせ」という教訓が、GSDでも通用したことで、自分にとって大きな自信になりました。

主張し、巻き込む

学長の言葉「設計者は政治・経済・社会を強く意識せよ」と共に新学期が始まりました。米国社会は多様化が進むと同時に、分断が深刻化しています。社会の分断は人種差別や労働紛争に広がり、加速するチップ文化にも警鐘が鳴らされました。

そんな個人が主張しあう社会の中で、授業でも同様に、議論が多く求められます。対立を恐れずに自分の意見を主張する姿勢が必須です。熱意のある学生には一方でみな優しく、困って騒ぐと誰かしら周囲の人が助けてくれました。主張して議論して、周囲を巻き込むことが、世界最高学府の教育の中で体験できた、生き抜く術でした。

人生の宝物

毎日何かしらのものづくりに関わる生活は、ハングリー精神を養ってくれました。体感的に15%ほどを座学(環境学やPython・C#演習、25%ほどを設計課題(環境最適化ファサード、ユニットC Wデザイン・設計コンペ)、そして残りの60%ほどを意匠設計の枠を越えたものづくり(ロボティクス・機械学習・生成AI・3Dプリンティング・セラミック焼成・3D映像投影・仮想現実・電子工作など)に時間を注ぎました。

1年を通じてGSDの様々な人々と交流したほか、週末は地元のカリスマチャンの集まりに行き、アカデミックとは異なる環境で祝福をしたり、家族や人生についてゆっくり考える時間を過ごしました。また、夏休みや冬休みには、家族と10か国ほど旅をし、様々なスケールの建築を、肌で感じました。限られた1年間の機会でしたが、人生の宝物になった体験でした。

帰国後

帰国後は、社内の設計社員を300人ほど集めて体験共有会を開催したり、職場の共用部でひとりで作った作品の展示会をしました。また、他部門を巻き込んだ討論会や有志を集めて設計競技へ参加するなど、僕のGSDでの経験をこの設計部に還元できるよう、日々注力しています。小さくともこの会社に変革を与えられるようなりーダーを目指して精進していきます。



Arduinoでの電子工作

FEM解析+吹付けモルタルのPC床板デザイン

“I Love You”音形のセラミック焼成物

1/1開口部ディテール

多軸ロボティクスの操作と3Dプリンティング

ダンサーの友人とプロジェクションマッピング演技

モーショントラッキングで楽器演奏

環境高性能ファサード

## 建築のデザイン手法を学ぶためのデンマーク留学

—事務所と北欧社会から学んだ人間らしい暮らし—



SCHMIDT HAMMER LASSEN  
留学体験記：中野 舞  
入社12年目留学

### デザインをデベロップする手法

デンマークの首都・コペンハーゲンにある「SCHMIDT HAMMER LASSEN (シュミット・ハマー・ラッセン、以下SHL)」事務所に1年間企業留学しました。新入社員のとことから留学に行きたいと思っていたので、チャンスを得られたとき、自分で探した留学先から受け入れてもらえることが決まったときはとても嬉しかったです。

SHLは、デンマークと中国に計3拠点を持つている事務所で、コペンハーゲンがメインオフィス、約100名の規模。30カ国以上のスタッフが在籍する多国籍な事務所です。

SHLでは、特定の部署やグループが存在せず、早いときは1.5ヶ月程度で次のプロジェクトに移行するというスタイルです。そのため私は1年間、基本設計段階を2件、コンペを3件担当し、毎回違うメンバーと、異なる用途の建物の設計に携わることができました。コンペも短い期間で少人数。毎日複数案のデザインアウトプットを出しながら頻度の高い打合を行うこと、スピーディーに意思決定します。SHLでは、コンテキストの読み込み方から、チームづくりまで、デザインをデベロップさせる手法を学ぶことができたので、清水建設で実践してみたいと思っています。

### 人間らしい暮らし

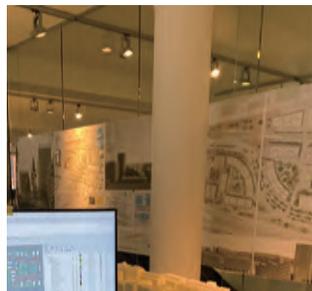
なぜデンマークは幸福度や競争力が高いと言われるのか、事務所の人や街の様子を眺めていると少しずつ見えてきたのは、「人間らしい暮らし方」です。生き物として喜びを感じている過剰な方、空間づくりの知恵が様々なところにありました。新しいものや豪華なものに価値を感じるのではなく、日の光を浴びて、家族や友人と自然を喜び合う文化は、これからの生き方や働く意義を考えさせられました。デンマークの人たちから学んだ新しい価値観を自分の生活に落とし込み、人間らしく過ごせる空間を提案できる設計者を目指します。



コンペ取り組み中は、毎日のように打合をする



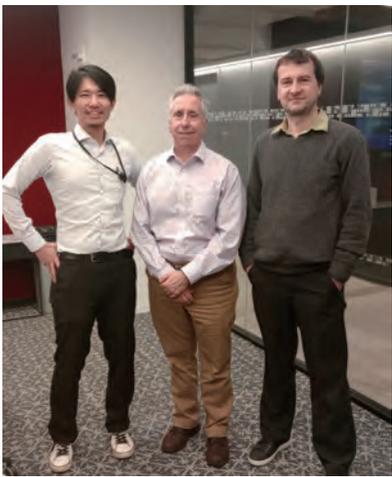
事務所は季節もので飾り付けられています



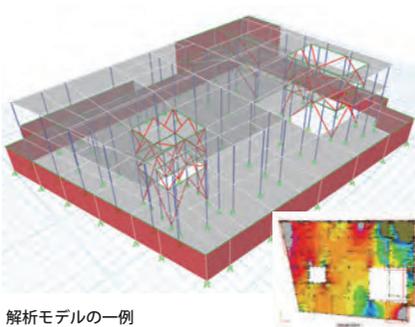
模型や手書きも併用して図面化を進める



## 米国留学で学んだ設計アプローチと現地での豊かな交流



Thornton Tomasetti  
留学体験記：池尻 佳朗  
入社10年目留学



解析モデルの一例



年に1度の全社カンファレンス



米国各地の清水建設の皆さんとも積極的に交流



米国エンジニア資格取得



### 米国にフルコミットした1年間

オフィスはとてもオープンで笑顔に溢れた雰囲気があり、業務以外にも社員同士が交流できるイベントがたくさんありました。色々な人が話し掛けてくれて、とても馴染みやすい職場でした。また、米国各地にある清水建設の拠点や現場も訪れ、日本では得られないネットワークを築くことができました。

皆さんから現地のリアルな話を聞くことで留学先とは別の視点から米国への理解が深まりました。この1年間は米国を味わい尽くすと決めて週末を利用して、様々な場所を訪れました。各地で多種多様な人々や文化に触れ、日本を外から見るという貴重な経験になりました。留学先の業務と両立しながら米国エンジニアの資格も取得し、とても刺激的で有意義な1年間になりました。



# 2023年度日本建築学会技術部門設計競技

ーカーボンニュートラル社会を実現する「新しい」環境建築コンセプトー



水を纏う  
一水の循環による都市の再編  
佳作入賞

## コンへ概要

25回目となる今回の技術部門設計競技では、「カーボンニュートラル社会を実現する『新しい』環境建築コンセプト」と題して技術提案が募集されました。断熱強化や高効率機器の導入など従来の省エネルギー技術の推進にとどまらない、魅力的な「新しい」環境建築のコンセプトが求められたコンペです。設計部の若手有志2チーム、計16名が参加しました。

### 2・5・6年生チーム

2・5・6年生チームのメンバーは合計9名で、DEW委員からのアナウンスで有志募集しチームを組みました。参加メンバーは名古屋支店や出張在宅といったようになかなか全員で集まるタイミングが取れなかったのですが、アプリを活用し業務のすき間時間でブラッシュアップを進めることができました。(富安)

### 水の循環による都市の再編

私たちの提案内容は、環境資源「水」をキーワードに既存ストックを環境装置に変換する仕組みです。今回の参加メンバーが集まった際に、コンセプト案を持ち寄り決めていきます。

水を集め・運び・貯めることによって水を循環させ、水がもたらす様々な環境効果を得ることを目指しています。既存建物に対して外皮・環境装置を付加し、再編する提案です。

週1回ペース程度で打合せを行い、提案書をまとめていきましたが、各自水に関わるアイデアを集め共有・発表するプロセスは、様々な視点・気づきがあり「楽しい」検討でした。

今回若手有志チームで取り組むことで、自由且つ自発的な意見交換・検討作業・双方向のコミュニケーション・ポジティブなフィードバックができ、非常に良い経験になったと思います。(富安)

### 3年生チームでの挑戦

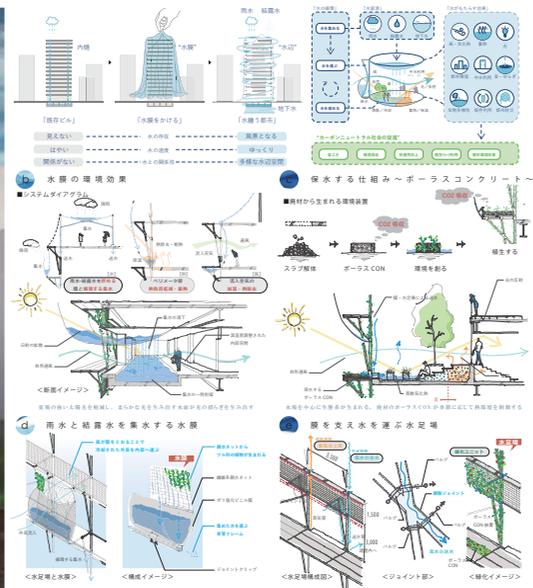
我々のチームは有志が集まった入社3年目の同期7名でこのコンペに挑みました。全員が同期だったからこそ固い団結力を発揮し、他のプロパティ分野についても無知を恐れず意見をぶつけ合い、より良い提案を目指して切磋琢磨し合いました。また、コンペ終了後には、提案内容に強く関心を持ってくださる方々と部署を越えた交流が生まれ、同じビジョンを持つ仲間が数多くいることに更なる発展の可能性を感じました。(田主)

### 資材「余命」を商品化する リユースマーケットの提案

本提案では、カーボンニュートラルのために、全ての建物に眠る建築資材の「余命」に着目しました。建物解体時には、実はほほ手を加えることなくそのまま再使用が可能な資材がありまが現在の建築生産においてリユースが普及しない背景には、そのためのシステム作りが不足しているのだと考えました。そこで、建築物の解体側が売り手、新築側が買い手となってリユース可能な資材を「商品」として売買するリユースマーケット「Re-ARC」を提案し、それらを運営するアプリケーションを考案しました。(坂井)

### アプリを軸に資材リユースを みんなにとって身近に

Re-ARCの運用にあたっては、現代の私たちにとってより身近なアプリを軸に考えました。解体しリユースの流れを、出品・購入・配送のステップに沿ってアプリがアシスト。街の余剰モビリティもサイクルに組み込むことで都市全体でリユースを促進します。また、こうしたRe-ARCのフラッグシップオフィスを計画し、余った建築資材のストック販売を行う場や、リユース材を活用したディテールのショールーム、DIY技術のレクチャースペースなど、Re-ARCの情報と人々を繋ぐ拠点として機能します。(田主)



Material Relay in a City  
 情報連携により資材「余命」を商品化するリユースマーケット「Re-ARC」の提案  
 佳作入賞

# 日本免震構造協会 アイデアコンペで優秀賞受賞

「1本ずつまちに植えよう 免災の守木」



田中 初太郎	入社28年 自担当 構造設計	端野 亮一	入社25年 自担当 意匠設計
佐々木 由美	入社15年 自担当 構造設計	山森 久武	入社6年 自担当 意匠設計
櫻木 健司	入社7年 自担当 構造設計	川地 美代子	入社5年 自担当 意匠設計
林 哲朗	入社3年 自担当 構造設計	中上 和哉	入社3年 自担当 意匠設計
渡邊 美土里	入社15年 自担当 DDC	塚本 浩	入社10年 自担当 DDC
嶋田 伊織	入社13年 自担当 DDC	大江 諭史	入社7年 自担当 DDC

JSSI 30TH ANNIVERSARY IDEA COMPETITION  
 日本免震構造協会創立30周年記念事業 免震構造アイデアコンペ  
 「免震で変わる! にぎわいの街・安心な暮らし」

## 免災の守木

関東大震災から100年、街や暮らしは少しずつ災害への備えを蓄えてきました。強く安全な街が実現しても、それだけで暮らしが豊かになっているとはいえません。日本免震構造協会創立30周年を記念して行われたこのコンペでは、免震構造の利点を生かし、安全・安心でサステナブルな「にぎわいの街・安心な暮らし」を提案することが求められました。

我々の提案は、木を植えるように街に1本ずつ免震装置を増やし、街全体の安全性を高めること、この免震装置を基盤として地震以外の様々な災害から街を守り、人々がいつでも安全・安心な生活を送ることが出来る「免災の守木」による環境づくりです。

既存建物で免震化する場合、従来の免震装置では建物を持ち上げたり設備の免震対応を付加するなど多大な労力を要します。そこで、既存建物の隣に「免災の守木」を植え、既存建物への影響を抑えつつ建物の地震力を最大50%負担し、層間変形を軽減させる提案をしました。また、「免災の守木」を並木のように植えることで街全体の安全性、都市のインフラ機能の維持にも繋がります。さらには木洩れ日空間による日射や強風の軽減による都市環境の改善、人々の憩いの場として機能すること、街のアクティビティを活性化、発電や雨水貯留機能による防災機能の向上などの効果を生み出します。

チーム内で議論を進める中で、「にぎわいの街」と「免震構造の利点」を繋げることで、「これまでになかった」「実現性」の両立に苦悩しました。「議論を重ねた結果、最初は1本から始まり、将来的には都市的スケールで展開できる可能性を持ち、かつ、500ケースの構造解析結果により安全性が裏付けされたこの免災の守木がよい」と意見がまとまりました。構造検討・最適化検討からパース作成まで、メンバー各々の得意分野を活かして楽しく提案をした結果、優秀賞を獲得できました。  
 (山森・櫻木)

**1本ずつまちに植えよう 免災の守木**

免災の守木は、木を植えるように街に1本ずつ免震装置を増やし、街全体の安全性を高めること、この免震装置を基盤として地震以外の様々な災害から街を守り、人々がいつでも安全・安心な生活を送ることが出来る「免災の守木」による環境づくりです。

既存建物で免震化する場合、従来の免震装置では建物を持ち上げたり設備の免震対応を付加するなど多大な労力を要します。そこで、既存建物の隣に「免災の守木」を植え、既存建物への影響を抑えつつ建物の地震力を最大50%負担し、層間変形を軽減させる提案をしました。また、「免災の守木」を並木のように植えることで街全体の安全性、都市のインフラ機能の維持にも繋がります。さらには木洩れ日空間による日射や強風の軽減による都市環境の改善、人々の憩いの場として機能すること、街のアクティビティを活性化、発電や雨水貯留機能による防災機能の向上などの効果を生み出します。

チーム内で議論を進める中で、「にぎわいの街」と「免震構造の利点」を繋げることで、「これまでになかった」「実現性」の両立に苦悩しました。「議論を重ねた結果、最初は1本から始まり、将来的には都市的スケールで展開できる可能性を持ち、かつ、500ケースの構造解析結果により安全性が裏付けされたこの免災の守木がよい」と意見がまとまりました。構造検討・最適化検討からパース作成まで、メンバー各々の得意分野を活かして楽しく提案をした結果、優秀賞を獲得できました。  
 (山森・櫻木)

## SHIMIZU STRUCTURAL DESIGN EXHIBITION - GENETIC DIVERSITY - YUSUKE MIYAGI / TOMOYUKI INABA

清水建設構造設計部130年の歴史において、多様化・進化させてきた組織・人・技の遺伝子を、構造設計者の挑戦・想いととも世界へ発信



シミズの構造設計展 遺伝的多様性  
 会期：令和5年10月24日~11月9日  
 会場：清水建設本社2階 及び 公式 YouTube

## 展示内容

シミズの構造設計の進化の歴史と現在の最新技術を伝えるとともに、最前線で活躍している今の若手設計者が、何を考え何を目指しているか、その想いを発信しました。

- ① 構造設計の系譜  
シミズの構造の歴史と進化を系譜とアーカイブで紹介
- ② 若手設計者の挑戦  
若手設計者の構造設計にかける想いをプロジェクトを通して紹介
- ③ 構造技術の最先端  
進化を続ける最先端技術を紹介

## 山田憲明先生との座談会

会期中のイベントとして、若手構造設計者とYSD山田憲明先生との座談会を開催しました。木質建築で多様な作品を生み出している山田先生と設計に対する姿勢や思いを率直に語り合い、設計の楽しさを共有するとともに大きな刺激をいただきました。

## 来場された方々からの反響

会期中は、1500名を超える方々にご来場いただきました。私達の取り組みを知っていただくとともに、「若手」が中心となりプロジェクトを生き活きと進めていることに驚いた、「進化の過程で細分化されたものが再び組み合わせられて新しいものが生まれていく」などの感想をいただきました。構造設計展を通してたくさんの方に私達の想いが伝わったと思います。今後の展開にもご期待ください。(宮城・稲葉)



山田憲明先生と若手設計者の座談会



実行委員会メンバーとゲストの山田先生

## 青山学院大学 マクレイ記念館

建築主： 学校法人青山学院  
主要用途： 学校(図書館)  
主要用途： 事務所  
意匠設計： 根岸 健一・宮崎 俊亮・田中 裕伸・西野 安香・大内 逸平  
構造設計： 中村 庄滋・増田 陽輔・田中 広夢・佐野 達彦  
設備設計： 笠原 真紀子・小泉 誠・藤井 孝行  
電気設計： 中澤 公彦・天野 祐太  
インテリア計画： フィールドフォー・デザインオフィス  
代田 哲也・石津 麻衣・徐 知延  
サイン計画： 株式会社 OK デザイン室 大内 かよ・長谷部 有美  
敷地面積： 105,434.93 m<sup>2</sup>  
建築面積： 3,682.95 m<sup>2</sup>  
延床面積： 16,731.24 m<sup>2</sup>  
構造： S造  
規模： 地上7階  
竣工年： 2024年  
所在地： 東京都渋谷区渋谷四丁目4番25号



## かほく市総合体育館

建築主： かほく PFI アリーナ株式会社 (SPC)  
主要用途： 体育館  
意匠設計： 稲場 芳鎮夫・岡山 英樹・吉村 環紀  
構造設計： 山岸 俊之・靖本 夏紀・滝山 貴志・油野 登梧  
設備設計： 山崎 ひとみ・富越 大介・原田 千穂  
電気設計： 中澤 公彦・澤田 彰・笹部 和代  
プロポーザル： 原田 毅・渡邊 美土里  
設計 JV： 株式会社山岸建築設計事務所  
インテリアデザイン(山岸建築設計事務所基本設計)：  
フィールドフォー・デザインオフィス 赤澤 知也  
サインデザイン： 株式会社 OK デザイン室 大内 かよ・長谷部 有美  
敷地面積： 45,152.39 m<sup>2</sup>  
建築面積： 5,955.09 m<sup>2</sup>  
延床面積： 8,837.72 m<sup>2</sup>  
構造： S造  
規模： 地上2階  
竣工年： 2024年  
所在地： 石川県かほく市浜北イ19-1



## ヤマサ醤油株式会社 東京支社

建築主： ヤマサ醤油株式会社  
主要用途： 事務所  
意匠設計： 加藤 均・五寛 智美・兵藤 功治・中川 慎也・吉田 聖  
構造設計： 久保山 寛之・庄司 裕明・中神 陽平・板原 奎樹  
設備設計： 佐藤 啓明・光本 ゆり  
電気設計： 宮本和明・馬込 仁総  
エントランスデザイン： フィールドフォー・デザインオフィス  
並木 良一・徐 知延  
敷地面積： 1,240.67 m<sup>2</sup>  
建築面積： 1,091.06 m<sup>2</sup>  
延床面積： 6,162.49 m<sup>2</sup>  
構造： S造(一部CFT造)  
規模： 地上7階  
竣工年： 2024年  
所在地： 東京都中央区日本橋蛸町一丁目23番8号



## SAKURA TREE

建築主： 株式会社エーバス  
主要用途： 事務所・飲食店  
意匠設計： 迫 淳海・安田 諭史  
構造設計： 津曲 敬・西田 愛  
設備設計： 佐藤 啓明・荻野 靖子・光本 ゆり  
電気設計： 吉田 圭佑  
外装・エントランスデザイン監修：  
フィールドフォー・デザインオフィス 大久保 敬之  
設計 JV： 株式会社山岸建築設計事務所  
敷地面積： 254.4 m<sup>2</sup>  
建築面積： 217.82 m<sup>2</sup>  
延床面積： 1,283.18 m<sup>2</sup>  
構造： S造(一部CFT造)  
規模： 地上8階  
竣工年： 2024年  
所在地： 神奈川県横浜市神奈川区金港町5-15



## キオクシア横浜テクノロジーキャンパスFlagship棟

建築主： 横浜大船特定目的会社(キオクシア株式会社)  
主要用途： 事務所・研究所  
意匠設計： 野村 啓一・小玉 欽也・梅澤 力・井原 直・山本 大地・クスマチカ  
構造設計： 小前 健太郎・見分 一郎・高倉 正幸  
設備設計： 片平 義和・中村 哲也・岩田 成美  
電気設計： 小田部 信彦・川口 学・小西 優斗・木津 佑太  
グランドエリアデザイン： フィールドフォー・デザインオフィス 赤澤 知也  
敷地面積： 53,633.36 m<sup>2</sup>  
建築面積： 8,181.36 m<sup>2</sup>  
延床面積： 43,053.80 m<sup>2</sup>  
構造： S造(一部RC造)  
規模： 地上13階・地下2階・塔屋1階  
竣工年： 2023年  
所在地： 神奈川県横浜市栄区空岡2-5-1



## 箱根ホテル小涌園

建築主： 藤田観光株式会社  
主要用途： ホテル  
意匠設計： 廣見 陽一郎・稲毛 誠・清水 亮輔  
構造設計： 諸星 雅彦・廣羽 直樹・滝澤 千尋  
設備設計： 土田 武志・増田 奈保子・吉田 健一・古本 美希  
インテリア： 町澤 真一郎・高 悠哉  
インテリア・FFE： フィールドフォー・デザインオフィス  
井筒 英理子・伊藤 公美  
敷地面積： 39,010.0 m<sup>2</sup>  
建築面積： 2,472.06 m<sup>2</sup>  
延床面積： 10,211.71 m<sup>2</sup>  
構造： RC造  
規模： 地上8階  
竣工年： 2023年  
所在地： 神奈川県足柄下郡箱根町



## GAREN

建築主： 中禁産業株式会社  
主要用途： 物販店舗・飲食店舗・サービス店舗・事務所  
意匠設計： 川西 高弘・寺田 繁史・大内 祥子・市原 裕之  
構造設計： 宮城 佑輔・小澤 祐周・伊藤 雅崇・小川 光陽  
設備設計： 川村 昂正・角田 昌隆  
電気設計： 宮崎 裕由・河西 信隆  
DM： 三井不動産株式会社  
基本設計： 外装デザイン監修： 株式会社日建設計  
敷地面積： 483.17 m<sup>2</sup>  
建築面積： 418.48 m<sup>2</sup>  
延床面積： 5,595.88 m<sup>2</sup>  
構造： S造(一部SRC造)  
規模： 地上13階・地下2階・塔屋1階  
竣工年： 2023年  
所在地： 東京都中央区銀座三丁目2番地 10.11.24.33



## TTRS 研究開発棟

建築主： 豊田汽車技術開発(上海)有限公司  
主要用途： オフィス・研究施設・整備場  
意匠設計： 宮内和貴・村上 文三郎・神原 栄男・高橋 晃一・元木 智也・伊藤 浩・杉平 寛・佐藤 旦・趙 磊・陳 嘉琳  
構造設計： 清成 心・中島 英己・沈 慶慶  
設備設計： 陳 偉光・蔡 炯・張 月  
電気設計： 飯島 淳一・孟 波  
インテリアデザイン： フィールドフォー・デザインオフィス 赤澤 知也  
デザイン監修： 株式会社日建設計  
設計院： 中石化上海工程有限公司  
敷地面積： 41,062.50 m<sup>2</sup>  
建築面積： 8,250.80 m<sup>2</sup>  
延床面積： 49,403.81 m<sup>2</sup>  
構造： RC造(一部S造)  
規模： 地上7階・塔屋1階  
竣工年： 2023年  
所在地： 中国上海市嘉定区安亭鎮嘉松北路 6333 号



## 名古屋シミズ富国生命ビル

建築主： 清水建設株式会社・富国生命相互保険会社・清水総合開発株式会社  
主要用途： 事務所・自動車庫  
意匠設計： 國立 篤志・大柳 聡・扇野 裕大・木村 慎太郎・浅見 拓馬  
構造設計： 島崎 大・石倉 敦・津曲 敬・小嶋 一輝・木内 佑輔  
設備設計： 高橋 満博・天田 靖佳・盛川 岳穂  
電気設計： 石川 栄一・菅 裕之・馬込 仁総  
木質技術： 監修： フィールドフォー・デザインオフィス 代田 哲也・大久保 敬之・尾花 さき  
16階共用部 インテリアデザイン： 三井デザインテック株式会社  
ランドスケープデザイン： 株式会社 KakSak 坂倉 直子  
照明デザイン： SLDA 澤田 隆一  
ファサードエンジニアリング： 株式会社 炭田 辰雄  
防災計画： 水落 秀木・井戸 和彦  
CG/VR作成： 渡邊 美土里  
敷地面積： 4,820.79 m<sup>2</sup>  
建築面積： 3,318.02 m<sup>2</sup>  
延床面積： 47,963.16 m<sup>2</sup>  
構造： RC造(一部S造)  
規模： 地上16階・塔屋1階  
竣工年： 2024年  
所在地： 愛知県名古屋市中区丸の内一丁目16番15号



## 野村不動産溜池山王ビル

建築主： 野村不動産株式会社  
主要用途： 事務所  
意匠設計： 梶谷 正和・國立 篤志・大柳 聡・乗越 由香・松井 遼・浅見 拓馬  
構造設計： 小林 俊樹・西川 航太・猪岡 活人・志水 真央  
電気設計： 高橋 満博・増田 奈保子・稲垣 大尚  
電気設計： 菅 裕之・成田 剣太・馬込 仁総  
木質技術： 監修： 野村不動産一級建築士事務所 井戸 和彦・広田 正之・森田 武・山下 平祐・遠藤 智紀  
事業企画・監修： 野村不動産一級建築士事務所 青藤 康洋・梅澤 宏行・穴戸 元紀・落合 徹・杉山 龍朗・伊藤 清人  
ランドスケープデザイン： 株式会社 KakSak 坂倉 直子  
敷地面積： 690.67 m<sup>2</sup>  
建築面積： 618.07 m<sup>2</sup>  
延床面積： 5,594.97 m<sup>2</sup>  
構造： S造(一部木造)  
規模： 地上9階・地下1階・塔屋1階  
竣工年： 2023年  
所在地： 東京都港区赤坂1-1-14



## 安川メカトロック末松九機株式会社 西日本本社

建築主： 安川メカトロック末松九機株式会社  
主要用途： 事務所  
意匠設計： <小田 将紀  
構造設計： 齊藤 剛規  
設備設計： 小林 遼  
電気設計： 森谷 真帆  
オフィスレイアウト協働： 株式会社オカムラ  
敷地面積： 3,147.62 m<sup>2</sup>  
建築面積： 1,864.01 m<sup>2</sup>  
延床面積： 12,097.84 m<sup>2</sup>  
構造： RC造(一部S造)  
規模： 地上8階・塔屋1階  
竣工年： 2023年  
所在地： 大阪府大阪市東成区中央3-4-32



## 御福餅本家 本社

建築主： 株式会社御福餅本家  
主要用途： 機械部品製造工場  
意匠設計： 佐々木 喜啓・坂本 達彦  
構造設計： 平松 悠  
設備設計： 宮澤 健  
電気設計： 川口 学  
敷地面積： 3,973.65 m<sup>2</sup>  
建築面積： 686.08 m<sup>2</sup>  
延床面積： 905.89 m<sup>2</sup>  
構造： RC造(一部S造)  
規模： 地上3階  
竣工年： 2024年  
所在地： 三重県伊勢市二見町茶屋 568-1



## 東大阪病院

建築主： 社会医療法人有隣会  
主要用途： 総合病院  
意匠設計： 寺本 竜史・竹内 圭佑  
構造設計： 廣羽 直樹・竹内 信一郎・田浦 史彬・田邊 学・嶋田 あゆみ  
設備設計： 鈴木 清隆・藤田 涉・大和 真  
電気設計： 中野 信哉・水野 大輔・山形 弥生  
インテリアデザイン： フィールドフォー・デザインオフィス 原田 靖之  
敷地面積： 3,147.62 m<sup>2</sup>  
建築面積： 1,864.01 m<sup>2</sup>  
延床面積： 12,097.84 m<sup>2</sup>  
構造： RC造(一部S造)  
規模： 地上8階・塔屋1階  
竣工年： 2023年  
所在地： 大阪府大阪市東成区中央3-4-32



## CKD 北陸工場

建築主： CKD 株式会社  
主要用途： 機械部品製造工場  
意匠設計： 秋山 暢大・小玉 欽也・細川 良大  
構造設計： 田田 拓司・稲垣 啓輔・高倉 正幸・黒崎 健太  
設備設計： 天田 靖佳・宮村 泰至  
電気設計： 瓦 大介・阿部 俊文  
敷地面積： 72,568.91 m<sup>2</sup>  
建築面積： 12,044.64 m<sup>2</sup>  
延床面積： 22,277.25 m<sup>2</sup>  
構造： S造  
規模： 地上2階・塔屋1階  
竣工年： 2024年  
所在地： 石川県小松市正蓮寺町



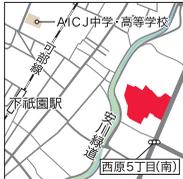
## ロジクロス相模原

建築主： 湘野辺デベロップメント特定目的会社(三菱地所の特定子会社)・日本生命保険相互会社  
CM： 株式会社三菱地所設計  
主要用途： 倉庫業を営む倉庫  
意匠設計： 石谷 悟・神宮 有史・田中 裕伸  
構造設計： 佐藤 勇成・巽 英明・須賀 貴之・原 憲治・大野 啓子・服部 恵多  
設備設計： 小坂 千里・瀧上 征・深野 純一・荒井 みなみ  
電気設計： 丹羽 健二・横山 順一・夏井 啓一郎  
エンジニアリング： 休職室デザイン  
フィールドフォー・デザインオフィス 赤澤 知也  
家具： 株式会社メック・デザイン・インターナショナル  
敷地面積： 78,073.59 m<sup>2</sup>  
建築面積： 35,762.01 m<sup>2</sup>  
延床面積： 170,891.16 m<sup>2</sup>  
構造： RC造(一部S造)・免震構造  
規模： 地上5階  
竣工年： 2023年  
所在地： 神奈川県相模原市中央区湘野辺5丁目977番1外



## ゆめテラス祇園店

建築主：株式会社イズミ  
主要用途：物販店舗  
意匠設計：西村 健、住川 雄一  
構造設計：石田 雄一  
設備設計：土田 武志・鈴木 淳彦・越戸 美春  
電気設計：古久保 真・岡内 宏起  
設計協力：株式会社車田建築設計事務所  
敷地面積：12,060.87 m<sup>2</sup>  
建築面積：8,750.55 m<sup>2</sup>  
延床面積：19,100.12 m<sup>2</sup>  
構造：S造  
規模：地上3階・塔屋1階  
竣工年：2023年  
所在地：広島県広島市安佐南区西原5-19-44



## 温故創新の森 NOVARE

NOVARE Hub, NOVARE Lab, NOVARE Academy,  
NOVARE Archives 也  
建築主：清水建設株式会社  
主要用途：事務所  
意匠設計：牧住 敏幸・定久 岳大・小林 央和・小川 浩平・稲葉 秀行・金馬 貴之  
構造設計：田中 初太郎・木村 彬山・杉山 友也・久米 建一・片山 浩一・長谷川 龍太・山下 美帆・今川 彩香  
設備設計：高橋 満博・重盛 洗・都築 弘政  
電気設計：丹羽 健二・宮本 和明・野崎 祐平  
展示計画：薩摩 亮治  
開発計画：坪内 舞子・株式会社プレイスメディア・ランドスケープデザイン：フィールドフォー・デザインオフィス  
ファイナードエンジニアリング：安田 辰雄  
敷地面積：1,956.78 m<sup>2</sup>  
建築面積：1,485.87 m<sup>2</sup>  
延床面積：18,336.85 m<sup>2</sup>  
構造：S造  
規模：地上13階  
竣工年：2023年  
所在地：北海道札幌市北区北6条西一丁目1番3  
照明デザイン：Lumimedia lab株式会社  
敷地面積：32,233.97 m<sup>2</sup>  
建築面積：13,199.30 m<sup>2</sup>  
延床面積：22,318.59 m<sup>2</sup>  
構造：RC造(一部S造)  
規模：地上4階  
竣工年：2023年  
所在地：東京都江東区潮見二丁目8番地20号

旧渋沢邸  
建築面積：919.70 m<sup>2</sup>  
延床面積：1,191.04 m<sup>2</sup>  
構造：木造  
規模：地上2階・地下1階



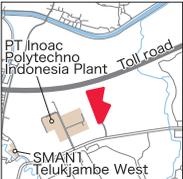
## The Link SAPPORO

建築主：清水建設株式会社  
主要用途：事務所・物販店舗・自動車庫  
意匠設計：今井 宏・加登 剛司・小松 辰也・宮崎 俊亮・三上 哲也・北川 春樹・小林 稜治  
構造設計：諸星 雅彦・後藤 延明・武田 裕介・桂 正彦  
設備設計：高橋 満博・今井田 尚文・牛山 章子・津坂 剛男・盛川 岳徳・藤井 孝行  
電気設計：伊藤 靖・江田 正志・野崎 祐平・成田 剣太・石田 将也  
ファイナードエンジニアリング：安田 辰雄  
敷地面積：1,956.78 m<sup>2</sup>  
建築面積：1,485.87 m<sup>2</sup>  
延床面積：18,336.85 m<sup>2</sup>  
構造：S造  
規模：地上13階  
竣工年：2023年  
所在地：北海道札幌市北区北6条西一丁目1番3



## KARAWANG OUTLET MALL

建築主：PT. KARAWANG OUTLET MALL  
主要用途：アウットモール  
意匠設計：伊藤 伸司・安藤 幹泰・Harjanto  
構造設計：土屋 宏明・松下 卓矢・西村 由紀・Stevanus Wibisono  
設備設計：金坂 真哉・Ilao Montas Benigno  
電気設計：松尾 昌一・Ratri Gunari  
LOCAL ARCHITECT：PT. AIRMAS ASRI  
LOCAL CIVIL, STRUCTURE AND METP ENGINEER：PT. MEINHARDT INDONESIA  
DESIGN ARCHITECT：MITSUBISHI JISHO DESIGN ASIA  
LANDSCAPE ARCHITECT：COEN DESIGN INTERNATIONAL PTE LTD  
LIGHTING CONSULTANT：PT. LUMINA GROUP  
THERMAL CONSULTANT：ARUP SINGAPORE PTE LTD  
敷地面積：151,260 m<sup>2</sup>  
建築面積：32,295 m<sup>2</sup>  
延床面積：50,785 m<sup>2</sup>  
構造：RC造  
規模：地上3階  
竣工年：2023年  
所在地：East Jakarta-Karawang  
Jalan Trans Heksa, Wanasari,  
Telukjambe Barat, Karawang,  
West Java 41361 Indonesia



## 福岡大学病院 本館

建築主：学校法人福岡大学  
主要用途：病院  
意匠設計：榎並 和人・山本 武・後藤 なつみ・鈴木 多珠奈・浅井 健夫  
構造設計：菅野 英幸・長谷川 龍太・原 憲治  
設備設計：辻 裕次・新野 将平  
電気設計：寺島 大・島村 実季・山形 弥里  
設計JV：株式会社東畑建築事務所  
インテリア計画：フィールドフォー・デザインオフィス  
原田 晴之・井筒 英理子  
敷地面積：147,266.96 m<sup>2</sup>  
建築面積：6,267.40 m<sup>2</sup>  
延床面積：51,328.70 m<sup>2</sup>  
電気設計：祖父江 一仁・森谷 真帆  
構造：S造(一部RC造)  
規模：地上12階・地下1階・塔屋1階  
竣工年：2024年  
所在地：福岡県福岡市城南区七隈7丁目45番1



## GRAND MARINA TOKYO

### パークタワー勝どきミッド

建築主：勝どき東地区市街地再開発組合  
主要用途：共同住宅・事務所・店舗・保育所・体育館・自動車庫  
意匠設計：田村 隆・石塚 義隆・永原 聖・真 紅美・鈴木 かおり・林 淳蔵・岡田 達史・中出 達也・吉沢 形成・林 万里亜・末金 優士・原田 洋・中村 徹・渡部 邦和・加藤 ひかる・浅井 信雄・上田 和夫・小林 央和・村上 又三郎  
構造設計：松浦 正一・濱 智真・室 重行・佐々木 由美・安達 一喜・佐藤 圭祐・原 憲治・谷 量子・田邊 直也・田中 拓・熊谷 太希  
設備設計：金田 生・横山 高仁・土田 武志・小泉 誠  
デザイン監修：株式会社ホシノアーキテツツ  
基本設計：現代建築研究所・日本設計共同企業体  
敷地面積：10,712.20 m<sup>2</sup>  
建築面積：4,745.85 m<sup>2</sup>  
延床面積：138,109.97 m<sup>2</sup>  
構造：RC造(一部S造)免震構造  
規模：地上45階・地下2階・塔屋1階  
竣工年：2023年  
所在地：東京都中央区勝どき四丁目6番2



## 聖路加国際大学 聖ルカ礼拝堂

建築主：清水建設株式会社  
主要用途：礼拝堂  
意匠設計：戸塚 祐造・釜谷 潤  
構造設計：小林 俊樹・三村 香織  
技術コンサルティング：株式会社日建設  
敷地面積：12,909.73 m<sup>2</sup>  
建築面積：4,146.72 m<sup>2</sup>  
延床面積：24,130.79 m<sup>2</sup>(改修部分面積：431.64 m<sup>2</sup>)  
構造：SRC造  
規模：地上6階・地下1階・塔屋3階  
竣工年：2023年  
所在地：東京都中央区明石町10-1



## 旧渋沢邸「中の家(なかんち)」主屋改修

建築主：埼玉県深谷市  
主要用途：展示場  
意匠設計：関 雅也・柿澤 英之  
構造設計：貞広 修・菅野 英幸・西川 航太  
設備設計：飯田 太朗  
電気設計：塩澤 菜由子  
プロポーザル推進：渡邊 泰一郎  
展示設計施工：株式会社トータルメディア開発研究所  
敷地面積：3,331.36 m<sup>2</sup>  
建築面積：369.26 m<sup>2</sup>  
延床面積：521.49 m<sup>2</sup>  
構造：木造  
規模：地上2階  
竣工年：(改修)2023年  
所在地：埼玉県深谷市血洗島字洲ノ上247-1,-2  
撮影協力：渋沢栄一記念館



## Digital Commons

建築主：清水建設株式会社  
主要用途：コミュニティ  
意匠設計：佐竹 浩芳・鈴木 康二郎・竹内 萌・山下 藤太郎  
構造設計：嶋田 伊織・大江 諭史  
設備設計：中島 風・今津 文沙  
プレゼ：加藤 直礼・加藤 亮次・渡邊 美土里  
企画・実施協力：株式会社アルゴリズムデザインラボ  
代表取締役 重村 珠穂  
所在地：東京都中央区京橋2-16-1



# stream DEW 委員会活動と展望

一人一人にとってより魅力的な設計部に向けて



stream DEW 2023-2024

## 『外に出ていく、外とつながる』

今年度は、若手設計者を中心に、本社・支店設計部合わせて総勢32名でDEW委員会としての活動を展開しています。

DEW委員としての任期は基本的に1年と短いですが、その期間を最大限活用し、若手設計者が活発な情報交換を行い、知見を集積し、また、いざという時に気軽に相談できるような人脈が構築出来たら良いと考え、活動を進めてきました。

そこで、今年度は、DEW活動を委員内にとどめることなく、積極的に社内・社外とつながることが大切だと考え、『外に出ていく、外とつながる』を活動テーマとしました。

## 活動実績 DEWを通じた『学び』と『発信』

通常業務と並行しての活動となるため、当DEW冊子の編集など、時に忙しくなることもありましたが、一人一人にとって、それ以上に得ることの多い活動となっていることを期待しています。いくつか活動をご紹介します。

### ・プロジェクトを通して『学ぶ』

社内プロジェクトの現場や竣工見学、社外事例の視察を継続的に行っています。設計者のレクチャーや意見交換を通して、そのデザインに込められた思いや、設計プロセス、要素技術について学びとる場としてきました。

### ・DEW活動や日常を『発信する』

DEW活動を通しての気づきや委員個人個人の活動や興味をDEW通信としてオンライン上で発信しています。発信を通して新たなコミュニティが形成されつつあります。



NOVARE視察状況



DEW通信

## 今後の活動の展望 設計者一人一人のアイデアを 共有するプラットフォームの構築

今年度のDEW活動も後半戦に突入り、設計部がより魅力的となるような、また個性溢れる設計者一人一人の思考が組織としての強みに還元されるような「なにか」が出来ないか、その「なにか」を探して委員内で議論を進めています。

一つの手がかりとして、建築は最終アウトプットの作品性に目が行きがちですが、その過程にある思想やデザインプロセス、実現しなかったアイデアにも学ぶべき多くの要素が詰まっているのではないかと考えています。

現在、委員内で、これまで実現したプロジェクトの深堀りや、アンビルドのプロジェクトで考えたことをプラットフォーム上で共有し、意見交換することを試行しつつあります。

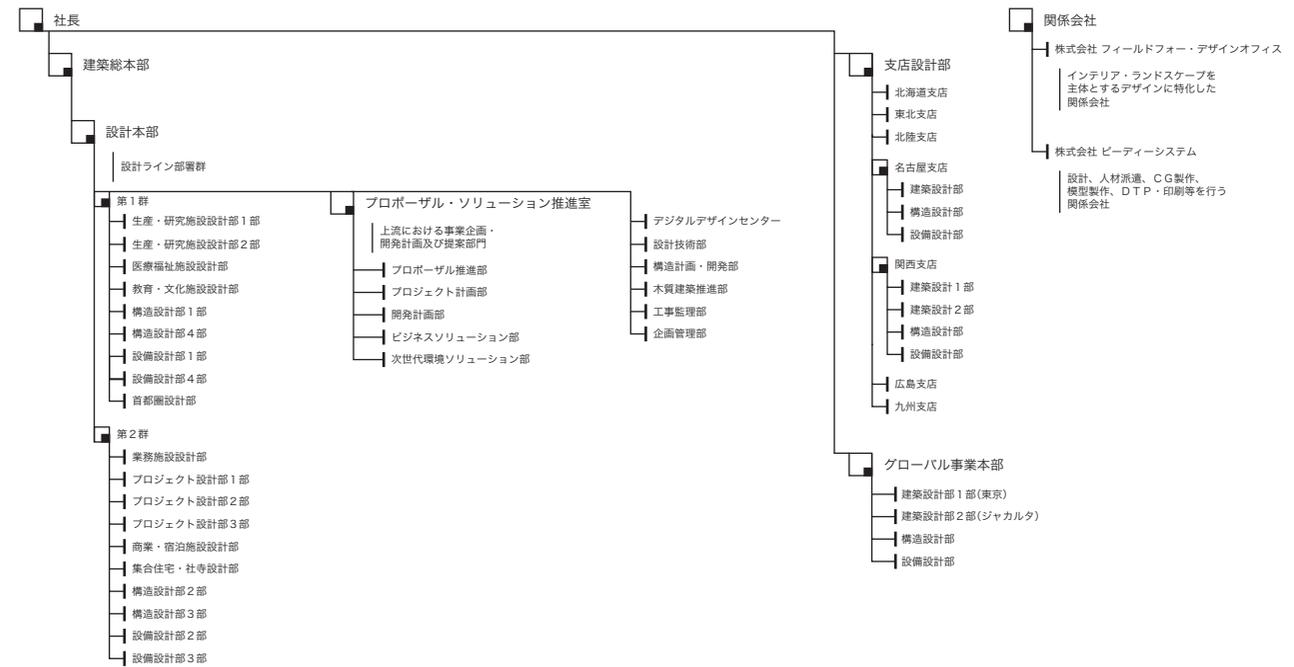
今後、設計部内にリリースし、設計者同士がお互いのアイデアに触れ、刺激を受け、モチベーションを高める場としていきたいと考えています。ぜひ、多くの皆さんにも参加いただき、楽しく学べる場となることをDEW委員一同期待しています！(長澤)



DEW委員会活動風景



新たなプラットフォーム構築に向けた試行状況



発行日 2024年8月  
 編集・発行 清水建設株式会社  
 /設計本部  
 〒104-8370 中央区京橋2-16-1  
 03-3561-1111(代)  
 編集事務局 設計本部  
 企画管理部  
 印刷 (株)ビーディーシステム  
 年1回発行予定

非売品



